2021（令和 3）年度

現代英語における動詞句修飾副詞の実証的記述研究

指導教授　藤本　滋之

文学研究科　英文学専攻

18DC001

西村　知修

Abstract

A Usage-based Study of Verb Phrase Adverbs in Present-day English

18DC001 Tomomichi Nishimura

Dissertation Supervisor: Shigeyuki Fujimoto

March-2022

目次

第 1 章　序論 1
第 2 章　英語の様態副詞研究の課題と可能性 6
2.1 副詞の分類と様態副詞 6
2.1.1 副詞の大まかな分類と様態副詞 7
2.1.2 様態副詞の特徴 11
2.2 様態副詞および同形の副詞の性質 14
2.2.1 離接詞 15
2.2.2 価値判断の主語副詞 15
2.2.3 心的態度副詞 17
2.2.4 脱焦点化した様態副詞 18
2.2.5 vP 様態副詞と VP 様態副詞 20
2.2.6 様態副詞および同形の副詞の生起位置のまとめ 21
2.3 Haumann（2007）の様態副詞に関する仮説について 22
2.4 副詞と統語構造 26
2.4.1 統語論における初期の副詞分析 26
2.4.2 付加分析 27
2.4.3 指定辞分析と副詞の階層 28
2.4.4 様態副詞および同形副詞と統語構造 32
2.5 意味役割を組み込んだ動詞句構造と副詞 36
2.6 分析対象とする副詞の選定 38
2.7 まとめ 41
第 3 章　下位範疇化副詞再考 42
3.1 下位範疇化副詞の特殊性とその反例 43
3.2 下位範疇化副詞の解体 46
3.2.1 John worded the letter carefully.の場合 47
3.2.2 The job paid us handsomely.の場合 50
3.2.3 Steve dresses elegantly.の場合 53
3.3 コーパスによる検証 55
3.3.1 〈word + carefully〉と類似表現の検証 56
3.3.2 〈pay + handsomely〉と類似表現の検証 63
3.3.3 〈dress + elegantly〉と類似表現の検証 66
3.4 まとめ 72
第 4 章　中核的純様態副詞の実態 74
4.1 中核的純様態副詞 75
4.1.1 中核的純様態副詞の基本的性質 75

4.1.2 中核的純様態副詞と周辺用法.....78
4.2 中核的純様態副詞と動詞句構造.....80
4.2.1 Theme/Location 指向としての中核的純様態副詞.....80
4.2.2 Theme/Location 指向と Agent 指向の様態副詞.....82
4.3 loudly の検証.....85
4.3.1 動詞後方の loudly の生起数と共起動詞.....85
4.3.2 音の発生が指定されている動詞との共起.....88
4.3.3 音の発生が指定されていない動詞との共起.....90
4.3.4 音の発生がないことを含意している動詞との共起.....92
4.3.5 動詞前位の loudly の生起数と共起動詞.....94
4.3.6 loudly proclaim の検証.....96
4.3.7 loudly denounce と loudly berate の検証.....99
4.4 tightly の検証.....105
4.4.1 動詞後方の tightly の生起数と共起動詞.....106
4.4.2 隙間を埋めることが指定されている動詞との共起.....107
4.4.3 隙間を埋めることが指定されていない動詞との共起.....113
4.4.4 動詞前位の tightly の生起数と共起動詞.....115
4.4.5 tightly control と tightly restrict の検証.....116
4.5 brightly の検証.....119
4.5.1 動詞後方の brightly の生起数と共起動詞.....119
4.5.2 光の発生が指定されている動詞との共起.....120
4.5.3 光の発生が指定されていない動詞との共起.....121
4.5.4 動詞前位の brightly.....123
4.6 woodenly の検証.....126
4.6.1 動詞後方の woodenly.....126
4.6.2 動詞前位の woodenly.....128
4.7 まとめ.....130
第 5 章　まとめ.....132
参照文献.....135

第１章　序論

本研究は英語の様態副詞を中心とした動詞句を修飾する副詞の記述的研究である。大規模電子テクストデータの集成であるコーパスを利用して、英語の副詞の記述的研究をより深化させ、副詞における統語と意味機能の関係性を明らかにする。コーパスにおける実例の分析に際しては、どのような方針をもって調査していくのかが重要である。本論文では、過去の副詞研究の概観を行い、動詞句修飾の副詞の実態解明のためには意味を組み込んだ動詞句構造が重要であることを示し、構造と意味の両面を結び付けた分析を行う。そのため、副詞が文構造のどの位置にどの程度の頻度で生起するのかという情報が非常に重要となり、またそれがどのような意味を表しているのか個別具体的に検証していく必要がある。そのようにしてコーパスを中心とした実例を精査することにより、現代英語における様態副詞を主とした動詞句修飾副詞の典型的用法から周辺的な用法までを調査して実態解明を行い、分析に先立って仮定した動詞句構造とそこから導かれる理論的な帰結が妥当なものであることを示す。記述的研究の蓄積によって多くの理論が発展し、理論的研究によってもたらされた様々な分析を念頭に置いて再び記述的研究を深化させるという流れが繰り返されてきた。本研究もそのような流れに沿って理論と記述の発展に寄与することを目指すものである。

本研究は動詞句修飾副詞、その中でも特に様態副詞を扱う。副詞という品詞は雑多な要素が混ざりこんでおり、品詞分類のごみ箱と例えられることもある。多くの先行研究が副詞の様々な言語事実を解明してきたにもかかわらず、その実態は必ずしも明らかになっていないというのが現状である。そのような現状は以下の言葉にも表れている。

(1) Adverbials are rich and as yet relatively unexplored system, and therefore anything we say about them must be regarded as quite tentative. (Chomsky (1965: 219))

(2) We still have no good phrase structure theory for such simple matters as atributives [...] and adjuncts of many different types. (Chomsky (1995: 382))

(3) Nobody seems to know exactly what to do with adverbs. (Ernst (2002: 1))

このように扱いが困難な副詞に対して、伝統文法的な記述研究においては Greenbaum (1969)、Quirk et at. (1972)、Quirk et at. (1985)、Huddleston and Pullum (2002) などの重要な研究が生まれ、副詞全体の分類・記述が大きく前進している。理論面においても例えば生成統語論の分野においては Jackendoff (1972)、Cinque (1999)、Ernst (2002) などの、現在においても影響力のある理論的研究が存在している。さらに Alexiadou (1997)、Laenzlinger (1998)、Geuder (2000)、Engels (2004)、Haumann (2007)、Edelstein (2012)、Payne (2018) など数多くの重要な論考が生まれてきている。

Cinque や Ernst などの副詞の理論的な研究では副詞のシステム全体の構築が進んだ。その一方でシステムに沿わない言語事実も多く指摘された。全体のシステムを構築する際には周辺的な事象が考察の対象外になってしまうことはよく起こることであり、システムが説明困難な例は多く指摘されている。全体のシステム構築が優先される場面においては、このような言語事実は必ずしも詳細に分析されてきたわけではない。これはシステム構築の弊害の 1 つと言えるだろう。そのような具体例の 1 つとして Haumann (2007) が指摘しているのは、以下のような loudly が動詞の前に生じている例である。[1]

(4) *She has <u>loudly</u> snored. (Haumann (2007: 34))

[1] 例文中の下線、波線、ボールドなどは特に断りがない限り筆者によるものである。また下線を施した副詞は原典ではイタリック体になっている場合がある。

Haumann はこの例がなぜ非文であるかを Ernst の理論で簡潔に説明するのは意外と困難であると述べている。[2]だがこの問題を指摘している Haumann も loudly という副詞自体を詳細に調査しているわけではない。loudly という副詞自体は詳細に研究されるに値するものだとは思われていなかったのである。この loudly のような副詞を Schäfer (2002) は中核的純様態副詞（core pure manner adverb）と呼んでおり、様態副詞の意味に限定され、動詞の前側に生起しにくいという、他の大多数の様態副詞にはない特徴を持つ副詞なのである。本研究ではこの loudly を含む中核的純様態副詞をコーパスで調査することによって興味深い言語事実を明らかにする。

システム構築の際の問題の 2 つ目として分類の問題が挙げられる。副詞全体のシステムを構築する際には様々な性質を持つ副詞を統語や意味的特徴によって分類していかなければならない。ある副詞のグループに対してラベルを貼ることによって、そのグループをそれ以上詳細に検証することが阻害されることがあり得る。以下の例はその 1 例である。

(5) Steve dresses elegantly. (Jackendoff (1972: 64))

この (5) の例の elegantly は動詞が選択する必須要素である項（argument）として機能しているとされる。このような動詞の項として機能しているとされる-ly 副詞を Jackendoff (1972) は下位範疇化（subcategorization）と関連して述べているので、本論文では下位範疇化副詞と呼ぶことにする。多くの副詞は文の必須要素ではないが、このような下位範疇化副詞はその例外であるとされる。それは elegantly という副詞自体が特殊であることを必ずしも意味しているわけではない。dress という動詞が副詞を項にとることができるという点で特殊なのである。しかしこの考えは elegantly 自体の特殊性を見逃す結果になってしまったと思われる。事実、この elegantly のような副詞が結果副詞（resultative adverb）という

[2] 実際にどのような問題があるのかは 2.4.2 節で述べる。

グループを形成していることが本格的に明らかになるのは Geuder（2000）の研究まで待たなければならなかった。

このような問題点を考えると、副詞に関してはまだ記述的研究を深めていく余地が多く残されていることがわかる。本論文では下位範疇化副詞および中核的純様態副詞と呼ばれる副詞を中心としてコーパスの 1 つである COCA（The Corpus of Contemporary American English）を利用して調査と検討を行う。[3]これらのグループの副詞が統語上でどの位置に生起するのかその分布を明らかにし、また生起位置によって副詞の意味機能がどのように異なるかを詳細に検討することで、副詞の生起位置と意味機能との相関関係の実態解明を目指す。コーパスを用いて実際にどの程度の頻度で分析対象の副詞が生じているのかを明らかにすることで、量的な面も考慮に入れた分析と考察が可能になると考える。

本論文の構成は次のようになっている。第 2 章では副詞研究の概観を行い、様態副詞の基本的な性質と、動詞の前後に様態用法を含めた様々な用法が生起することを示す。また副詞を統語構造にどのように位置付けるのか、先行研究を概観しながらその問題点を指摘する。次に様態副詞などの動詞句修飾副詞を分析するために、マクロな意味役割を組み込んだ構造を仮定する。この構造の妥当性と有用性を示すために下位範疇化副詞と中核的純様態副詞の分析が適切であることを示す。

第 3 章では下位範疇化副詞を再考し、これらの副詞が持つとされた省略不可能性と前置不可能性に対して、従来の統語的・意味的説明では説明できないことを示す。その上でこれらの副詞は動作主の行為を修飾する様態副詞ではなく、状態変化修飾副詞と呼べるもので

---

[3] COCA は Mark Davies 氏の構築によるものであり、総語数 10 億語を超える大規模な均衡ウェブコーパスである。オンラインでフリーに使用できる点、様々なジャンルのデータがあり、定期的に拡充される点などの利点から、本研究では COCA を利用している。また COCA はアメリカ英語のコーパスとしながらも、必ずしもアメリカ英語を代表していないということが問題となることもあるが、本論文ではアメリカ英語に絞ることは目的ではないので、その点は問題ないと思われる。COCA の概説は石川・長谷部・住吉（2020）などを参照。

あり、従来の下位範疇化副詞という分類が必要ないことを主張する。この主張が妥当であることをコーパスの実例を詳細に検討することによって実証する。

第 4 章では中核的純様態副詞を検証する。中核的純様態副詞が動詞の後ろ側に基本的に限定されるという性質は、これらの副詞が行為の様態を表す様態副詞ではなく、位置変化・状態変化に関わる修飾をする副詞であると仮定すれば導かれるものであると主張する。さらに中核的純様態副詞が特定の動詞と共起する場合に高い確率で動詞の前側に生じるという、中核的純様態副詞の基本的な性質からは逸脱する事例があることを指摘する。このような事例が生じている例を個別に検証することによって、これらの副詞が本来持っていないと考えられていた周辺的な用法が生じていることを明らかにする。

第 2 章　英語の様態副詞研究の課題と可能性

本章では英語の副詞研究の概観を行う。2.1 節では副詞の大まかな全体像を把握する。2.2 節では、主に様態副詞および様態副詞と同形で他の用法を持っている副詞の統語的・意味的特徴の記述と整理を行い、動詞の前後に様態用法を含めた様々な用法が生起することを示す。2.3 節では動詞の前側に動詞句修飾をする副詞は生起しないという Haumann (2007) の主張に反駁し、本論文の立場を明確にする。2.4 節では副詞と統語構造との関係を示し、解決すべき課題を明らかにする。2.5 節では動詞句構造に、その動詞が必要とする意味役割という要素を組み込んだ構造を仮定する加賀（2001）の提案を採用し、この構造の仮定によって Agent 指向や Theme/Location 指向の副詞という分類が可能になることを示す。2.6 節ではこの分類の妥当性を示すための分析の対象として下位範疇化副詞と中核的純様態副詞が適切であることを示す。

2.1 副詞の分類と様態副詞

副詞というカテゴリー全体の特徴については、以下の Huddleston and Pullum (2002) の定義が明確である。

(6) Adverbs characteristically modify verbs and other categories except nouns, especially adjectives and adverbs. (Huddleston and Pullum (2002: 563))

上述のように、副詞は基本的に動詞と名詞以外のカテゴリーを修飾する。[4, 5] 本論文では主に-ly 副詞が動詞を修飾している場合を扱っていく。

2.1.1 副詞の大まかな分類と様態副詞

本節では様態副詞を主とした動詞句修飾副詞が、様々な種類の副詞の分類のどこに位置するのかを概観し、動詞句修飾副詞は命題内容に直接的に関与して修飾の働きをすること、さらに動詞句修飾副詞の下位分類である様態副詞は動詞によって表される過程・活動のありさまを修飾する働きであることを示す。

Quirk et al.（1985）では、副詞全体を付接詞（adjunct)、下接詞（subjunct)、離接詞(disjunct)、合接詞（conjunct）の大きく 4 つに分類している。[6]これらは文の中核的要素へのかかり方の違いに応じて分類されている。付接詞と下接詞は基本的に節構造の中に組み込まれるのに対して、離接詞と合接詞は文の中のより周辺的な部分と関係を持っている(Quirk et at. 1985: 440)。

(7) He spoke to me about it <u>briefly</u>.

---

[4](6) の定義で「名詞以外のカテゴリー」とあるが、そのカテゴリーには名詞句も含まれる。次の例では almost は the whole book という名詞句全体を名詞句の外側から修飾している。
(i) She read [almost the whole book] in one day. (Huddleston and Pullum 2002: 562)
だが名詞句の内側に-ly 副詞が現れる可能性が Borer（2013）や谷（2019）によって指摘されている。ただし Borer の例は谷によって否定されている。

[5] Langacker（1987）は自身が提唱する認知文法の枠組みにおいて、名詞以外の雑多な要素に共通する概念として、それらはすべて関係概念を表し、「副詞は関係概念を修飾する」という定義を提唱している。

[6] 英語の副詞の包括的な研究として最も重要なものの 1 つが Greenbaum（1969）であり、この本を土台として Quirk et at.（1972）や Quirk et at.（1985）の副詞関係の項目が執筆されている。Greenbaum（1969）と Quirk et al.（1985）では分類の方法が少し異なる部分もあり、ここでは後発の Quirk et at.（1985）の分類を挙げている。

(8) We haven't yet finished.

(9) a. Frankly, I'm tired.

b. Fortunately, no one complained.

c. They are probably at home.

d. She wisely didn't attempt to apologize.

(10) All our friends are going to Paris this summer. We, however, are going to London.

(Quirk et at. (1985: 440-441))

(7) が付接詞、(8) が下接詞、(9) が離接詞、(10) が合接詞の例である。確かに(7) や (8) の副詞の場合は文構造の中にあり、命題内容により直接的に関与しているが、(9) や (10) の例の副詞は命題内容と間接的な関係になっている。例えば (9a) の例で frankly は「私は疲れている」という命題内容を話者が発話する際の様態を述べており、「率直に言えば、私は疲れている」というような意味になる。「私は疲れている」という内容自体に意味を加える働きをしているわけではないので、このような副詞は命題外側にあり、節外副詞と呼ばれることもある。[7](9b) から (9d) も命題には間接的に関与しており、それぞれ評価副詞、法副詞、主語指向副詞 (subject-oriented adverb) などと呼ばれる。このような命題の外側にある離接詞や合接詞は、より一般的には文副詞や接続副詞などの呼ばれ方をする。[8]

---

[7] 鈴木 (1990) を参照。

[8] Huddleston and Pullum (2002) は離接詞や合接詞を節指向の付加詞 (clause-oriented adjunct) と呼び、以下のように分類している。

(i) CLAUSE-ORIENTED ADJUNCTS

i	DOMAIN	Politically, the country is always turbulent.
ii	MODALITY	This is necessarily rather rare.
iii	EVALUATION	Fortunately this did not happen.
iv	SPEECH ACT-RELATED	Frankly, I'm just not interested.
v	CONNECTIVE	Moreover, he didn't even apologise.

(Huddleston and Pullum (2002: 576))

本研究で扱うことにしている様態副詞などの動詞句修飾副詞は、より直接的に命題内容に関与する付接詞の一種である。[9]Quirk et at.（1985）では付接詞や下接詞の意味的下位分類は以下のようになっている。

（11）a. SPACE>position, direction, distance

b. TIME>position, duration, frequency, relationship

c. PROCESS>manner, means, instrument, agentive

d. RESPECT

e. CONTINGENCY>cause, reason, purpose, result, condition, concession

f. MODALITY>emphasis, approximation, restriction

g. DEGREE>amplification, diminution, measure

（Quirk et at.（1985: 479）より抜粋）

付接詞・下接詞の下位分類として（11c）が示すように過程（process）を修飾する副詞があり、様態副詞は過程を修飾する副詞のさらに下位の分類として設定されている。つまり、様態副詞は動詞によって表される過程・活動のありさま、すなわち行為の様態を表すと言ってよいであろう。過程を修飾する副詞に属している様態、手段（means）、道具（instrument）、動作主体（agentive）の副詞（句）は、それぞれ以下のようなものである。

（12）a. She spoke to him <u>coldly</u>.

b. They sprayed tear gas <u>indiscriminately</u> on the protesters.

（13）a. These linguistic units were separated <u>intonationally</u>.

---

[9] 付接詞や下接詞に相当する副詞を Huddleston and Pullum（2002）では動詞句指向の付加詞（VP-oriented adverb）と呼ぶ。

b. He decided to treat the patient surgically.

(14) a. He examined the specimen microscopically.

b. You can cut the bread with that knife.

(15) He was killed by a terrorist.

(Quirk et at. (1985: 559))

(12) は様態を表し、それぞれ「冷たく話しかけた」「無差別に噴射した」というように、どのような様態で動作を行ったのかを表現している。(13) は手段を表し、それぞれ「イントネーションで分けられていた」「外科的に治療をする」というように、どのような手段で動作を行ったのかを表現している。同じように (14) では副詞 (句) は動作をどのような道具で行ったのか、(15) では動作の動作主体は何であるのかをそれぞれ表現している。[10]

---

[10] Huddleston and Pullum (2002) が動詞句指向の付加詞と呼ぶ副詞類の下位分類は以下のようになっている。

i	MANNER	She walked unsteadily to the door.
ii	MEANS OR INSTRUMENT	Planets can be detected radio-telescopically.
iii	ACT-RELATED	They deliberately kept us waiting.
iv	DEGREE	The share price has increased enormously.
v	TEMPORAL LOCATION	She subsequently left town.
vi	DURATION	We were staying in a motel temporarily.
vii	ASPECTUALITY	Some of the guests are already here.
viii	FREQUENCY	Do you come here often?
ix	SERIL ORDER	The play was next performed in 1901.

(Huddleston and Pullum (2002: 576))

この (i) から (iii) が、(11) における PROCESS に相当する。Huddleston and Pullum は (i) から (iii) に PROCESS のような大区分を設けてないが、様態副詞という区分自体は Quirk et al. (1985) が設定しているものと大差ないと考えてよいであろう。

2.1.2 様態副詞の特徴

前節では副詞の大まかな分類と、その中で様態副詞がどこに位置付けられているか見てきた。本節では様態副詞の意味的特徴について先行研究を概観しながら検討し、様態を表す語句とパラフレーズができること、様態副詞が表す事態は動詞が表す事態に同時的に付属することを示す。また意味・形ともに様態副詞に近いものの、様態副詞のこの特徴に当てはまらない副詞として結果副詞があることを示す。

様態副詞が様態の意味と深く関わりがあることは、以下のように in a X manner/way/fashion/style などの様態を表す語句でパラフレーズが可能なことから明らかである。

(16) a. China has industrialized rapidly/in (a) rapid fashion.
b. Mary dances elegantly/in an elegant manner.

(岡田 (1985: 49))

(16) の例はそれぞれ「素早く工業化した」「優雅に踊った」という意味であり、素早い様子や優雅な様子を副詞は表している。manner や way などの単語はこのような意味を表す様態副詞のパラフレーズとしてふさわしいものである。[11]

次に様態副詞と共起する動詞はその意味の中に過程を読み込めるような動詞であることを示す。前節で述べたように、様態副詞は過程・活動のありさまを修飾する。ここから様態副詞は動的動詞 (dynamic verb) とは共起をするが、状態動詞 (stative verb) とは共起しな

[11] ただし様態副詞であれば上記のパラフレーズが必ず可能というわけではない。
(i) a. This business has failed completely/*in a complete fashion.
b. The sun is shining dimly/*in a dim fashion through the clouds. (岡田 (1985: 49))
このようなパラフレーズが不可能な理由としては、ただ単にコロケーション的に不適である場合もある。しかしパラフレーズが不可能な副詞が厳密に様態副詞であるかどうか微妙な場合もあるため、個別に例を精査する必要があるだろう。

いと考えられ、事実以下の例文のように状態動詞と様態副詞は共起が難しい。[12]

(17) *John is slowly tall. (Thomason and Stalnaker (1973: 218))

(18) a. *He likes them skillfully.

b. *He owes them awkwardly.

(岡田 (1985: 44))

また、Vendler (1957) の言うところの達成 (accomplishment) を表す動詞と様態副詞が共起する場合、動詞によって容認度の差が現れる。

(19) John {came/*arrived} slowly.[13] (出水 (2006: 195))

(20) a. I entered slowly.

b. The old lady died slowly of cancer.

(出水 (2006: 197))

出水 (2006) は Rothstein (2004) を参考にして、この容認度の差を達成動詞がその意味の中に取り込める予備段階の長さの違いに求めている。つまり arrive は come, enter, die などの動詞よりも想定される予備段階が時間的に短いため slowly と共起できないのだという。

---

[12] Huddleston and Pullum (2002: 670) では We own the property jointly.や I know them personally.などの例が状態を表す動詞とともに用いられる様態副詞として挙げられており、様態副詞が一律に状態を修飾できないとするのは問題があるかもしれない。ただし、これらがどこまで本当に様態副詞と言えるのかは検討が必要であるように思われる。

[13] Borer (2005: 234) はこの例文のような arrive と slowly の共起を容認可能としているが、出水 (2006) による複数のインフォーマント調査では不可と判定されている (出水 2006: 198)。

これは逆に言えば、行為の過程を動詞の意味の中に読み込むことができれば、その動詞と様態副詞は共起が可能であると言い換えることができる。

このように、様態副詞は基本的に過程を表す動詞と共起して、その過程を修飾する働きがある。そのため様態副詞が表す様態は、動詞が表す事態に同時的に付随する事態である。形の上では様態修飾と区別がつかない副詞であっても、その副詞が動詞の表す事態と同時的に起こっていないのであれば、その副詞は様態副詞とは言えない場合がある。そのような副詞の例として、動詞が表す行為の過程に後続して生じる結果を表す結果副詞を検討する。以下の例を見てみよう。

(21) She dressed elegantly. (Geuder (2000:69))

この例の elegantly は 1 つの解釈として様態副詞の例として捉えることが可能である。メアリーが何かを着る動作をしていて、その動作の様子が elegant であったことを表している。一方でこの例の elegantly は、メアリーが服を着るという動作を行い、その動作が終わった後の様子を見て elegant だと言っている解釈も可能である。服を着る動作の後の様子を見て elegant だという解釈は、動詞が表す事態に時間的に後続している結果事態を修飾しており、そのため Geuder (2000) はこの解釈の elegantly を結果副詞と呼んでいる。[14]

---

[14] Huddleston and Pullum (2002: 672) は様態副詞が結果状態を含意する (implications for resultant state) 場合があるとして以下の例を挙げている。

(i) a. He sealed the window hermetically.
b. They painted the house badly.
c. I tied the knot loosely.
d. You've mended the dress perfectly.
e. He wrote illegibly. (Huddleston and Pullum (2002: 672))

Huddleston and Pullum は少なくともこれらの例の副詞は様態副詞であり、結果を表す意味は語用論的に導かれると考えていると思われる。例えば (ic) では結ぶという行為を緩く、だらしなく行えば、結び目も結果として緩くなる可能性は非常に高い。だが次のような場合

様態副詞は過程に付随する事態に関係し、結果副詞は過程に後続する事態に関係しているという点で異なるが、どちらも過程に関係するという点で（11）で示した Quirk et al.（1985）の付接詞の意味的下位分類である PROCESS の仲間だと言うことができる。だが PROCESS に分類されている様態、手段、道具、動作主体の副詞はすべて過程に付随する事態と関係する。その点で、結果副詞を PROCESS の下位分類と定義した場合でも、様態副詞などの副詞とは性質を異にしていると言える。

2.2 様態副詞および同形の副詞の性質

様態副詞と結果副詞のように、形の上では同じであっても異なる用法を副詞は持っていることが多い。本節では様態副詞の用法を持ちながら生起位置によっては他の用法で使われることがある副詞を検討し、動詞の前後には以下のような同じ形をしていながら様々な異なる用法を持つ副詞が生じることを示す。

（22）主語　副詞　動詞　副詞

↓　　↓

様態副詞、結果副詞

脱焦点化様態副詞、vP 様態副詞、価値判断の主語副詞、心的態度副詞

ある副詞が様態用法かそうでないかを見極めるためには、そのある副詞が他にどのような用法を持ちうるかを把握しておかない限り不可能である。本節の目的は、様態副詞を見極めるために必要な情報を整理し、そのような情報をもってしても、ある副詞がどの用法か見極

は結果を含意する様態副詞とは言い難い。なぜなら主語の行為が「美しく」や「重そうに、重く」といった解釈が困難であるからである。

(ii) a. They decorated the room beautifully.

b. They loaded the cart heavily.　　（Geuder (2000: 69)）

(i)と(ii)の例の違いから、本論文では結果を含意する様態副詞と結果副詞との区別は必要であるという立場をとる。

めるのは困難であることを示す。

2.2.1 離接詞

様態副詞と同形の離接詞の例として次の例を検討する。

(23) a. She died happily.
b. Happily, she died.

動詞の後ろ側にある（23a）の例は「彼女は幸せに死んだ」という意味の様態副詞の例である。一方で（23b）の例は「幸せなことに、彼女は死んだ」という意味であり、彼女が死去するという事態に対して、話者がそれを幸せであったと評価している評価副詞の例である。基本的に happily の場合は、動詞の後ろ側に置かれていれば様態副詞、文頭に置かれていれば評価副詞である。離接詞には他に frankly のような発話様態副詞や probably のような法副詞などがあるが、離接詞として使われる場合は文頭、あるいは文頭に近い位置に置かれ、様態副詞のときは動詞句の後ろ側に置かれるため、生起位置からどちらの用法であるのか見分けがつきやすい。法副詞の場合は基本的には様態用法を持っておらず、様態かそうでないかという用法の判断に困ることはない。[15]

2.2.2 価値判断の主語副詞

副詞は生起位置が変わることで用法が変わる可能性がある。上述の happily のように、生起位置で用法を比較的容易に区別できる場合もあれば、そうでない場合もある。そうでない場合の具体例として、この節では主語の行為に対して話者の評価を下す価値判断の主語副

[15] 離接詞であってもコンマ・ポーズの後であれば文末の位置に置くことができるが、本論文ではそのようなコンマ・ポーズに後置する副詞は分析の対象外とする。

詞（中右 1980）を挙げ、副詞が生起する位置によってはその用法が何であるかを判断するのが困難であることを示す。

様態副詞としても価値判断の主語副詞としても解釈できる cleverly や clumsily が使われている以下の例を見てみよう。

(24) a. John dropped his cup of coffee {cleverly / clumsily}.

b. {Cleverly / Clumsily} (,) John dropped his cup of coffee.

c. John {cleverly / clumsily} dropped his cup of coffee.

(Jackendoff (1972: 49))

Jackendoff（1972）によれば、動詞の後ろ側の文末位置に cleverly や clumsily が置かれている（24a）の場合は様態副詞として、また文頭の位置に置かれている（24b）の場合は価値判断の主語副詞として解釈される。[16]（24a）と（24b）の cleverly は、例えばそれぞれ「ジョンは（わざと落としたと悟られないように）巧みな方法でコーヒーカップを落とした」「ジョンが（みんなの注意をそらすために）コーヒーカップを落としたのは賢明であった」というような解釈が可能である。また、主語と動詞の間の位置に置かれている（24c）の cleverly は、様態と価値判断のどちらの解釈か曖昧であるという。つまり様態副詞は動詞の前側に置かれることもあるということになる。動詞のすぐ前側の位置に cleverly のような副詞がある（24c）のような場合には、その用法を見極めるために文脈に頼らなければならない。そのた

[16] Jackendoff（1972）は（24b）の副詞を主語指向副詞（subject-oriented adverb）と名付けている。しかし主語指向という名称は必ずしも統一的な使われ方をしているわけではない。よって本論文では、主語の行為に対して話者の評価を下すこれらの副詞のことを、中右（1980）に倣い価値判断の主語副詞と呼ぶことにする。また中右は主語指向副詞を価値判断の主語副詞だけではなく様態の主語副詞にも下位分類しているが、本論文では後者は扱わない。

め価値判断用法と様態用法を持つ副詞の生起位置と意味機能との関係を調査するのは簡単ではない。

2.2.3 心的態度副詞

この節では心的態度副詞（mental attitude adverb）を検討する。心的態度副詞とは、基本的に動詞の前側に生起し、ある行為の際の主語の心情を表す副詞であり、動作の行為や過程を修飾する様態副詞とは異なる。[17]次の（25a）は calmly が様態副詞として働いている例であり、(25b）は心的態度副詞として働いている例である。

(25）a. Though her emotions were in turmoil, she managed to leave the room calmly.

b. ??Though her emotions were in turmoil, she calmly managed to leave the room.

(Ernst (2002: 67))

Ernst によれば、(25a）の様態副詞は穏やかな様子で部屋を出ようとしたことを表している。この意味であれば、従属節で表されている感情が激しく動揺しているという内容とも矛盾

---

[17] 心的態度副詞は Geuder (2000）の「透明な副詞」（transparent adverb）とある程度重なるものであると考えられる。透明な副詞は感情を表す副詞であり、動詞の前に置かれるとき、様態副詞の読みはできないとされる（Geuder 2000: 22)。Geuder はこのような動詞の前側に生起する透明な副詞が次のような解釈を生む可能性を示している。

(i) a. John angrily shouted at the people.

b. I hungrily opened the fridge. (Geuder (2000: 193))

これらの副詞はそれぞれ主語の心理・生理状態を表すが、動詞が表す行為との間の因果関係や動機を表すことも可能であるという。例えば（ia）は「怒っていたので叫んだ」、(ib）は「おなかがすいていたので開けた」というような解釈が可能である（松井・影山 2009:271)。このように、透明な副詞が表す主語の心理・生理状態と動詞が表す行為との間には、事実に基づく緊密な関係があるとされる(Himmelman and Schultze-Berndt 2005: 9)。本論文では透明な副詞という独立したカテゴリーを立てずに議論する。

しない。心の中は動揺しているが、表面上は穏やかな様子で部屋を去るということはあり得ることである。一方で（25b）の例の calmly は動詞の前に位置し、心的態度副詞として働くため、心の中が穏やかな状態で部屋を出ようとしたことを表している。しかしそのような意味は従属節の内容と合わないため、容認度が大きく下がるというのである。感情が激しく動揺していると同時に心が穏やかな状態で部屋を出ようとするのは確かに困難である。これらの副詞が実際に使用されるときは、例文のように 2 つの用法がはっきりと区別できるような場合ばかりではないため、動詞の前側にこれらの副詞が生起したときにはその用法の判別は困難である。

2.2.4 脱焦点化した様態副詞

この節では様態副詞が脱焦点化することによって動詞の前側に置かれる現象を検討する。様態副詞の基本的な位置は動詞の後ろ側だと言われているが、脱焦点化することで動詞の前側に生じることもできる。これは動詞の前側に生じる価値判断の主語副詞や心的態度副詞と紛らわしく、用法の見極めが困難になりうることを示す。また脱焦点化は様態副詞が表す意味が重要でないときに起こる可能性が高いことを示す。

本来の生起位置が動詞の後ろ側だと考えられている様態副詞が動詞の前側に生じる理由は、主に情報構造の観点から説明されている。英語では文中の重要な情報は文の後ろに回される傾向がある。そのため様態副詞自体に情報的な価値が少なく焦点が当たっていない場合、その様態副詞は動詞前位に生じることがあると言うのである（Bolinger 1972、岡田 1985、Swan 2016）。

（26）a. He wrote the letter <u>carefully</u>.

b. He <u>carefully</u> wrote the letter.

（岡田 1985: 46）

(26b) の例は carefully に焦点が当たっていない場合に使用される。岡田の例を挙げると、例えば What did he write?や What did he do carefully?のような疑問文の答えとして (26b) は適切だというのである。副詞と焦点に関して、Bolinger (1972) は次のような例を挙げている。

(27) a. He gently caressed her.

b. *He gently punished her.

(Bolinger (1972: 196))

(27a) の例の caress という行為は優しく行うものであるから、gently という副詞がなかったとしても動詞自体から gently の意味があることを自然と予想できる。すなわちこの文においては gently 自体に焦点を当てる必要はないので動詞の前側に置くことができる。一方で (27b) の文が不自然なのは、punish という行為が gently に行われる可能性は高くなく、gently が十分な情報価値を持っており、動詞に前置しにくいからである。このように、情報構造的に焦点の当たっていない様態副詞、すなわち脱焦点化した様態副詞と言えるものが動詞の前側に生じることがあるということを考慮に入れた分析が必要である。

様態副詞が脱焦点化して動詞の前側に生起する事実を検討したが、この事実はもともと様態副詞だった副詞が強意副詞となって動詞の前側に生起する傾向が強まる事実と似ている。どちらも本来副詞が持っていた様態修飾としての情報の価値が減少しているという点で同じである。次の例を検討してみよう。

(28) a. It visibly worsened.

b. I solidly support them.

c. I genuinely admire him.

d. It badly lacks a little attention.

(Bolinger (1972: 244))

(28) の例における副詞は強意副詞として使用されており、動詞の前側に置くことが容易に可能である。Bolinger (1972: 243) は、副詞が強意詞として固定化されればされるほど、動詞の前側の位置に生起する傾向が強まると述べている。

脱焦点化した様態副詞と強意副詞は、情報価値の観点と動詞に前置するという点で確かに似ているが、前者が様態副詞としての機能を損なっていないのに対して、後者は様態副詞としての機能を失いつつある、あるいは失ってしまっていることから、両者は区別されるべきものである。このように、様態副詞と同じ形をしている強意副詞も動詞の前側に生じやすいという事実を考慮した分析が必要である。ただし本論文では、脱焦点化様態副詞と強意副詞が持っている共通点を重視し、用語の煩雑さを避けるために脱焦点化様態副詞という用語に強意副詞を含むものとして扱い、意味的に脱焦点化様態副詞として扱えない場合のみ強意副詞であることを明記する。[18]

2.2.5 vP 様態副詞と VP 様態副詞

前節では脱焦点化した様態副詞が動詞の前位に生じる可能性があることを見てきた。このような副詞の基本的な位置はもともと動詞の後ろ側であり、脱焦点化することで副詞が動詞の前側に移動してきたと考えられる。しかし動詞の前側に基底生成すると考えられる様態副詞がある。それは次の (29a) のような場合である。

---

[18] Declerck (1991: 220) は動詞の前側の位置に様態副詞が置かれた場合、動詞の後ろ側の基本位置に置かれた場合に比べてわずかな強調を受けると述べている。しかし動詞の前側に置かれる様態副詞は脱焦点化している場合もあるので、強調を受けるかどうかは場合によると考えられる。

(29) a. We gently rolled the ball down the hill.

b. We rolled the ball gently down the hill.

(Radford (1997: 371))

Radford (1997) によれば、(29a)は主語がボールを優しく転がしたことを表し、(29b)はボールが優しく転がっていったことを表す。このような文においてボールの転がし方が優しいことを表すには (29a) のように動詞の前側の位置に gently を置かなければならない。つまりこの文において、主語である動作主 we の転がすという行為の様態を表す gently の基本位置は動詞の前側ということになる。この位置に置かれる gently のような様態副詞を vP 様態副詞、(29b) の位置に置かれる場合の様態副詞を VP 様態副詞と呼ぶことがある (立石・小泉 2001)。[19]

2.2.6 様態副詞および同形の副詞の生起位置のまとめ

これまでの検討によって、様態副詞および様態副詞と同形の副詞が動詞の前後に生じることが示された。今までに検討した動詞の前後に生起する副詞をまとめると以下のようになる。

(30) 主語　副詞　動詞　副詞

↓ 様態副詞、結果副詞

↓ 脱焦点化様態副詞、vP 様態副詞、価値判断の主語副詞、心的態度副詞

様態副詞として機能する副詞は、少なくとも上記の用法を持ちうることになる。[20] このよ

---

[19] これらの副詞がそのように呼ばれる理由は 2.4.4 節で述べる。

[20] (30) は今まで検討した主な副詞を示しているだけであり、当然その他の様々な用法の

うに副詞は多様な生起位置と用法を持つ可能性がある。コーパスを用いて多くの実例を検証していくためには、用法や生起位置が限定されている副詞でなければ困難だということになる。

2.3 Haumann (2007) の様態副詞に関する仮説について[21]

前節までの検討によって、動詞の前側の位置には様態副詞と同形の様々な種類の副詞が生じうることを見た。また様態副詞自身が脱焦点化して動詞の後ろ側から移動する可能性があること、そして動詞の前側に基底生成すると考えられる vP 様態副詞が存在することを検討してきた。しかし Haumann（2007）は様態副詞を含む動詞句修飾副詞は動詞の前側に生じないと主張している。本節では Haumann の主張を確認し、それに対して反駁を加え、様態副詞は動詞の前側にも生じることができるという本論文の立場を明確にする。

Haumann は動詞の前側に生じる副詞の解釈の検討から始めている。以下の例を見てみよう。

（31）Marvin carefully sliced all the bagels carefully.　　（Haumann（2007: 53））

carefully は様態副詞と価値判断の主語副詞の 2 つの解釈がある。(31）では最初の carefully が価値判断、動詞句の後ろの carefully が様態解釈となる。この文は「注意深いことに、マーヴィンはすべてのベーグルを注意深く切った」という意味である。次に Haumann は動詞の前側の副詞が主語の心の態度を表す場合があることを示している。

副詞が動詞の前後に生じる。本論文で主に扱うことになる「様態副詞および様態副詞と同形の副詞」を分析する際の前提として重要なものが（30）であると理解されたい。当然、必要なときはこれ以外の用法を検討する。

[21] 2.3 節は、西村（2017）の 2 節の内容を加筆修正したものである。

(32) She cleverly has been carefully answering questions stupidly. (Haumann 2007: 201)

助動詞より左側の cleverly は基本的には価値判断の解釈に限定され、stupidly は動詞句の後ろ側にあるため様態解釈である。よって carefully は価値判断の解釈も様態の解釈もできず、慎重な心の態度を表す心的態度副詞になるという。[22](32) は文脈が整えば、「賢いことに、彼女は慎重な心の態度で、質問に表面上は愚かな様子で答えている」というような意味になりうる。

このように動詞の前側に生起する carefully などの副詞は様態副詞と同じ形をしているが、(31) や (32) の例のように価値判断の主語副詞や心的態度副詞として使用されている。そして動詞の前側に位置するこのような副詞は、実は様態解釈にはならず、価値判断あるいは心的態度の解釈しかできないと Haumann は主張している。

この主張を支持する証拠として、Haumann は価値判断の主語副詞と様態副詞とでは否定の作用域に入るか入らないかで異なるふるまいをするという事実を持ち出している。次の例を見てみよう。

(33) a. She has **not** been cleverly avoiding this topic.

→ She has not been avoiding this topic.

b. She has **not** been answering the question cleverly.

→ She has been answering questions.

(Haumann (2007: 314))

[22] Haumann (2007) は実際にはこの carefully を主語態度副詞 (subject attitude adverb) として心的態度副詞と区別している。本論文ではその区別は重要でないため、用語の煩雑さを避けて心的態度副詞で統一する。

(33b) の cleverly は様態用法である。様態用法の cleverly は not の作用域に入り、この文は「その質問に賢くは答えてこなかった」という意味であり、答える行為自体はしたということになる。それに対して（33a）の cleverly は価値判断の解釈であり、cleverly は not の作用域に入らず、「この話題を避けてこなかったことは賢いことであった」というような意味になる。 Haumann によれば、(33a) のように動詞の前側にある cleverly は not の作用域に入ることはできない。not の作用域に入るという様態副詞の特徴を持つことができない以上、動詞の前側にある副詞は様態解釈ができず、様態副詞は動詞の後ろ側に限定されるというのである。

McConnel-Ginet (1982) も様態副詞は動詞の後ろ側にしか生起しないと述べている。

(34) a. Louisa departed <u>rudely</u>.

b. Louisa <u>rudely</u> departed.

(McConnel-Ginet (1982: 160))

McConnel-Ginet の主張では、（34a）の例の rudely は無礼な様子で部屋を出たことを表す様態副詞である。一方（34b）の例の rudely は部屋を出たこと自体が無礼な行為であったことを表しており、部屋を出る様子自体は何も述べられていないという。McConnel-Ginet は動詞の前に rudely が生じる（34b）は様態読みが不可能であると述べている。

しかし実際にはこの主張は妥当ではないと考えられる。以下、Haumann と McConnel-Ginet に対する反論を述べる。すでに述べたように、動詞の後ろ側に基底生成した様態副詞が脱焦点化して動詞の前側の位置に生じる事実がある。さらに基底生成位置が動詞の前側にあると考えられる vP 様態副詞も存在している。また動詞の前側に生起した副詞が否定の作用域に入り、様態用法として働く次のような例が容認される。

(35) John has **not** gently rolled the ball down the hill.

この例は「ボールを優しく転がしはしなかった（がボールを転がすこと自体はした）」という意味にとることが可能であり、gently は否定の作用域の中に入って様態副詞の解釈を持つことができる。これらの事実により、様態副詞の生起は動詞の後ろ側に限定されるという主張を維持することは困難となる。また McConnel-Ginet の挙げた例についても松井・影山（2009）で反例が報告されている。

(36) a. Ed rudely asked Salma's number, but the way he asked it was not rude.

b. Ed rudely asked Salma's number, but asking the number itself was not rude.

（松井・影山（2009: 270-271））

(36a) の例の rudely は動詞の前にあり、価値判断の副詞として「エドは無礼なことにサルマの番号を訪ねたが、尋ね方は無礼ではなかった」という意味にとることができる。一方で (36b) の例は but 以降が「番号を尋ねたこと自体は無礼ではなかった」という意味なので、全体としては「エドはサルマの番号を無礼な様子で尋ねたが、番号を尋ねたこと自体は無礼ではなかった」という意味以外に解釈しようがなく、この rudely は動詞の前側にあるものの様態解釈が可能である。McConnel-Ginet らの主張では様態解釈の rudely は動詞の前に生起しないはずだが、(36b) は全く問題ない文である（松井・影山 2009: 271）。これにより、様態副詞は動詞の前側には生じないという Haumann や McConnel-Ginet の主張は間違いであるということになる。結局のところ様態副詞は動詞の前側にも生じうると考えるのが妥当であり、それが本論文の立場である。

2.4 副詞と統語構造

すでに見てきたように、様々な種類の副詞が様々な位置に生起し、また副詞の生起位置と意味とはある程度の関係があることが示された。評価副詞や発話様態副詞などの離接詞は文頭の位置が基本の位置であると考えられる。また様態副詞は動詞の前側に生起することもあるが、動詞の後ろ側が基本の位置である考えられる。本節ではこのような生起位置と意味との関係を統語論でどのように捉えようとしてきたのかを概観する。

2.4.1 統語論における初期の副詞分析

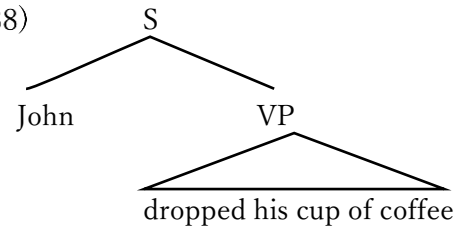
副詞を生成統語論的に詳細に分析した初期のものとしては Jackeondoff（1972）が挙げられる。以下の例の cleverly は主語副詞とも様態副詞とも解釈が可能なのであった。

（37）John <u>cleverly</u> dropped his cup of coffee.

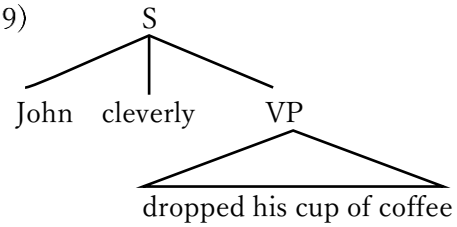
(Jackendoff (1972:49))

このような解釈の曖昧性は次のような統語構造を想定することによって説明が可能となる。

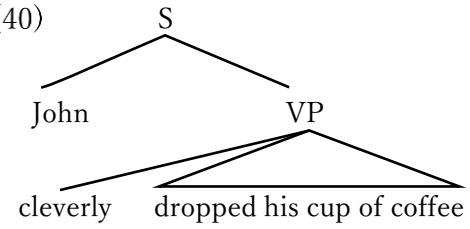
（38）



（39）



(40)



(38) は John dropped his cup of coffee.の簡略的な統語構造であり、文（S）は主語（John）と動詞句（VP）からなるということを表している。主語副詞の cleverly は主語や文全体と関わりがあるため（39）のように S に付き、様態副詞の cleverly は動詞と関わるため（40）のように VP に付くと考えれば、それぞれの意味の違いと同時にどちらの用法の場合も John と dropped の間の位置に cleverly が生起しうることが説明できる。

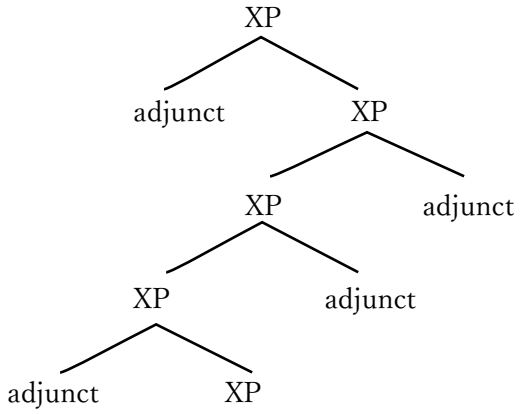
2.4.2 付加分析

副詞が修飾するための位置に付くことを付加（adjunction）と呼び、副詞などは付加詞（adjunct）と呼ばれるが、理論の発展に伴って統語構造が二又枝分かれ構造（binary branch）に限定されてきたことなどにより、上述の（38）から（40）のような統語構造は想定されなくなる。付加詞がどのような位置に付くかは様々な議論があるが、Chomsky (1986: 6) は以下のように付加を定義している。

(41) Adjunction is possible only to a maximal projection [...] that is a nonargument.
(Chomsky (1986: 6))

XP は任意の句である。これを樹形図で表すと次のようになる。

(42)



例えば XP が動詞句 VP であれば、副詞を含む付加詞は何らかの制約を設けない限りは、動詞句の左右に自由にいくつでも付加することができることを（42）は表している。

このような付加操作に対して主に意味的な制約を設けることによって副詞の生起位置と意味の関係を詳細に分析してきたのが Ernst (2002) などの一連の研究である。しかし Ernst の付加分析に対しては、次のような例が問題となる。

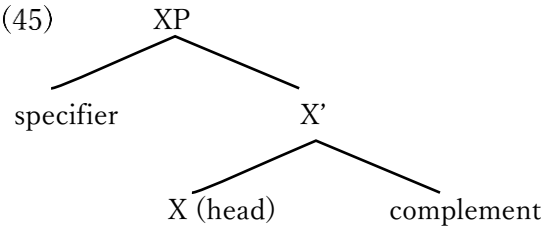
(43) *She has loudly snored. (Haumann (2007: 34))
(44) She has snored loudly.

Haumann(2007) は Ernst の理論では loudly が動詞句の左右に等しく生起できない理由を説明するのは難しいと述べている。

2.4.3 指定辞分析と副詞の階層

副詞がどのように認可（license）されるかについて、Ernst の分析と並ぶのが Cinque (1999) の分析である。統語理論の発展の中、あらゆる句は次のような構造をしているという X バー理論（X' Theory）が提唱されていた。

(45)



Cinque の分析では、副詞は基本的にその副詞を認可することができる機能範疇の指定辞（specifier）の位置に生じ、主要部（head）との一致（agree）によって認可されると仮定された。これは指定辞分析と呼ばれることがある。例えば $\mathrm{Mood}_{\text{speech act}}$P や $\mathrm{Mood}_{\text{evaliative}}$P といった機能範疇が節構造には存在しており、それぞれの指定辞の位置に「率直に言って」という意味の frankly や「不運なことに」という意味の unfortunately が生じるという。さらにこの機能範疇の順序は生得的に厳密に定まっているというのである。副詞が生起する順序については Cinque 以前にすでに Jackendoff (1972) や Nakajima (1982) などが指摘している。

(46) a. *Fortunately, he had surprisingly had his own opinion of the matter.
b. *Certainly, he had evidently had his own opinion of the matter.
c. Fortunately, he had evidently had his own opinion of the matter.
d. *Evidently, he had fortunately had his own opinion of the matter.

(Nakajima (1982: 342))

(46) によれば、surprisingly は fortunately に先行しなければならない。同様に evidently は certainly に、fortunately は evidently に先行しなければならない。これらの情報を合わせると、surprisingly>fortunately>evidently というような生起順序の制限があることがわかる。Cinque はこのような共起制限を多言語において詳細に調べ上げ、副詞には言語に共通する普遍的で生得的な階層があると主張した。以下は Cinque の分析を踏襲する Laenzlinger

(2004) からの例であるが、英語、フランス語、ドイツ語の副詞の階層が示され、その順序が共通していることが示されている。例えば frankly は unfortunately よりも上位の階層に存在するため、これら 2 つの副詞が同一節内に生じる場合には frankly unfortunately の語順のみが認可される。

(47)

[frankly / franchement / offen gestanden	$Mood_{speech\ act}$ >
[*unfortunately / malheureusement / unglücklicherweise*	$Mood_{evaluative}$ >
[*apparently / apparemment / anscheinend*	$Mood_{evidential}$ >
[*probably / probablement / wahrscheinlich*	$Mod_{epistemic}$ >
[*once / autrefois / einmal*	T_{Past} >
[*then / ensuite / dann*	T_{Future} >
[*maybe / peut-être / vielleicht*	$Mod_{(ir)realis}$ >
[*necessarily / nécessairement / notwendigerweis*	$Mod_{necessity}$ >
[*possibly / (possiblement) / möglich*	$Mod_{possibility}$ >
[*deliberately / intentionnellement / absichtlich*	$Mod_{volitional}$ >
[*inevitably / inévitablement / zwangsläufig*	$Mod_{obligationl}$ >
[*cleverly / intelligemment / geschickt*	$Mod_{ability/permission}$ >
[*usually / habituellement / gewöhnlich*	$Asp_{habitual}$ >
[*again / de nouveau / wieder*	$Asp_{repetitive(I)}$ >
[*often / souvent / oft*	$Asp_{frequentative}$ >
[*quickly / rapidement / schnell*	$Asp_{celerative(I)}$ >
[*already / déjà / schon*	$T_{Anterior}$ >
[*no longer / plus / nicht mehr*	$Asp_{perfett}$ >
[*still / encore / noch*	$Asp_{continuative}$ >

[*always* / *toujours* / *immer* Asp$_{\text{perfective}}$ >

[*just* / *juste* / *gerade* Asp$_{\text{retrospective}}$ >

[*soon* / *bientôt* / *bald* Asp$_{\text{proximative}}$ >

[*briefly* / *brièvement* / *kurz* Asp$_{\text{durative}}$ >

[*typically* / *typiquement* / *typisch* Asp$_{\text{generic/progressive}}$ >

[*almost* / *Presque* / *beinahe* Asp$_{\text{prospective}}$ >

[*completely* / *complètement* / *völlig* Asp$_{\text{SgCompletive(I)}}$ >

[*all* / *tutto* / *alles* Asp$_{\text{PICompletive}}$ >

[*well* / *bien* / *gut* Voice >

[*fast* / *vite* / *schnell* Asp$_{\text{celerative(II)}}$ >

[*completely* / *complètement* / *ganz* Asp$_{\text{SgCompletive(II)}}$ >

[*again* / *de nouveau* / *wieder* Asp$_{\text{repetitive(II)}}$ >

[*often* / *souvent* / *oft* Asp$_{\text{frequentative}}$ >

]]]]]]]]]]]]]]]]]]]]]]]]]]]]]]]]

(Laenzlinger (2004: 210))

このような厳密な階層性に関しては、理論の面でも言語事実の面でも問題が指摘されている。大きな問題の 1 つとして、このような厳密な階層を想定してしまうと、副詞の生起位置に関する自由さを説明できなくなるという点がある。例えば次の例を観察すると、frequently の位置は複数あるように見える。

(48) a. Jane frequently could quickly answer George's question.

b. Jane quickly could frequently answer George's question.

(49) a. Jane frequently could cleverly answer George's question.

b. Jane cleverly could frequently answer George's question.

(50) Jane quickly could frequently answer George's questions cleverly.

(Edelstein (2012: 18-19))

Ernst (2007) は Cinque のアプローチに従うならば少なくとも frequently が階層の中で 3 つの位置を持つとしている。

(51) frequently＞quickly＞frequently＞cleverly＞frequently (Ernst 2007: 1017)

これらの事実は Cinque の分析にとっては大きな問題となる。[23]

しかし副詞に階層性があることは事実である。[24]副詞の意味とその生起位置、すなわち副詞の意味と統語とは密接に関係している。このような階層の存在は、副詞を調査する場合はその意味機能だけでなく生起位置にも注意を払う必要があるということを示しており、それは本論文の分析の際の基本的な姿勢でもある。

2.4.4 様態副詞および同形副詞と統語構造

この節では、2.2 節で検討してきた以下の副詞が統語構造のどこに位置付けられるのか述べる。

---

[23] この問題に対して、(51) の frequently はそれぞれが異なる用法であり、それぞれの用法が生じることのできる 3 つの異なる場所があると主張できるだろう。あるいは frequently の生起位置はあくまで 1 つであり、文中の要素が様々に移動することによって異なる位置にあるように見えるだけだと主張することもできるだろう。しかしこの問題に対する明確な答えはまだない。

[24] Payne (2018) はコーパス調査を行って Cinque の厳密な副詞階層に対する反例を指摘すると同時に、アンケート調査を行ってネイティブの直観による容認度の調査を行なっている。それによると Cinque が主張する生起順序の制限の多くは、統計的に優位な差を認めることができるほどには強い制限ではないという。ただし Payne は Cinque の副詞階層を完全に否定しているわけではなく、Cinque の厳密さを緩めた改訂版の階層を提案している。

(52) 主語　副詞　動詞　副詞

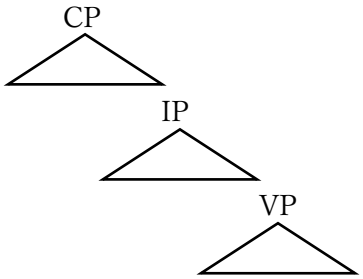
様態副詞、結果副詞

脱焦点化様態副詞、vP 様態副詞、価値判断の主語副詞、心的態度副詞

また vP 様態副詞と VP 様態副詞がなぜそう呼ばれるのかを統語構造から示す。

統語論では、文の構造は大きく分けて CP (Complementizer Phrase) 領域、IP (Inflectional Phrase) 領域、VP (Verb Phrase) 領域 の 3 層からなると考えられている。[25]

(53)



CP 領域は談話やスコープに関わり、IP 領域は時制やアスペクト、モダリティに関わり、VP 領域は誰が何をするかのなどの事態 (event) に関わりがある。IP 領域と VP 領域で命題を表すとされ、CP 領域は命題外のことを表す。

CP 領域には命題と関わらない発話様態副詞などの離接詞や、やはり命題内容との関わりが薄い価値判断の主語副詞が生起すると考えられる。心的態度副詞や様態副詞、結果副詞は命題内容の中でも事象に関わるため VP 領域に生起していると考えられる。[26]

主に動詞句修飾の副詞が生起している VP 領域は、さらに以下のような構造をしていると仮定されている。[27]

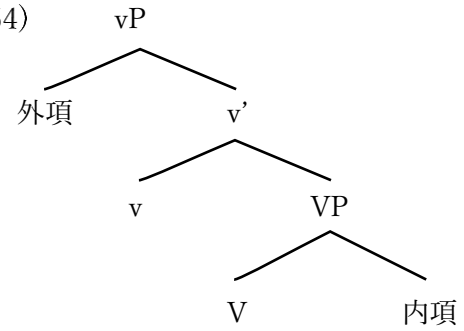
---

[25] それぞれの領域をさらに細かく分けていくと、例えば (47) のようになる。

[26] ただしこれらの副詞の生起位置に関しては必ずしも統一的な見解があるわけではない。

[27] Larson (1988) や Hale and Keyser (1993) などを参照。

(54)



ここでは、外項を主語となる名詞句、内項を目的語となる名詞句と考えておく。[28]動詞はVの位置に基底生成した状態では自動詞的な意味を持っているが、その位置から v の位置へ移動することで他動詞的な意味になると考えられている。行為の際の主語の心の状態を示す心的態度副詞や、動作主の行為の様態を表す vP 様態副詞は、主語（外項）と関わりが深いため vP 領域に生起し、それ以外は下位の VP 領域に生起すると考えよう。

このような構造を仮定したうえで、次の vP 様態副詞と VP 様態副詞の例文を検討しよう。

(55) a. We gently rolled the ball down the hill.
b. We rolled the ball gently down the hill.

(Radford (1997: 371))

すでに述べたように（55a）の gently はボールの転がし方が優しいことを、(55b）の gently はボールの転がり方が優しいことを表す。これは統語論では一般に以下のように説明される。

(56) a. [[$_{VP}$ roll the ball] down the hill]

[28] 厳密には内項が主語になる非体格動詞のような例があり、外項が主語と同義なわけではない。

b. [$_{vP}$ we roll$_i$ [[$_{VP}$ t$_i$ the ball] down the hill]]

c. [$_{IP}$ we$_j$ [$_{vP}$ t$_j$ roll$_i$ [[$_{VP}$ t$_i$ the ball] down the hill]]]

roll はもともと（56a）の位置に基底生成され、その段階では自動詞的な意味を持った状態であり、この VP はボールが坂を転げ落ちることを表している。この VP 内の roll が他動詞となるためには VP 構造の上位にある vP の位置まで roll が移動する必要がある。その移動後の構造を表したものが（56b）である。[29]さらに主語 we は vP の中から上位構造に移動して（56c）のような構造になると想定されている。ボールの転がし方が優しいことを gently が示すためには、「転がす」という他動詞的な意味の roll$_i$を修飾する必要がある。また修飾要素は被修飾要素よりも上位の構造に置かれなければならないと一般的に考えられている。よって優しく転がすという意味を表すために、gently は以下のような場所に置かれなければならないはずである。

（57） [$_{IP}$ we$_j$ [$_{vP}$ <u>gently</u> t$_j$ roll$_i$ [[$_{VP}$ t$_i$ the ball] down the hill]]]

一方で gently が「ボールが優しく転がる」という意味を表すためには、「転がる」という自動詞的な意味の roll を修飾する必要がある。言い換えれば、gently は自動詞的な意味を表す roll の痕跡である t$_i$ を修飾する必要があることになる。よって以下のように（58a）または（58b）の位置に gently は置かれる必要があるはずである。

（58）a. [$_{IP}$ we$_j$ [$_{vP}$ t$_j$ roll$_i$ [[$_{VP}$ <u>gently</u> t$_i$ the ball] down the hill]]]

b. [$_{IP}$ we$_j$ [$_{vP}$ t$_j$ roll$_i$ [[$_{VP}$ t$_i$ the ball <u>gently</u>] down the hill]]]

---

[29] roll が元々あった位置を痕跡（trace）を表す記号 t で、また $_i$や $_j$ などの指標によってどの要素と痕跡が同一要素なのかを示している。

ここではgentlyが（58a）の位置に置かれた場合は動詞と目的語の間に入り込んでしまい非文になると考えよう。すると（58b）のgentlyの位置がt_iを最も近くで修飾できる最適な場所となる。このようにしてなぜ gently が生起位置によって異なる働きができるのかを説明することができる。

2.5 意味役割を組み込んだ動詞句構造と副詞

文はCP、IP、VPの領域からなり、VPはさらに上位のvPや下位のVPなどからなる多層構造になっている。このような文の統語構造を考えることによって、様々な副詞の生起位置と意味との関係性を明らかにすることができることを見てきた。本論文で分析する副詞は主に様態副詞などの動詞句を修飾する副詞であるため、動詞句構造がどのようになっているかは重要である。本節では動詞句に関する加賀（2001）の動詞句構造を仮定する。この構造では、主語の動作は動詞句の上位構造で、位置変化や状態変化を表す部分は動詞句の下位構造で表されることを示す。そしていくつかの副詞を分析することによってこの動詞句構造の有用性を示す。

すでに述べたようにVP領域は事態を表す。ある事態はそれを引き起こす動作主（agent）や動作によって影響を受ける被動作主（patient）などの要素からなるが、このような要素を意味役割（thematic role）という。[30]加賀（2001）は Agent《動作主》、Location《場所》、Theme《存在物》の3つのマクロな意味役割を仮定している。[31]加賀はそれぞれの意味役割

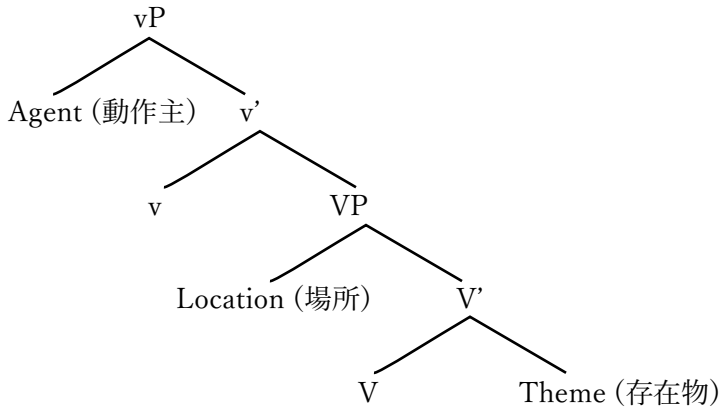
---

[30] 意味役割がどのような階層をなすかについては Grimshaw（1990）、Jackendoff（1990）、Baker（1997）など多岐にわたる議論がある。これらの簡潔なまとめが Levin and Rappaport Hovav（2005: Ch. 6）にある。様々な提案で共通しているのは動作主Agentの意味役割が統語構造上で最も上位にあると考える点であり、その点が以下の議論では重要となる。

[31] 一般的な意味役割とマクロな意味役割を区別するため、加賀（2001）に倣いマクロな意味役割の日本語訳を《　》で表記しているが、本論文では基本的にマクロな意味役割を Agent、Location、Theme と大文字で始めて表記する。

が次のように動詞句の所定の位置に基底生成するとしている。[32]

(59) 加賀（2001）の提案する動詞句構造[33]



文中に Agent があれば動詞句構造の上位に基底生成され、Agent 以外の項は動詞句構造の下位に基底生成されるということである。このような加賀の構造を仮定すれば、Agent が関わる上位構造 vP では Agent の動作が表され、Agent 以外の項が関わる下位構造 VP では位置変化や状態変化が表されるという仮定も導き出される。[34]この仮定が本論文の以降の議論にとって重要となる。

上述の構造を仮定すると、Agent の行為の様態を修飾する副詞は動詞の前側に、状態変化や位置変化を修飾する副詞は動詞の後ろ側に置かれるという広く適用される予測がなされる。この予測はすでに検討していた以下の例に当てはまる。

---

[32] 動詞句の決まった位置に決まった意味役割が基底生成されるという Baker（1988）の仮説を主題役割付与均一性仮説（Uniformity of theta assignment hypothesis）という。

[33] 加賀（2001）や Kaga (2007) では vP は VP1、VP は VP2、Theme は Locatum という表記であるが、ここではより一般的な表記で表している。加賀が vP や VP を採用しない理由については加賀（2001）の 3.1 節を参照。

[34] Theme や Location が動詞句に存在すれば、Theme は Location に位置変化することを表す。また位置変化が比喩的拡張すると状態変化を表すこともできる。状態変化・位置変化には状態無変化や位置無変化も含まれる。藤本（2019）を参照。

(60) We rolled the ball gently down the hill. (Radford (1997: 371))

この gently は位置変化を起こす ball のころがる様子を表すのであり、位置変化を修飾する副詞が動詞句の後ろ側に生起する事例の 1 つとみなすことができる。このような副詞は Theme/Location を指向する副詞とも言える。基本的に Agent の行為の様態などを修飾する様態副詞とはこの点でも異なる。以下の例の副詞も Theme/Location に関する部分を修飾している例とみなせる。

(61) (?) I watched how the police took a man reluctantly to the car.

(Geuder (2004: 156))

この例では男が警察に連れて行かれることで位置変化をしており、その時の男の様子が reluctant だということが表されている。この例のように副詞が目的語の様態を修飾するのは周辺的な例ではあるが可能である。この例の reluctantly は目的語指向と言うこともできる。[35]状態変化や位置変化を表す文に生起して Theme や Location を指向する副詞は、基本的には動詞の後ろ側に生起するという幅広く成り立つ傾向が存在するということになる。

2.6 分析対象とする副詞の選定

本節では、複数の用法を持つ副詞の生起位置と意味の関係を、その生起頻度を利用しながら分析するのは非常に困難であることをまず示す。次にその困難さを緩和するためには、生起位置や用法が限定された副詞を調査するべきであり、そのような副詞として下位範疇化

[35] Matsuoka (2013) は (61) のような文の副詞が目的語指向になる可能性があることを、目的語と同一指標を持つ PRO の存在を目的語の後ろに仮定する精緻な構造によって説明している。Matsuoka の分析との整合性に関しては今後の課題としたい。

副詞と中核的純様態副詞があり、本論文の分析対象として適切であると主張する。

本論文はコーパスを活用して様態副詞を中心とした動詞句修飾副詞を詳細に調査し、生起頻度にも目を配りながら生起位置と意味の関係を明らかにしようとするものである。すでに示したように、様態副詞は動詞の前後に生じることができ、さらに様態副詞と同形の様々な用法の副詞もそこに生じる。

(62) 主語　副詞　動詞　副詞

様態副詞、結果副詞

脱焦点化様態副詞、vP 様態副詞、価値判断の主語副詞、心的態度副詞

このように、同じ形をしながらも様々な意味機能と生起位置を副詞は持つという事実を考えると、複数の用法を持つ副詞の生起位置と意味機能の関係を、その生起頻度を手掛かりとして量的に研究するのは非常に困難であることが予測される。

例えば多機能副詞の wisely を考えよう。wisely という副詞は様態副詞としても価値判断の主語副詞としても使用される。次の例のように文中の様々な位置で使用され、位置によってはどちらの用法か曖昧である。

(63) a. (Wisely,) they (wisely) will (wisely) have (wisely) declined her invitation.

(Ernst (1998: 135))

b. (Wisely,) John (wisely) dropped the vase (wisely).

(63a) は価値判断の主語副詞としての wisely が文中のどの位置に生じうるかを示したものである。助動詞 have よりも左側に生じる場合にはほぼ価値判断の副詞に限定されると考えてよい。しかし実際の例では助動詞が 1 つもない (63b) のような例で生じることがほとんどである。(63b) の場合、文頭と文末の wisely はそれぞれ価値判断の副詞と様態副詞であ

ると考えてよいであろう。しかし dropped のすぐ前側に位置する wisely はどの用法であるかはっきりと判断できない。量的にそれぞれの生起位置の wisely を闇雲にコーパスで調査しても実りある結果は期待できないと思われる。実際に wisely を COCA で検索し、wisely が能動態の述語動詞あるいは節全体を修飾している例を抽出すると 1478 例であった。生起数は動詞の後ろ側が 785 例、前側が 693 例であった。[36]この結果だけ見ても様態副詞の wisely の基本位置は判明しない。さらにこれらは前後の文脈があれば必ず解決する問題であるともいえない。このような副詞をコーパスで量的に考察するのは困難であろう。

しかし逆に、生起位置や用法が限定されている副詞が存在すれば、コーパスを利用して生起位置と意味機能の関係を量的に検討することができるはずである。[37]ほとんどの様態副詞は同時に様態用法以外の機能を持っており、様態副詞はコーパスによる量的な研究が困難であるということになるが、様態副詞の中には様態用法以外を持たず、もっぱら動詞の後ろ側に生起する中核的純様態副詞と呼ばれる副詞が存在している。様態用法しか持たないのであれば、そのような副詞は以下のような分布と解釈になるはずであり、コーパスの多くの実例を調査することが比較的容易になるだろう。

(64) 主語　副詞　動詞　副詞

↓　　↓

様態副詞、~~結果副詞~~

脱焦点化様態副詞、vP 様態副詞、~~価値判断の主語副詞~~、~~心的態度副詞~~

また動詞の直後に生起位置が限定されている下位範疇化副詞と呼ばれる副詞がある。この副詞は基本的には動詞の前側に生じないため、以下のように様態副詞であるか結果副詞で

---

[36] この wisely に関する検索結果は 2019 年 6 月のものであり、西村（2019）の口頭発表に基づく。

[37] 実際、1 つに用法が限定されている法副詞などの分析では優れた量的研究はすでに数多くある（Suzuki 2018 など）。

あるかにまずは注意して調査に取り組めばよいことになる。

(65) 主語　~~副詞~~　動詞　副詞

様態副詞、結果副詞

~~脱焦点化様態副詞~~、~~vP 様態副詞~~、~~価値判断の主語副詞~~、~~心的態度副詞~~

これらの副詞はその統語的・意味的な制限のために、生起頻度を手掛かりとして統語と意味の関係を探るという量的な研究が、複数の用法を持つ普通の副詞よりも比較的容易に行えることが予測される。このように考えると、下位範疇化副詞や中核的純様態副詞は本研究の分析対象として適切なのである。[38]

2.7 まとめ

2 章では副詞研究の概観を行い、様態副詞の基本的な性質と、様態副詞と同形の他の用法を持つ副詞が動詞の前後に生じることを示した。また副詞を統語構造にどのように位置付けるのか、先行研究を概観しながらその問題点を指摘し、動詞句修飾をする副詞の研究のためにはマクロな意味役割を組み込んだ構造を仮定した。この構造の仮定によって Agent 指向や Theme/Location 指向という分類が可能になった。統語構造上、Theme/Location 指向の副詞は動詞の後ろ側に生起し、また意味役割の観点から位置変化・状態変化に関わる意味を持つことが予想されることが示された。そしてこの予想の妥当性を分析するための対象として下位範疇化副詞と中核的純様態副詞が適切であることを示した。

[38] もちろん中核的純様態副詞や下位範疇化副詞が（64）や（65）で示されている以外の用法を持つ可能性を完全に排除できるわけではないが、まずは示されているような位置と用法にほぼ限定されるという事実が、分析の足掛かりとして重要である。

第 3 章　下位範疇化副詞再考[39]

本章では下位範疇化副詞として分類されている副詞の生起位置や意味機能について分析を行う。下位範疇化副詞を分析する理由は、この副詞が本論文の目的である副詞の記述研究の対象として適切なものの 1 つであるからである。下位範疇化副詞は生起位置が動詞の後ろ側に限定されると考えられている。副詞は用法が多岐にわたるものが多いが、生起位置が限定されている副詞はその用法も限定されている可能性が高い。そのような生起位置と用法が限定されている副詞は、コーパスなどで実例を調査し、その用法を見極め、用法ごとに頻度を分析することが比較的容易に可能である。生起位置や用法が多様な副詞でそれは困難である。

下位範疇化副詞を分析の対象とするもう 1 つの理由は、この副詞を詳細に分析することによって、下位範疇化副詞という分類そのものを解体できる可能性があるからである。個々の副詞の詳細な分析によって下位範疇化副詞という分類をなくすことができれば、理論をより簡潔にするという貢献ができる。このような貢献を示すことができるため、本論文の分析対象として下位範疇化副詞は適切なのである。

第 3 章は次のような構成になっている。3.1 節では下位範疇化副詞は省略が不可能でかつ動詞の後ろ側に限定される性質を持つとされてきたこと、およびその理由として統語と意味の観点からの説明されてきたことを述べる。そのうえでこの省略不可能性に対する反例をあげ、この副詞が持つ動詞の後ろ側に限定される性質を従来と異なる方法で説明する必要性があることを述べる。3.2 節では下位範疇化副詞と呼ばれてきた副詞が持つ動詞の後ろ側に限定されるという性質は、これらの副詞が状態変化を修飾する Theme/Location 指向の副詞だからであると主張する。また Theme/Location 指向の副詞と言ってもその中身は一様ではなく、結果副詞や程度副詞に分類されると主張する。これにより、下位範疇化副詞

[39] 3.1 節、3.2 節は西村（2016, 2017）の内容を基に大幅に加筆修正したものである。また第 3 章の COCA による検索結果は 2021 年 6 月のものである。

という分類は必要がなくなる。3.3 節では下位範疇化副詞と呼ばれてきた副詞の事例をコーパスの実例を中心として考察し、個々の事例における副詞の生起位置や意味機能を明らかにし、3.2 節の主張が妥当なものであることを示す。3.4 節ではまとめを行う。

3.1 下位範疇化副詞の特殊性とその反例

この節では、まず下位範疇化副詞は省略不可能性と前置不可能性をその特徴として持つとされてきたこと、またその性質が存在する理由としてこの副詞が動詞の項であるという統語的理由と、意味的にも必須であるという意味的理由の両面から説明がされてきたことを述べる。次に省略不可能性に対する反例をあげ、2 つの不可能性に対する従来の統語・意味的説明が有効でないことを示したのち、この副詞が持つ前置不可能性を説明できる新たな方法が必要であると述べる。

まず下位範疇化副詞の特徴を述べる。Jackendoff (1972) によれば、下位範疇化副詞とは (66) のような文に生起する、動詞の必須要素である項として機能する副詞であり、動詞に統語的に要求されるため (67) のように省略することはできないとされている。[40]

(66) a. John worded the letter carefully.

b. The job paid us handsomely.

c. Steve dresses elegantly.

(Jackendoff (1972: 64))

(67) a. *John worded the letter.

b. *The job paid us.

---

[40] 統語の観点から省略ができないというのは、名詞を項として要求する他動詞の目的語を（基本的には）省略できないのと同じ理由である。目的語名詞句の省略可能性については Fillmore (1986)、Groefsema (1995)、Huddleston and Pullum (2002) などを参照。

c. *Steve dresses.

(Jackendoff (1972: 64))

統語的な理由に加えて、(67) は意味のある情報を表していないから容認されないという意味的な理由も存在する。例えば手紙はそこに言葉という情報を入れるものであるから、John worded the letter.だけでは意味のある情報にはならない。どのように、どのような、あるいは何のために情報を手紙に加えたのかが重要な情報となるのである。(67b) も仕事をすればお金を手に入れるのは当たり前であるから、どの程度のお金を手に入れたかが重要な情報となる。また (67c) も、Steve が一般的な人であれば服を着ているのは当たり前であるから、どのような様子で服を着たのか、あるいは着衣の結果どのような恰好なのかが重要な情報となる。以上のように、下位範疇化副詞の省略不可能性は、統語と意味の両方の観点から説明されてきた。

また下位範疇化副詞は動詞の前側に置かれないという特徴もある。[41]

(68) a. *John carefully worded the letter.

b. *The job handsomely paid us.

c. *Steve elegantly dresses.

(Jackendoff (1972: 68))

---

[41] Ernst (1984: 333) では下位範疇化副詞が動詞に前置する例を非文と判定しない話者がいることを次の例で示している。

(i) ?John carefully worded the letter. (Ernst (1984: 333))

この例を非文と判断しないインフォーマントもいるが、容認性が低いことは確かである。またこののち COCA の用例を検証するが、このような例がほとんど存在しないことも事実である。よって本論文では下位範疇副詞は動詞に前置することが基本的にはできない副詞であると考える。

この点も統語と意味の両方から説明される。統語的には、動詞の項は動詞の後ろ側に限定されるから前置出来ないと説明できる。また意味的な観点からは、重要な情報は文末に置かれる傾向があり、下位範疇化副詞は重要な情報を担っているため、脱焦点化して動詞の前側に置くことはできないと説明される。

しかし下位範疇化副詞の省略不可能性に対する反例が Ernst (2002) で挙げられている。Ernst もいわゆる下位範疇化副詞が多くの場合省略できないのは、これらの副詞がなければ文の情報価値がないからという理由を挙げているが、一方で談話上必要なければこれらの副詞が省略可能であることを以下の例で示している。

(69) We've figured out the content of all the exam questions, but we haven't **worded** them yet. (Ernst (2002: 273))

この例のように下位範疇化副詞が省略可能であるならば、これらの副詞が項であるという主張はその根拠が揺らぐことになる。また省略が可能である以上、下位範疇化副詞が意味的に常に必須だと主張することもできない。

下位範疇化副詞が項ではなく、省略することが可能なほど情報的価値がなくなる場合があるならば、脱焦点化して動詞の前側に置かれてもいいはずである。しかし下位範疇化副詞としての carefully や elegantly は動詞の前側への生起は非常に困難である。つまり前置不可能性に対して従来の統語的・意味的な説明とは異なる新たな説明が必要であり、その中身によっては下位範疇化副詞という分類を維持しておく必要はなくなることになる。次節では下位範疇化副詞は状態変化を修飾する Theme/Location 指向の副詞であると述べ、そのため動詞の後ろ側に生起が限定されると主張する。

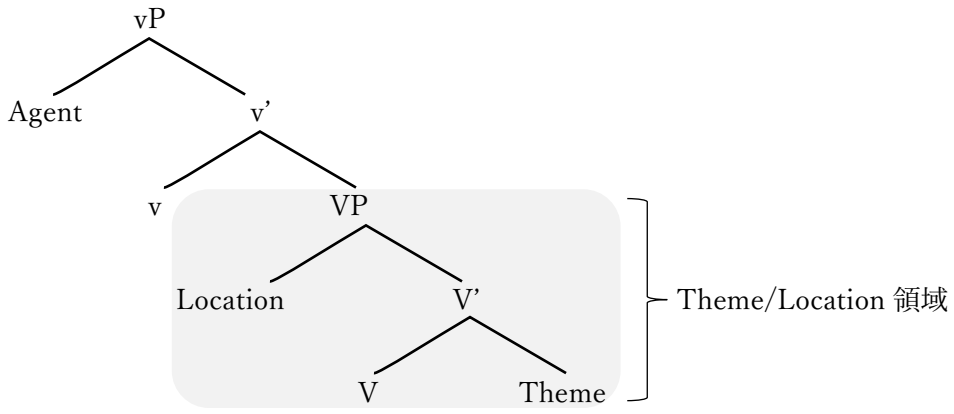
3.2 下位範疇化副詞の解体

3.2 節では下位範疇化副詞は状態変化に関わる修飾をする副詞であると主張する。下位範疇化副詞として挙げられる carefully、handsomely、elegantly はそれぞれ様態副詞としての用法があり、様態副詞として使われる副詞が動詞の後ろ側にある場合、基本的には次のように様態副詞か結果副詞の用法が考えられるのであった。

(70) 主語　　動詞　副詞
　　↓
　　様態副詞、結果副詞

また意味役割を組み込んだ動詞句構造の観点からは、動詞の後ろ側に生起が限定される副詞は状態変化・位置変化に関わる Theme/Location 指向の副詞であると考えられるのであった。

(71) 加賀（2001）の提案する動詞句構造



もし下位範疇化副詞が Agent の行為の様子を修飾できるなら、vP の左側、すなわち動詞の前側の位置にも生起できるはずであるが、そうでない以上は Theme/Location が現れる VP 領域に生起しているはずである。これらのことを考えあわせると、いわゆる下位範疇化副詞は、状態変化・位置変化の様態または結果を修飾する副詞であると予測される。例えば普通

carefully は主語が行為を行うさまが注意深い様子であることを表すが、この仮定に沿うならば、下位範疇化副詞としての carefully は手紙が文字情報のない状態からある状態になるという状態変化に関わる修飾をすることになる。

次節以降、carefully、handsomely、elegantly の 3 つの副詞の分析を通して、これらの副詞が確かに状態変化の修飾に関わることを示す。またそうは言ってもその中身は一様ではなく、結果副詞や程度副詞として捉えられることを主張する。

3.2.1 John worded the letter carefully.の場合

本節では、いわゆる下位範疇化副詞の carefully は主語の行為の様態を表す様態副詞ではなく、目的語の状態変化を修飾する副詞であることを示し、下位範疇化副詞という分類が必要ないことを主張する。また本節の主張の反例のように見える、動詞に carefully が前置している例を検討し、この carefully は状態変化を修飾する副詞ではないことを示す。

下位範疇化副詞 carefully の例として次の文を見てみよう。

(72) John worded the letter carefully. (Jackendoff (1972: 64))

このようなコンマ・ポーズなしに動詞の後方に置かれる carefully が様態以外の解釈をもつという可能性については寡聞にして知らない。しかしいわゆる下位範疇化副詞として carefully が扱われている（72）は、ジョンは慎重な様子、慎重な方法で手紙を書いたという主語の行為の様態を表しているのではない。これは手紙に書かれた内容そのもの、つまり言葉選びが非常に慎重であったという意味である。辞書における動詞 word の定義を見てみよう。

(73) to use words that are carefully chosen in order to express something

・How can we word the letter so as not to offend the parents?

(LDOCE[6] s.v. *word*[2])

(73) の定義によれば、動詞 word は「何かを表現するために慎重に選ばれた言葉を使うこと」とある。例文の意味は「親を傷つけないようにするには手紙をどう書いたらいいか」といった内容である。これが意味するところは、どのような言葉を使えばよいのかということであって、ゆっくり丁寧に書くとか、あるいは集中している様子で書くとかいう主語の行為の様子を表すのではない。もちろん、慎重に言葉を選ぶときにその様子を外側から眺めると、おそらくたいていは主語となる人物は慎重な様子に見える。書くという行為の様子が慎重であることと、書かれた内容・言葉選びが慎重であることとは完全に分けられない場合も多いであろう。しかしやはりこれらの用法は分けて考えるべきである。[42] [43]ここではこの carefully を状態変化修飾副詞と名付けておく。

状態変化修飾の carefully は、手紙の内容が careful になるように状態変化を起こすことを表すとしたら、この副詞は word という行為が終わった後も手紙の内容が careful であることを表し続ける。様態副詞は動詞が表す行為の過程に付随して修飾を行うが、結果副詞は動詞が表す事態に後続する状態を表すことを考えると、この carefully は結果副詞との類似性

---

[42] この点は心的態度副詞と様態副詞との関係性に似ている。例えば calmly は心的態度を表す用法と様態を表す用法があるが、心が穏やかであれば様子も穏やかである可能性が高く、様子が穏やかであれば心も穏やかである可能性が高い。しかしこの 2 つの用法は異なるものとして扱われており、同様に carefully も様態用法のほかに様態用法と類似した別の用法を認めるべきであろう。

[43] しかしそれでもこの carefully を様態副詞として考えても問題ないと思われるかもしれない。実際〈word + 名詞 + 副詞〉の構文に入る副詞の中では carefully がもっとも様態副詞との区別があいまいな副詞である。3.3.1 節でこの構文に入る他の副詞を検討するが、そこで明らかに様態副詞としては機能していない副詞が入ることが示される。そこからこの構文に入る carefully もまた通常考えられている主語の行為を修飾する様態副詞の用法とは異なるということが予測される。

が認められるだろう。ただし結果副詞と完全に同じものではない。ここではこの carefully は結果副詞に近い機能を有する副詞であり、どちらの副詞も Theme/Location 指向なので動詞の後ろ側に生起する性質を持っているものと考える。そのために動詞の前側に生じることが非常に困難となっていると説明できる。そうすればこの carefully は下位範疇化という特殊な区分を設ける必要はないのである。

状態変化修飾副詞 carefully は動詞の前側に置くことが困難ではあるが、carefully が絶対に動詞の前側に生じないというわけではない。次の例は状態変化修飾 carefully の前置不可能性の反例のように見えるが、この carefully を情報価値的に重要な状態変化修飾副詞と考える必要はない。

(74) John has carefully **worded** the letter to avoid causing offence.

(https://forum.wordreference.com/threads/john-has-carefully-worded-the-letter-its-wrong.1466821/)

この例では carefully が仮になかったとしても、波線部の副詞的用法の to 不定詞があることよって文の情報的価値は十分にある。波線部によって気分を害するのを避けるように手紙の内容を書いたということが意味されている。そのためこの文の carefully は手紙の内容がどういったものか修飾する Theme/Location 指向の用法であると考える必要はなく、動詞の後ろ側に限定されることはない。[44]carefully のような副詞が動詞の前に生じた場合、次のような用法であることが考えられるのであった。

[44] 鈴木（2014: 83）も目的語に to 不定詞などの副詞類が後続している場合には〈carefully + word〉の語順になる可能性があることを観察している。

(75) 主語　副詞　動詞

↓

脱焦点化様態副詞、vP 様態副詞、価値判断の主語副詞、心的態度副詞

動詞の後ろ側に限定されるような文脈でなければ、carefully は上述のように様々な解釈ができる可能性がある。

3.2.2 The job paid us handsomely.の場合

この節では下位範疇化副詞として挙げられている handsomely の例を検討し、この handsomely は状態変化の程度を表す副詞であり、動作主の行為の様態を表す Agent 指向の様態副詞とは異なるものであることを示す。そして様態修飾ではなく状態変化に関わる修飾をするため、この副詞は動詞の後ろ側に強く限定されるのだと主張する。これにより下位範疇化副詞という区分は必要なくなる。また状態変化の程度を表す副詞の 1 つとして完結性程度副詞を挙げ、handsomely との相違点および共通点を述べ、handsomely が持つ前置不可能性の根拠の補強を行う。最後に状態変化程度副詞が動詞の後ろ側に限定されるという主張の反例になりうる〈handsomely + pay + 名詞〉の例を検討し、これが反例にはならないことを示す。

まず下位範疇化副詞とされている次の handsomely の例を検討し、これが状態変化に関わる副詞である可能性を検討しよう。

(76) The job paid us handsomely.　(Jackendoff (1972: 64))

この例はその仕事はかなりのもうけになったということであり、仕事をすることによって支払われた報酬などが大きかったことを意味している。ここから考えるとこの handsomely は行為の過程を修飾する様態副詞とは言えない。仕事からお金が支払われるそ

の過程の様子が handsome であったと言っているわけではないからである。お金が支払われるという行為の結果、目的語として生じている受益者の所持しているお金の量が増え、そのお金の変化量の程度が大きかったことを表している。ここではこの handosomely を状態変化程度副詞と名付けておこう。handsomely は様態副詞ではなく状態変化の程度を表す Theme/Location 指向の副詞なので、動詞の後ろ側に限定されると考えられる。このように下位範疇化副詞という分類を作ることで捉えていた特殊性を別の要因に帰することができるので、下位範疇化副詞という区分は必要ないのである。

次に、状態変化の程度を表す副詞の仲間として完結性程度副詞（perfection-of-degree adverb）を検討する。この完結性程度副詞は動詞の後ろ側にのみ生起することが指摘されている（Haumann 2007: 133）。[45]この状態変化程度副詞 handsomely と共通する前置不可能性は、状態変化の修飾に関わる副詞は動詞の後ろ側に限定されるという本論文の立場を支持するものである。

(77) a. Joe built the house poorly.[46]

b. Laura cooked the roast perfectly.

(78) a. *Joe poorly built the house.

b. *Laura perfectly cooked the roast.

(Ernst (2002：224))

---

[45] 完結性程度副詞は動詞句の前に生起する場合もある（Ernst 2002: 224-225）。Ernst によれば、動詞の意味と副詞の意味との関係によって前に生起できるか否かの違いが生じる可能性があるという。ある特定の動詞との組み合わせの際に副詞が基本の位置から逸脱する現象については 4 章で扱う。ただし 4 章で扱うのは中核的純様態副詞であり、完結性程度副詞に関しては今後の課題とする。

[46] この例の poorly は、家が未完成であったという完結性程度副詞の読みと、作り方がお粗末であったという様態副詞の読みがあると考えられるが、ここでは前者の解釈とする。

ただし（77）の副詞の例は状態変化程度副詞の handsomely が果たしている機能と同じではない。（77a）の例では poorly は家を建てるという行為が完結していないことを表している。（77b）の例では perfectly は調理という行為が完全に達成されたことを表している。このように完結性程度副詞は動詞の表す行為がどの程度まで達成されているかを示すものであるが、状態変化程度副詞の handsomely は支払うという行為が達成されていることは前提となっており、支払う行為の結果として目的語名詞句の金額の増加の程度が大きいことを示している。完結性程度副詞と状態変化程度副詞はこのような機能の違いはあるが、状態変化に関わるという点では共通し、それゆえどちらの副詞も動詞の後ろ側に限定されると考えられる。

最後に handsomely の前置不可能性の反例になりうる以下の例を検討しよう。この例では handsomely が動詞の前側に生起している。

（79）He handsomely paid us.　　（鈴木（2014: 83））

鈴木（2014）は主語が人である場合は handsomely が動詞の前側に生じることがあると観察している。しかしこの例は、主語がお金を支払う主体であるという点で（76）と異なる。ここでは（79）の handsomely は下位範疇化副詞が前置している例であるとは考えず、主語が気前のいい様子で支払ったことを表す Agent 指向の様態副詞の解釈だと考える。主語が無生の場合にこのような例が観察されないという事実は、主語が無性の場合は気前のいい様子で支払ったという様態解釈が不可能となり、状態変化程度副詞の解釈を余儀なくされて動詞の後ろ側に生起が限定されるからと説明することができる。[47]

[47] 鈴木（2014: 83）は（79）の handsomely も下位範疇化副詞であり、事象の非日常性の消失という観点から handsomely の前置を機能的に説明している。。

3.2.3 Steve dresses elegantly.の場合

この節では下位範疇化副詞として挙げられる elegently が様態副詞ではなく、状態変化の結果の様子を表す結果副詞であることを確認する。そしてそのような機能を持つ結果副詞は Theme/Location 指向の副詞なので動詞の後ろ側に限定されるのであり、下位範疇化副詞という区分は必要ないと主張する。また結果副詞と結果述語の共通点を明らかにし、これらの副詞の共通点が本節の立場を支持するものであることを確認する。

elegantly が下位範疇化副詞として挙げられる次の例を検討しよう、

(80) Steve dresses elegantly. (Jackendoff (1972: 64))

この例の elegantly は様態副詞と結果副詞の 2 通りで解釈が可能である。様態副詞の場合は服を着るという動作が elegant な様子であることを表す。結果副詞の場合は服を着る動作の結果として elegant な様子になったことを表す。下位範疇化副詞として捉えられている elegantly はこの結果副詞としての解釈であると考えられる。[48]状態変化の修飾に関わる副詞は動詞の後ろ側に限定されるというのが本論文の立場であり、実際のところ状態変化の結果を修飾する結果副詞は動詞の後ろに生起するという事実が観察される。

(81) a. They decorated the room beautifully.

b. They loaded the cart heavily.

(Geuder (2000: 69))

(81a) は飾り付けた結果として部屋が美しい様子になったこと、(81b) は荷物を積んだ結果

[48] なぜなら様態副詞の elegantly は〈elegantly + dress〉という語順が可能だからであり、下位範疇化副詞の特徴である前置不可能性を示さないからである。この具体例は後程検討するが、下位範疇化副詞として考えられている elegantly は結果副詞だとしておく。

としてカートの重量が重たくなったことを表している。状態変化を表す副詞が動詞の後ろ側に置かれるという主張は、次の例のように結果述語が動詞の後ろ側に生起する事実と意味的に関連性があるだろう。

(82) a. They broke the window to pieces.

b. He shot the bear dead.

結果副詞も結果述語も状態変化に関わり、そのため Theme/Location 指向の修飾をするため動詞の後ろ側に限定されるとすれば、carefully や handsomely のときと同様に下位範疇化副詞という区分の必要性はないと主張することができる。[49]

ただし結果副詞と結果述語は全く同じものではない。通常結果述語は 1 文に 1 つしか生起できないという制約がある（Tenny 1994, Goldberg 1995 など)。しかし結果述語と結果副詞は（83）のように同一文中に生じることが可能であり、これは結果副詞が結果述語とは異なる種類のものであることを示している。

(83) Ralph dyed his hair black beautifully. （松井・影山（2009: 274))

[49] 結果副詞は結果述語とは異なり、動詞の前側に生起する可能性があることを鈴木（2014: 86）は指摘している。
(i) He flavorfully created dishes to blend harmoniously with each premium wine pairing.（彼が料理ごとに高級なワインを 1 種類ずつ出すと、料理とワインがセットになってよい香りが漂ってきた。） （鈴木 2014: 86）
鈴木によればこの例は情報構造上の要請によるもので、この結果副詞を動詞の後ろ側に置くと微妙に意味が異なってしまうという作用域の問題であるとしている。この点で脱焦点化による前置とは異なる。本論文では結果副詞は脱焦点化による前置は基本的には起こらないという結論にとどめ、上記（i）のような例は今後の課題とする。

松井・影山（2009: 273）によれば、結果述語は「動詞の表す事象によって引き起こされる直接的な結果を客観的に表す」が、結果副詞は「話者の主観的判断を述べている」のだという。(83）の例で結果述語の black は、髪を染めた結果として髪の色が black になったという客観的な事態を表しているが、結果副詞の beautifully は髪を染めた結果の様子を見て話者がそれを beautiful と判断するという、より主観的な意味を表しているのだという。[50]このように結果副詞と結果述語は異なるものであるが、意味的な関連性も高く、動詞の後ろ側に生起するという特徴も共通している。これは状態変化の結果を修飾する結果副詞が動詞の後ろ側に強く限定されるという主張を支持するものである。[51]

3.3 コーパスによる検証

前節での分析によって、従来下位範疇化副詞とされてきた carefully、handsomely、elegantly は状態変化に関わる修飾を行う副詞であり、それぞれ状態変化修飾副詞、状態変化程度副詞、結果副詞であることが示され、下位範疇化副詞という区分が必要ないとの主張を行った。本節ではその主張の妥当性をより高めるために COCA を利用し、それぞれの副詞の実例を精査していく。これらの副詞は Theme/Location 指向なので動詞の後ろ側に限定されるはずであり、COCA によって得られるデータからもそのような事実が明らかとなる。

---

[50] Broccias (2008: 32-33）も結果副詞には主観的な判断が反映されやすいと述べている。また鈴木（2014: 95）は結果述語（結果形容詞）と結果副詞（結果用法の様態副詞）の違いを以下のように示している。

(i) 結果形容詞は被影響者（patient）の属性を直接叙述する。(中略) 結果用法の様態副詞は被影響者（patient）の属性を間接叙述する。　　（鈴木(2014: 95)、下線原文）

[51] 結果副詞と結果述語が同じものでないことは、(81）の結果副詞を次のような形容詞の結果述語に変えることができない点からも示される。

(i) a. *They decorated the room beautiful.
b. *She dressed elegant.
c. *They loaded the cart heavy.　　（Geuder (2000: 72), Levinson (2007: 42)）

3.3.1 〈word + carefully〉と類似表現の検証

本節では動詞 word と carefully などの副詞との共起を検証し、〈word + 名詞 + 副詞〉の構文に生起する副詞は様態副詞ではなく、目的語名詞句の状態変化に関連する修飾を行う状態変化修飾副詞であることを確認していく。

COCA で動詞 word の右側 3 語の範囲で副詞が共起する例を検索し、〈word + 名詞 + 副詞〉の構文に生起しうる副詞を抽出する。[52]そこからさらに能動態の述語動詞を修飾しているものを抜き出すと次のようになる。[53]この〈word + 名詞 + 副詞〉の構文に生起する副詞のリストが本論文の分析対象となる。括弧内は生起数である。

(84) differently (13), carefully (6), poorly (6), correctly (3), badly (2), incorrectly (2), beautifully (1), broadly (1), clearly (1), strongly (1), vaguely (1),

この (84) の例を主に検討していく。

まずは〈word + 名詞 + 副詞〉の語順になっている例として、(84) のリストには載っていないが興味深い例として word と positively の共起例を検討する。このような positively を主語の行為の様態を表す Agent 指向の様態副詞と捉えるのは困難である。

---

[52] この段階での抽出結果は以下のようになる。
differently (33), carefully (15), poorly (13), negatively (12), positively (11), vaguely (9), exactly (7), badly (4), clearly (4), correctly (4), strongly (4), beautifully (3), broadly (3), favorably (3), incorrectly (3)

[53] 本論文では副詞が能動態の述語動詞を修飾している例のみを扱うので、形容詞や分詞を修飾したり、不定詞や動名詞を修飾したりする場合は除く。また副詞の前後にコンマが置かれて動詞から切り離されるなど、挿入的に用いられている場合も除く。このような例を除くのは、これらの要素が副詞の生起位置と解釈に様々な影響を与えるからである。例えば能動態では動詞の後ろ側に生じることがほとんどである様態副詞も、受動態では動詞の前側に生じる割合が高くなる。

(85) **Word** the question positively. Avoid negatives such as *not* or *except*. Using negatives can be confusing to students and can also give an advantage to test-wise students.

(https://tomprof.stanford.edu/mail/1712 イタリック原文)

この例の word positively は波線部の内容から明らかなように、not などの否定表現を使わずに質問文を作成せよという意味であり、ポジティブな様子、方法、あるいはポジティブな気持ちで言葉を選べと言っているわけでもない。そうではなく、出来上がった質問文の内容を positive にせよと述べているのである。positively は出来上がる目的語名詞句の中身・状態を示していると考えることができる。このように、この例に生じている positively は動作主の行為の様態を表す様態副詞であるとは言えないのである。

次に word と broadly が共起している例を検討する。この broadly も主語の行為の様態を修飾する様態副詞とするのは困難である。

(86) Being more strategic could include avoiding suits that turn on sections of the law that Congress **worded** broadly, as a way of giving future agency chiefs and researchers room to factor scientific advances into saving species and their habitats.

(COCA 2018: MAG)

この例は波線部の内容を考えると、議会が法律の条文を幅広く表現していることを意味しているが、幅広さはその内容についてのことであり、議会の行為が何かしら幅広いと言っているわけではないはずである。やはりこの例の副詞も行為者の動作の様態を表しているのではなく、行為によって出来上がるものの内容について述べていると言える。

次に word と vaguely が共起している例を検討する。

(87) He had deliberately **worded** his worry vaguely enough to ensure a belated response.

(COCA 2002: FIC)

この例は波線部の「反応が遅れるように」から考えると、自分の心配事をわざと曖昧な表現で述べたということになる。この例も主語である彼の様態または行為の方法が曖昧と言っているわけではないので、この例の vaguely は行為を修飾する様態副詞であるとは言い難い。

次に word と clearly が共起している例を検討する。

(88) Looks to me as if the only real way to protect your rights to yourself, is to acquire a patent on your unique genetic properties. Just **word** it clearly enough to cover all contingencies. (COCA 2012: WEB)

この例は波線部の「不測の事態をすべて十分にカバーできるように」から考えると、特許を保護するためにその特許の内容を明確な表現にせよということであろう。ここでも主語の様態や行為の方法が明確だと言っているわけではなく、出来上がるものの内容を clear にせよということである。

次に word と incorrectly が共起している例を検討する。

(89) I may have **worded** it incorrectly, what I meant with Koufax was I don't believe he even started pitching until a later age, not a position player just taking the game up later. (COCA 2012: WEB)

この例は波線部で「私が言いたかったのは…」とあることからも、内容が間違っていたかもしれないと述べている場面だと考えられる。incorrectly や対義語の correctly は結果に焦点を当てることが指摘されている。

(90) a. John correctly/incorrectly said that he was a genius in mathematics.

b. *John correctly/incorrectly mumbled that he was a genius in mathematics.

(廣瀬 (1986: 316))

発話動詞 say は伝達の結果に焦点があるため結果に焦点を当てる correctly/incorrectly の性質と合うことから問題なく共起することができ、伝達の様態に焦点がある発話様態動詞 mumble とは共起できないという。(90) の incorrectly と (89) の incorrectly は同じ意味機能を持っているわけではないだろうが、(90) の例から推測される correctly/incorrectly の性質から考えると、(89) でも incorrectly はどのような様態であるかには焦点を当てておらず、どのような内容に結果としてなったのかを修飾していると言える

最後に改めて word と carefully が共起している例を検討する。word と carefully が共起する場合、carefully を主語の行為の様態と捉えることは他の副詞と比べると比較的容易であるが、やはり目的語名詞句の状態変化の修飾をしていると考えるべきであると主張する。

(91) John **worded** the letter carefully. (Jackendoff (1972: 64))

word と共起する carefully の場合、ほかの word と副詞の組み合わせの場合とは異なり、「注意深く表現する」という単純な様態解釈をしても、「表現が注意深い内容である」という意味とほぼ同様の内容を表すように思える。注意深く言葉を選べば当然注意深い内容になるという推論が働く。また注意深く言葉を選ぶ場合、主語の様態が careful であるということ

もできる。[54]つまり真剣な顔で手紙を書いたり、推敲しながら書いたりといった様子が想像できる。このためこの例に生じている carefully はあくまでも主語の様態を表す単純な様態副詞であるとみなされてきたのではないだろうか。しかし今まで見てきたように、〈word＋目的語 ＋ 副詞〉の構文における副詞は目的語名詞句の状態変化と関連した修飾を行っているのだから、この（91）における carefully もそのような機能を有していると考えるのが自然である。またそうでなければ、通常の様態副詞とは異なり動詞の前側に生じるのが困難である理由が説明できないのである。

結局、〈word＋ 目的語 ＋ 副詞〉の構文に生起する副詞は目的語がどのような内容になったのかを表しており、単純な様態副詞とは意味的にはっきりと区別ができる場合（例えば（85）のような場合）と意味的に重なりが大きくはっきりと区別がしにくい場合（例えば（91）のような場合）があるということである。単純な様態副詞とはっきり区別がつきにくい場合であっても、この構文に生起する副詞は単純な様態副詞とは言い難い。なぜなら、行為の単純な様態を修飾する場合と異なり、これらの副詞は動詞の後ろ側に生起位置が限定されるからである。

ここからは〈副詞 ＋word＋ 名詞〉の語順になっている事例を検証する。この構文に生起する副詞がもし状態変化修飾副詞だとすると、これらの副詞が動詞の前側に生じている例は、状態変化修飾副詞の前置不可能性の反例となる。しかしこのような副詞は状態修飾ではない用法であり反例とはならないことを示す。まず COCA で副詞が word のすぐ前側に生起している例を抽出する。[55]そこからさらに副詞が能動態の述語動詞を修飾している例を抽

---

[54]（91）からは John was careful.という主語の様子も推測されるが、例えば（86）から The Congress was broad.は導けない。

[55] この段階の抽出結果は以下のようになる。
strongly (68), carefully (67), negatively (43), poorly (42), vaguely (31), positively (21), broadly (18), badly (6), clearly (3), differently (2), beautifully (1), correctly (1), exactly (1)

出すると、次の 2 種類の副詞の合計 5 例のみであった。これがここで分析の対象となる〈副詞 ＋word＋ 名詞〉の構文に生起する副詞のリストである。

(92) carefully (4), poorly (1)

もしこれらの副詞が状態変化修飾副詞であれば、その前置不可能性という性質の反例となるが、〈副詞 ＋word＋ 名詞〉の語順の場合、これらの副詞は様態副詞や態度副詞の解釈であると主張する。動詞の前側の副詞の用法としては次の用法の間で曖昧なのであった。

(93) 主語　副詞　動詞
　　↓
　　脱焦点化様態副詞、vP 様態副詞、価値判断の主語副詞、心的態度副詞

以下、例外語順の例を検証していく。

まず〈carefully + word + 名詞〉の 1 つ目の例を検討する。

(94) Do you understand that the members of the First Congress who carefully **worded** the First Amendment could have easily used the word abridging in regard to "free exercise," if that is what they had also meant?　(COCA 2012: WEB)

この例は憲法修正第 1 条の作成に際してどのような言葉を使うことができたかを述べている。ここではこの carefully は通常の様態副詞、あるいは態度副詞と考えられる可能性を指摘する。その理由は 2 点ある。1 点目は word の目的語が the First Amendment という非日常的な語である点である。word the letter では「手紙に言葉を入れる」という情報的価値がない意味になるが、worded the First Amendment は「修正第一条に言葉を入れた」という

それ自体で意味のある情報になる。よって carefully が条文の内容を表す状態変化修飾副詞であると考える必要はない。もう 1 点は worded the First Amendment の表す「実際に修正第一条を作成した」という現実と波線部が表す仮定との対比関係から、やはりこの worded the First Amendment 自体が重要な意味を持っているという点である。これら 2 点の理由から（94）の carefully は情報構造上必須ではなく単純な様態や心的態度を表すものと解釈できる。

次に〈carefully + word + 名詞〉の 2 つ目の例を検討する。

（95）The anonymous e-mail she'd carefully **worded** and sent contained a way for him to answer through an intermediate e-mail address that would prevent her having to reveal her name ... （COCA 2006: FIC）

word の目的語が最初の波線部に示されるように the anonymous e-mail という非日常的なものである点、また中身についての情報も後半の波線部によって示されている点から、この例の carefully も中身を示す状態変化修飾の用法ではなく、単純な様態あるいは心的態度を表す用法と考えることができる。

〈carefully + word + 名詞〉の 3 つ目として次例を検討する。

（96）Whenever it came up, I carefully **worded** the sentences to be ambiguous.

（COCA 2012: BLOG）

この例では波線部の不定詞が文の中身を示唆する重要な情報を担っており、carefully がなくとも文は成立する。よってこの例の carefully も状態変化修飾副詞ではない単純に主語の様態を示す用法と考えることができる。

〈carefully + word + 名詞〉の語順になる 4 つ目の例を検討する。

(97) As we meet to deliberate and carefully **word** our wording in letters to the French powers ... (COCA 2012: BLOG)

この例は目的語が手紙などの言葉を入れる対象ではなく、言葉それ自体である our wording である点に注目したい。word one's wording は COCA 全体でも 1 件しか検出できないが、結局は言葉を選ぶという行為に焦点が当たっており、そのためその行為の様態あるいは主語の態度を修飾する表現として carefully が機能していると考えられる。

このように、COCA における〈carefully + word + 名詞〉の語順の例はすべて状態変化修飾副詞ではないと分析できるため、これらの例は前置不可能性の反例とはならない。これにより、状態変化修飾副詞が動詞の後ろ側に強く限定されるということ、またそこから導かれた下位範疇化副詞という分類が不要であるということの 2 点がより妥当なものであることが示された。

3.3.2 〈pay + handsomely〉と類似表現の検証

本節では動詞 pay と handsomely などの副詞との共起を検証し、〈pay + 副詞〉の語順が圧倒的に多いことを確認し、〈副詞 + pay〉の語順で生起する副詞は状態変化程度副詞ではなく様態副詞であると主張する。

COCA で動詞 pay の左右 3 語の範囲で副詞が共起する例を検索して、pay off や pay back などの句動詞の例を除くと、以下の副詞が共起数上位を占めていることが示される。

(98) more, well, less, only, full, about, too, so, enough, very, over, just, handsomely, nearly, dearly, directly, almost, much, least, then

これらの副詞の多くは量の程度を表す副詞であり、handsomely もその仲間であるという主張の補強材料となるが、同時にこれらの多くが-ly 副詞ではないため、handsomely が動詞の後ろ側に限定されているかどうかを分析する際の補強材料としては使うことはできない。[56]

ここからは〈pay + handsomely〉の語順で handsomely が生起している例を検討する。上記の検索方法によって得られた共起数は 396 例であり、そのうち能動態の述語動詞を修飾している例は 91 例であった。この 91 例のうち、88 例が〈pay + handsomely〉の語順であり、handsomely が pay の後ろ側に強く限定されているのは事実であることが裏付けられる。以下では状態変化程度副詞の handsomely は動詞に前置できないという性質の反例に見える〈handsomely + pay〉の語順の 3 例を検討し、この handsomely は状態変化程度副詞ではないため反例にはならないと分析する。

1 つ目の〈handsomely + pay〉の語順例を検討しよう。

(99) After he and Bryant were acquitted, Milam confessed to and, in fact, bragged about murdering Till to journalist William Bradford Huie, who handsomely **paid** Milam for a confession and who later published Milam's words... (COCA 2017: ACAD)

すでに（79）で述べたように、handsomely は主語がお金を出す主体である有生のものならば様態副詞として動詞の前側に置かれることがある。(99) で pay の主語はジャーナリストの William Bradford Huie であり、handsomely は Milam の殺人の告白に報酬を支払った様子が気前のいいものであったことを表す様態副詞と考えることができる。

2 つ目の〈handsomely + pay〉の例は以下のものである。

---

[56] -ly 副詞と-ly が語尾につかない副詞とではその統語的振る舞いが一般的に異なるからである。

（100）To achieve this contract, they handsomely **paid** a royalty to the land-owner, and everybody was happy. Big oil should not get away without paying this royalty if drilling off the coast is opened! （COCA 2008: NEWS）

（100）では主語 they は石油会社で働いている人々を指しており、この they は有生のお金を支払う主体であると考えて問題ない。よってこの例の handsomely も有生主語の支払いに際しての気前のいい様子を表す様態副詞と考えることができる。

続けて最後の〈handsomely + pay〉の語順例を検討しよう。

（101）So, why are universities handsomely **paying** professors to produce unread and unreadable research? （COCA 1995: ACAD）

（101）の例では主語は大学となっているが、この語も報酬を支払う主体として有生のものとして捉えられていると考えられる。報酬を与える主体が主語の場合、handsomely は様態副詞として動詞の前に生起できるのである。またこれらの例では何に対して支払うのか、あるいは何のために支払うのかという文の重要な情報が波線部で示されている。このことも理由となり、handsomely が脱焦点化様態副詞として動詞の前側に生じていると考えることができる。

結局〈handsomely + pay〉は状態変化程度副詞である handsomely の前置不可能性の反例とはならず、状態変化程度副詞は Theme/Location 指向の副詞であるため動詞の後ろ側に限定されるという主張は維持されることになる。またこの主張が維持されたことにより、下位範疇化副詞が必要ないという主張もまた維持されることになる。

3.3.3 〈dress + elegantly〉と類似表現の検証

本節では動詞 dress と elegantly などの副詞との共起を検証し、〈dress + 副詞〉の構文に生起する副詞が結果副詞であることを検討していく。また〈副詞 + dress〉の語順で生起する副詞が結果副詞とは言えないことを示し、結果副詞が動詞の前側に生起しないことを示す。また最後に dress と共起する副詞の中で結果副詞の用法を持たないと思われる quickly を検討し、本論文の主張の補強とする。

COCA で動詞 dress の左右 1 語の範囲で副詞が共起する例を検索して、-ly 副詞のみを生起数の多い順に 15 位まで抜き出すと、以下の副詞が共起数上位を占めていることが示される。

(102) casually, appropriately, impeccably, neatly, quickly, nicely, properly, smartly, elegantly, modestly, warmly, differently, conservatively, beautifully, simply

これらの副詞の中から結果副詞の代表例である elegantly、生起数上位 3 位の casually、appropriately、 impeccably を検討していく。これらの副詞の生起数は以下のようになる。

表 1 dress と副詞の共起状況

	dress の左右 1 語に生起する数	〈dress + 副詞〉	〈副詞 + dress〉
elegantly	116	1	0
casually	247	20	1
appropriately	185	72	0
impeccably	177	12	0

elegantly は dress の左右 1 語の範囲に 116 回、casually は 247 回、approproately は 185 回、impeccably は 177 回生起している。ここから能動態の述語動詞を修飾している例のみ抽出

すると、elegantly は 1 例、casually は 21 例、appropriately は 72 例、impeccably は 12 例、であった。ほぼすべてが動詞の後ろ側に生起し、前側に生起している例は casually で 1 例あるのみであった。これらの副詞と dress が共起する場合、その多くが be elegantly dressed のような受動文か an elegantly dressed man のような語句に生起している。以下、〈dress + 副詞〉の例を上記の表の上から順番に検討し、そののち〈副詞 + dress〉の語順となっている〈casually + dress〉の 1 例を検討する。

〈dress + 副詞〉の例として elegantly の例から考察してみよう。

(103) Britain's richest families gather for the royal dress show. Everyone **dresses** elegantly. Daphne wears a funky, stylish outfit. But the other girls her age laugh at her.

(COCA 2012: FIC)

この例はみんな elegant な格好をしているが、波線部が示しているように Daphne は funky で stylish な格好だということを意味していると考えられる。〈dress + elegantly〉が波線部と対比されていることからも、この elegantly は結果副詞として主語の着衣の結果としての様子を表す結果副詞であると考えるべきである。

次に〈dress + casually〉の語順の例を分析し、それが結果副詞の解釈であることを検討する。

(104) Wark, who **dresses** casually in sneakers and shorts, laughed when asked how his outlook for the program in 2012 stacks up with the growth and demand the software school has experienced during the past seven years. (COCA 2019: NEWS)

この文は Wark がカジュアルな格好であったことを意味しており、casually は dress した結

果の様態を表しており、さらにそれを具体化する波線部 in sneakers and shorts が後に続いていると考えられる。日本語にするなら、Wark はスニーカーに短パンというカジュアルな格好であったとするべきであり、この文脈では「何気なく」スニーカーに短パンという格好であったという様態解釈ではないだろう。

次に appropriately を検討する。appropriately が能動態の dress を修飾している例は 72 例あり、そのすべてが以下のような〈dress + appropriately〉の語順であり、やはり dress の後ろ側に生じている場合は結果副詞として機能している。

（105）“**Dress** appropriately; bare feet or offensive clothing aren't allowed”

（COCA 2019: NEWS）

この例は適切な身だしなみをせよという意味であり、波線部によってより具体的に素足や不快な服装は許可されていないということが示されている。この例も着る動作の様子が appropriate だと言っているわけではなく、動作の結果の服装が appropriate になるようにせよと言っているのである。

次に impeccably と dress が共起している例を検討する。impeccably が能動態の dress を修飾している例は 12 例あり、そのすべてが〈dress + impeccably〉の語順であり、この語順の場合の impeccably は結果副詞であると分析する。

（106）In Washington, they wore her clothes like uniforms. Chanel wore them like her own skin. “**Dress** shabbily and they remember the dress; **dress** impeccably and they remember the woman.” （COCA2013: FIC）

この例では波線部の dress shabbily というコロケーションも存在している。（106）の後半は

みすぼらしい格好なら服が記憶に残り、完璧な服の着こなしならそれを着ている女性が記憶に残るというような意味であり、この例でも dress の後ろの副詞 shabbily や impeccably は行為の様態を表すのではなく、行為の結果の様態としてどのような格好なのかを表している。

ここで結果副詞としての性質をよく示す例として、（102）に示された〈dress ＋ 副詞〉の構文に生起する上位の副詞の中から warmly の例を検討して、dress の後ろ側の副詞は結果副詞であることを確認する。

（107）The cold really doesn't matter if you **dress** warmly," says 17-year-old Life Scout James Drawz. （COCA 2012: MAG）

これは暖かい恰好をすれば寒さは問題にならないということを意味している。warmly が様態副詞だとしたら、動作の途中の様子が暖かいという意味的に理解ができない解釈となる。よってこの walmly は着るという動作をしてその結果の状態として暖かくなるという、結果副詞としての解釈を明確に示す好例である。

ここまで能動態の述語動詞 dress と-ly 副詞が共起する例を検討してきた。ほぼすべての例において副詞は動詞の後ろ側に生起することが明らかとなった。またそれらの副詞は結果の様態・状態を表す結果副詞の解釈を持つことができることを見てきた。結果副詞は Theme/Location 指向だから動詞の後ろ側に強く限定されると考えられる。[57]状態変化に関する副詞は動詞の後ろ側に生起が限定されるという主張に沿う事実が実例及びその頻度によって示されたのである。

---

[57] 副詞が動詞の前側に置かれるのは目的語のほうに焦点を当てるためという場合もあるが、dress は自動詞なので目的語がない。したがって副詞が脱焦点化して動詞の前側に移動する理由の 1 つがないのである。このような事情が複合的に重なり、dress と共起する副詞は動詞の後ろ側にさらに強く限定されると考えられる。

以下では〈casually + dress〉という反例のように見える実例を検討する。

(108)　She casually **dresses** in her old real estate blazer, ...　(COCA 2017: MAG)

この（108）で casually は dress の前にあるが、波線部の in her old estate blazer の存在によってどのような格好をしているのかという最も大事な情報は示されている。よってこの casually は格好を示すことができる結果副詞である必要はなく、情報価値的にも文の必須要素にはなっていない。結果用法でなければ動詞の前側に生じることができ、次のような複数の解釈を持つ可能性があるのであった。

(109) 主語　副詞　動詞
↓
脱焦点化様態副詞、vP 様態副詞、価値判断の主語副詞、心的態度副詞

この例の前後の文脈を見ると、この女性は Melissa といい、かつてはやり手の不動産業者であったが、現在は病気のためか、予想のつかない行動をするようになっているという。そのためこの casually は「何気ない様子で・特に考えがあってではなく」という様態あるいは心的態度用法を表しており、「特に考えがあるわけでもなくかつて所有していた不動産のブレザーを着ている」というような意味だと考えるのが適切であろう。よってこの例は結果副詞の前置不可能性の反例にはならない。

次に dress の前後に quickly が生じている例を検討する。quickly は dress の前後どちらにも生起することができ、これがもし〈dress + 副詞〉構文に生起するその他の副詞と同じく結果用法だとすると本論文の分析の問題となる。だが quickly は結果用法ではなく、また quickly と共起している際の dress は今まで検討してきた〈dress + 副詞〉構文の「格好である」という意味の dress とは異なり、「着替える」という意味の動作動詞として使われてお

り、そのため〈dress + 副詞〉構文の結果副詞と同じふるまいをせずとも、今までの分析の問題とはならないことを示す。

それでは quickly が dress と共起している場合、それが結果副詞としては使われていないことを以下の例で検討しよう。

(110) She **dressed** quickly in a corduroy skirt and light sweater and locked the house up.

(COCA 2017: FIC)

この例は素早くコーデュロイのスカートと薄手のセーターに着替えて家の戸締りをしたというような意味であり、quickly は様態副詞として着替える動作が素早いことを意味し、着替えた結果として素早い恰好になったという解釈は意味不明のためできない。またこの dress は「着替える」という意味であり、〈dress + elegantly〉に見られるような「格好である」という意味とは異なる。

quickly が結果副詞ではないとすると、quickly が動詞の後ろ側に限定されるという制限はないことが予想され、事実以下のような〈quickly + dress〉の例は数多く生起する。

(111) Jim returned to his room and quickly **dressed**. (COCA 2012: WEB)

この例は部屋に戻って素早く着替えたという意味であり、動詞の前側に生起する quickly は様態修飾ではなくアスペクト修飾（aspectual modification)、あるいはレート修飾（rate modification）の副詞として使用される（Eszes 2009)。[58]これらの用法で使用される quickly

[58] quickly の様態修飾、アスペクト修飾、レート修飾の具体例として以下を見てみよう。
(i) a. Mary moved to the window quickly.
b. Mary quickly moved to the window. (Eszes (2009: 273))
(ia) の例では quickly は様態副詞として働き、移動する際の体の動きが速かったことを示し

は動詞の前側に置かれるのが普通であるとされている。quickly にはこのような用法があるため、結果副詞とは異なり dress の前側に問題なく生起するのだと考えられる。

ここまで動詞 dress と共起する副詞を検証し、〈dress + 副詞〉の構文に生起する副詞が結果副詞であること、また〈副詞 + dress〉の構文には結果副詞は生起しないことが明らかになった。また例外的に dress の前側に生起しているように見える例でも、その副詞は結果副詞としての用法ではなく、そもそも dress 自体も結果副詞と共起する際の意味とは異なるものであることを明らかにした。結果副詞でなければ dress の前側に生起できることを示すことによって、逆に結果副詞は動詞の後ろ側に限定される傾向が強いことも示すことになるのである。

3.4 まとめ

本章では下位範疇化副詞として分類されている副詞の生起位置や意味機能について分析を行った。3.1 節では下位範疇化副詞は省略が不可能であるという性質および動詞に前置させることが不可能であるという性質をもっており、そのうえでこの省略不可能性に対する反例をあげ、この特殊性について従来の説明とは異なる説明が必要になることを述べた。3.2 節では従来の下位範疇化副詞はすべて Theme/Location を指向する状態変化に関する修飾を行う副詞であることを示し、そのため動詞の後ろ側に基底生成すると提案した。また下位範疇化副詞の代表例である carefully、handsomely、elegantly がそれぞれ状態変化修飾副詞、状態変化程度副詞、結果副詞であることを示した。3.3 節では、〈word + carefully〉〈pay

---

ている。それに対し（ib）の例では quickly は体の動き自体が素早かったかどうかは直接的には述べず、代わりに突然窓へ動いたという解釈（アスペクト修飾）と、窓までの移動に要する時間が短いという解釈（レート修飾）がありうる。様態用法の quickly は動詞に前置できないとされている。様態用法の quickly が動詞に前置できない理由はさらなる考察を要する。quickly に関しては Travis (1988)、Tenny (2000)、Thompson (2006)、Eszes (2009)、Koev (2017) などを参照。

+ handsomely〉〈dress + elegantly〉及びその類例をコーパスで検証し、これらの実例がいずれも状態変化に関連した修飾を行うものであることを明らかにした。またこれらの副詞が持つ前置不可能性の反例のように見える事例をコーパスの実例を検証し、これらの実例が反例とはならないことを示した。これにより、Theme/Location を指向する副詞は動詞の後ろ側に生起が限定されること、そして従来の下位範疇化副詞という分類は必要性がなくなったことを明らかにした。

第 4 章　中核的純様態副詞の実態

本章では中核的純様態副詞の実態解明を行う。この副詞を分析の対象とする理由は以下による。様態副詞の基本的な位置は動詞の後ろ側であるとされている。しかしある様態副詞の生起数をコーパスで単純に検索するだけでは、様態副詞の基本位置が動詞の後ろ側だと証明することはできない。なぜならばその様態副詞と同形の他の用法の副詞も動詞の前後に生じうるからである。[59]様態副詞として用いられる副詞は以下のような様々な用法と位置で使われるのであった。

(112) 主語　副詞　動詞　副詞
　　↓　　↓
　　様態副詞、結果副詞
　　脱焦点化様態副詞、vP 様態副詞、価値判断の主語副詞、心的態度副詞

ほとんどの副詞は複数の用法を併せ持つため、様態用法のみの生起数を抽出するのは困難である。このような事態を回避するには、初めから様態用法のみを持つ副詞をコーパスで検索すればよいということになる。

(113) 主語　副詞　動詞　副詞
　　↓　　↓
　　様態副詞、~~結果副詞~~
　　脱焦点化様態副詞、vP 様態副詞、~~価値判断の主語副詞~~、~~心的態度副詞~~

そこで本章では様態用法しか持たないとされる中核的純様態副詞 loudly, tightly, brightly, woodenly をコーパスで詳細に調査していくことにする。

本章の構成は以下のようになっている。4.1 節では先行研究を概観しながら本章の分析対

[59] この問題については 2 章 2.6 節において wisely の例で示した。

象である中核的純様態副詞の一般的な性質を確認する。中核的純様態副詞は確かに様態用法に強く限定されてはいるが、一部の先行研究では他の用法を示す可能性が指摘されている。そして副詞が他用法を獲得する際には比喩的拡張が関わっているという指摘があることも示し、具体的な分析をする際の注意点を確認する。4.2 節では意味役割を組み込んだ動詞句構造と中核的純様態副詞との関わりを確認し、この構造が中核的純様態副詞の分析に対しても有用であることを示す。ここで中核的純様態副詞は Theme/Location 指向の副詞であり、位置変化・状態変化を表す副詞なので動詞の後ろ側に基底生成すると主張する。また Agent 指向の様態副詞は動詞の前側にも問題なく生起する事実を示し、従来の「様態副詞の基本位置は動詞の後ろ側である」という説明を「Theme/Location に関わる修飾する副詞の基本位置は動詞の後ろ側である」と修正する。4.3 節では loudly、4.4 節では tightly、4.5 節では brightly、4.6 節では woodenly を分析していく。これらの各節ではそれぞれの副詞の生起位置を調査し、そのほとんどが動詞の後ろ側に生起することが示される。まず動詞の後ろ側に生起する事例を検討し、そののちに例外的と思われる動詞の前側に生起する事例を検討する。これらの検討を通して 4.2 節の主張が正しいことを示す。またこれらの副詞がある特定の動詞と共起した場合には、高い割合で動詞の前側に生起するという事実が示される。この事実は中核的純様態副詞の基本性質からは想像しにくいものであるが、そのような場合の解釈が Theme/Location 指向の用法とは異なるものである可能性が高いことを示す。またこのような生起位置や用法の変化の原因となるような意味拡張とはどのようなものか検討する。

4.1 中核的純様態副詞[60]

4.1.1 中核的純様態副詞の基本的性質

様態副詞の中には様態用法以外の機能を持たない中核的純様態副詞と呼ばれる副詞が存

[60] 4.1 節は西村（2020）を加筆修正したものである。

在する。様態用法しか持たないとすれば、中核的純様態副詞の生起位置ごとの用法は以下のようになることが予想される。

（114）主語　副詞　動詞　副詞

様態副詞

脱焦点化様態副詞、vP 様態副詞

Schäfer (2002) によれば、この中核的純様態副詞には loudly, tightly, brightly, woodenly が含まれるという。これらの副詞は様態以外の解釈が要求される位置に置かれると非文になってしまう。

（115）a. *Ken loudly had spoken.

b. Ken had spoken loudly.

(Ernst (2002: 87))

（116）a. *Tightly, she might have held the reins.

b. She might have held the reins tightly.

(Ernst (2002: 44))

（117）a. *The sun brightly had been shining that morning.

b. The sun had been shining brightly that morning.

(Schäfer (2002: 313))

（118）a. *She woodenly had ignored them.

b. She was speaking woodenly.

(Ernst (2002: 88)

この事実は、これらの副詞が様態副詞としての用法しか持っていないことを表していると

いう。だが脱焦点化した様態用法であれば動詞の前側に生じることはある。

(119) a. Sarah loudly answered stupidly.

b. Sarah answered loudly and stupidly.

(Schäfer (2008: 351))

(119a) の例では動詞後方に様態解釈の stupidly が存在するため、動詞の前側の loudly は様態修飾以外の解釈が要求されているように見えるが、実際には様態修飾の読みしかなく、(119b) とほぼ同じ内容を表すという。(119a) の loudly はもともと動詞の後ろ側に基底生成されていたが、脱焦点化のために動詞の前側に置かれることになったと考えてよいだろう。[61]また中核的純様態副詞は動詞の後ろ側に限定されていることから、動詞の前側に基底生成する vP 様態副詞の用法、すなわち Agent 指向の用法も持っていないと予想される。

(120) 主語　副詞　動詞　副詞

様態副詞

脱焦点化様態副詞、~~vP 様態副詞~~

このように意味機能と生起位置が限定された中核的純様態副詞は、コーパスを用いた様態副詞の記述的研究にふさわしい対象である。

---

[61] 興味深いことに、次の例では動詞の前側に生じた carefully は様態解釈ができない。
(i) Malika carefully spoke softly. (Schäfer (2008: 352))
この carefully は心的態度あるいは価値判断の解釈である。(119) の loudly は様態解釈が可能で (i) の carefully は可能ではない理由として考えられるのは、それぞれの副詞が有している用法の数の差であろう。loudly は様態解釈しかないため様態解釈が要求され、carefully は様態修飾以外の機能があるためそちらが優先されると考えられる。

4.1.2 中核的純様態副詞と周辺用法

中核的純様態副詞には様態用法しかないと考えられている。しかし中核的純様態副詞 loudly が動詞の前側に生起したとき、様態用法とは異なる意味になることがあると Shaer (2000) は指摘している。

(121) a. The prisoner **proclaimed** his innocence loudly.

i. He woke up all the other prisoners.

ii. He really believed that he had been framed.

b. The prisoner loudly **proclaimed** his innocence.

i. He woke up all the other prisoners.

ii. He really believed that he had been framed.

(Shaer (2000: 289))

(121a) の loudly は動詞 proclaim の後ろ側なので様態副詞であり、大声で宣言したことを表すため、(i) の囚人たちを起こしたという内容の文を違和感なく続けることができるという。一方で (121b) のように loudly が動詞の前側に置かれると (i) につながりにくくなるという。すなわち (121b) の loudly は様態副詞としての解釈が困難である。Shaer (2000) によると、様態副詞と心的態度副詞の区別は一般的に考えられているほど明確ではない。[62] そうだとすると、(121b) の loudly が様態用法ではなく主語の心情を表す用法として使用され、例えば「高らかと」や「自信をもって」といった意味として使用される可能性は十分に

[62] Shaer (2000) は実際には心的態度副詞ではなく動作主指向副詞 (agent-oriented adverb) という用語を用いている。Shaer がいうところの動作主指向副詞は deliberately, reluctantly, unwillingly, voluntarily などが含まれる。Ernst (2002: 63) は calmly, sadly などとともにこれらの副詞を心的態度副詞と呼んでいる。本論文ではこれらの副詞は心的態度副詞で統一する。

ある。[63]

中核的純様態副詞が様態以外の解釈になる原因として、Schäfer（2002: 317）や Ernst（2002: 88）は語の意味の比喩的な拡張が関わっていると指摘している。この指摘を loudly に応用すれば、loudly が knock や cough などと共起する場合は、loudly が本来持っている意味機能である物理的な音の大きさを示すだけであるが、proclaim と共起すると、宣言の声が大きいという本来の意味から、声の大きさが自信を示すように意味拡張していくという説明が可能になるだろう。さらにその意味変化が生起位置にも変化をもたらす可能性があるのである（西村 2020: 186）。

中核的純様態副詞が様態用法以外の用法で使用されることは一般的ではなく、のちの分析で明らかになるように、特定の動詞と結びついたときにのみ現れる周辺的な用法であると考えらえる。[64]よって中核的純様態副詞の分析の際は周辺的用法の可能性を考慮に入れつつ、基本的には様態用法のみに注目すればよいということになる。

（122）主語　副詞　動詞　副詞

様態副詞

脱焦点化様態副詞、周辺的用法

また副詞の意味が比喩的に拡張したからと言って必ずしもそれが周辺的な用法の獲得を促すわけではない。どのような意味的拡張の場合に用法の変化が起きるのかを明らかにすることも本章の目的の 1 つである。

---

[63] これらの日本語訳では主語の行為の表面的な様子を表す様態用法と解釈することも可能だが、（121b）の loudly は主語の心情を表しているものと考える。このような主語の心情を表す副詞の解釈および日本語訳へと変換する難しさについては鈴木（2017）を参照。

[64] 事実このような解釈を認めないインフォーマントも存在する。

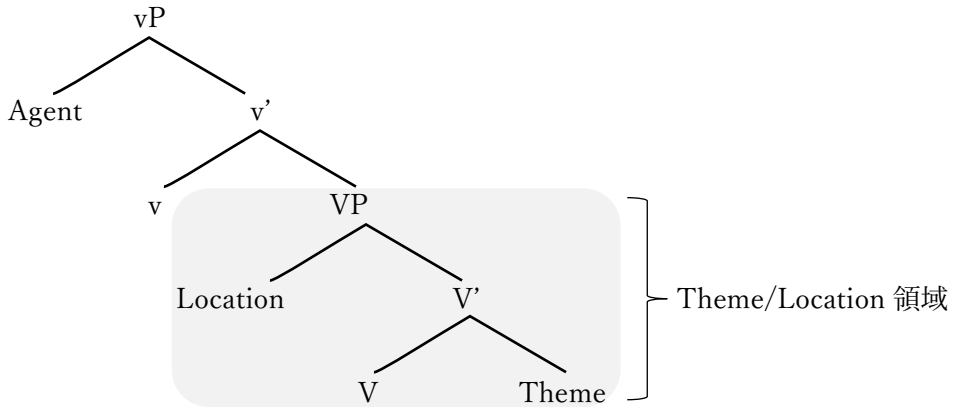
4.2 中核的純様態副詞と動詞句構造

ここまで中核的純様態副詞は様態用法に基本的には限定され、脱焦点化された場合以外は動詞の後ろ側に強く限定されることを見てきた。これらの副詞は、動詞の後ろ側に限定される性質から考えると、意味役割を組み込んだ動詞句構造における Theme/Location に関連した修飾を行う副詞であるという仮説が成り立つ。本節ではこの仮説に妥当性があることを主張する。また中核的純様態副詞ではない行為の様態を表すいわゆる普通の様態副詞は、中核的純様態副詞ほど動詞の後ろ側には限定されないことを示し、「様態副詞の基本位置は動詞の後ろ側である」という従来の説明を、「Theme/Location に関わる様態を修飾する副詞の基本位置は動詞の後ろ側である」と修正する必要があることを主張する。

4.2.1 Theme/Location 指向としての中核的純様態副詞

中核的純様態副詞が持つ動詞の後ろ側に強く限定される性質は、前章で検討した状態変化に関わる修飾をする副詞も持っている性質である。状態変化程度副詞や結果副詞を含む状態変化副詞は、次のような動詞句構造の中の Theme/Location という意味役割と関わりがあるという理由により、動詞の後ろ側が基底の生成位置になるのであった。

(123) 加賀（2001）の提案する動詞句構造

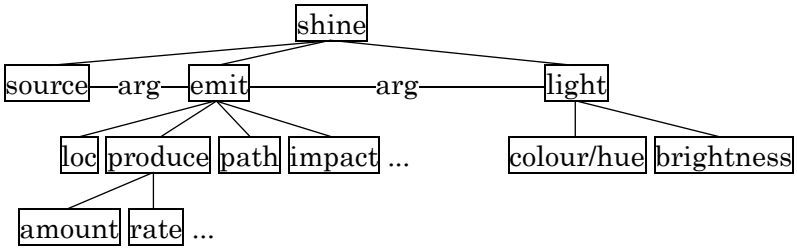


中核的純様態副詞が動詞の後ろ側に限定されるのも状態変化や位置変化と関わりがあるためであると考えれば、これらの副詞の統語と意味の関連に対してのより原理的な説明とな

る。

中核的純様態副詞は Theme/Location に関連した修飾を行うという仮説の妥当性を示すために、この副詞に分類される brightly を検討してみよう。この副詞は典型的に shine のような光の発生を表す動詞と共起し、その光の発生の様態を修飾する。この典型的共起動詞である動詞 shine の概念構造を Geuder (2006) を参考に表示する。

(124)



(Geuder 2006: 118 を参考に作成)

Geuder は Barsalou (1992) のフレーム理論を参考に shine の概念構造を上記のように示している。shine は起点 (source) から光 (light) が発せられる (emit) というその中心的な構造が項リンク (argument link) で結ばれており、さらにその下位構造として例えば色・色合い (colour/hue) や明るさ (brightness) などがある。明るさを副詞で修飾する場合は shine brightly、量 (amount) や影響 (impact) を修飾する場合は shine weakly などの表現になるという。この概念構造は加賀 (2001) の動詞句構造に応用することが可能である。すなわち (124) の起点は Location、light はその Location から移動する Theme であると考えることができ、shine などの光を発する動詞は Theme/Location の構造のみを持っていると考えられる。そうであれば、shine のような動詞を修飾する brightly は Theme/Location が関連する動詞句の下位構造を修飾しており、brightly の生起位置が動詞の後ろ側になることが自然と導かれることになる。

この概念構造はそのまま音の発生を表す動詞の概念構造に適応でき、音の大きさを表す

中核的純様態副詞の 1 つ loudly の生起位置を説明できる。

(125) a. His footsteps **echoed** loudly in the tiled hall.

b. Mac **talked** loudly in favor of the good works done by the Church.

(COB[8] s.v. *loud*)

(125a) では主語の His footsteps が音の発生源である Location であり、音はそこから発せられる Theme と考えることができる。(125b) では主語の Mac は動作主 Agent とも考えられるが、音の発生源である Location の役割も果たしている。音の大きさを表す loudly は音と音の発生源を表す Theme/Location の領域で修飾をしているために動詞の後ろ側に生起し、脱焦点化などの理由がなければ動詞の前側に置かれる可能性は低いことが自然と導かれる。このように音や光の発生を修飾する副詞が動詞の後ろ側に基本的に限定されるという事実を、意味役割を組み込んだ構造を仮定することで説明することができる（西村 2017: 54)。

次に tightly について検討する。tightly と典型的に共起する動詞は「目的語となる物体に力を加えることによって、その物体とまた別の物体との間の隙間を埋める」という意味を表し、tightly はその隙間が小さいことを表すのである。これは動作主の行為の様子を修飾しているのではなく、行為の影響を受ける物体同士の隙間が小さくなるという位置変化・状態変化の修飾である。つまり tightly は Theme/Location に関わるため動詞の後ろに生起するのである。

4.2.2 Theme/Location 指向と Agent 指向の様態副詞

中核的純様態副詞は Theme/Location に関わる修飾であるために動詞の後ろ側に生起するという主張を行ったが、この考えを補強する事例として〈tightly + close〉と〈softly + close〉

を検討する。中核的純様態副詞である tightly は Theme/Location と関連する副詞のため動詞の後ろ側に置かれ、〈tightly + close〉の語順は少ないことが予測される。一方で softly は Theme/Location 指向の修飾をする用法だけでなく、動作主が行う動行為の様子が soft であると表わす Agent 指向の用法も持っている副詞であるため、動詞の前側に生起することも多いと予想される。この予想が言語事実と合致するならば、意味役割を組み込んだ動詞句構造が副詞の統語と意味を探る手段として有用であることの 1 つの証となる。実際に〈tightly + close〉が能動態の述語動詞を修飾している例は 2 例しかない一方で、〈softly + close〉は 15 例ある。これは割合的にも単純な数としても tightly が前置する場合と比べて明らかに高い。[65]

初めに〈tightly + close〉を見てみよう。これらの例は動詞の後ろ側に基底生成された Theme/Location 指向の tightly が動詞の前側に脱焦点化してきたと考えられる。

（126）a. Press out all the air in the bags, then tightly **close** each bag separately.
（COCA 2003: NEWS）

b. ... she would lock me in the bathroom, or, to be more specific, she would find any convenient reason whatever to take me in the most polite manner into the dark little cubicle of the bath facilities and tightly **close** the door, thus removing me from the living space, ... （COCA 1996: FIC）

（126a）では下線部に別の副詞があるために tightly を前置させている可能性がある。[66]また（126b）は下線部で風呂場に閉じ込めることが述べられており、そこからドアをしっかり閉

[65] tightly [close]は COCA で 102 例が検索されるが、上述の通り能動態の述語動詞を修飾する例は 2 例のみである。softly [close]は 22 例が検索でき、上述の通り能動態の述語動詞を修飾するのは 15 例である。この検索結果は 2021 年 8 月のものである。
[66]（119）の例と比較されたい。

めるであろうことは予測できるために tightly の情報価値が薄れて脱焦点化のため前置している可能性がある。tightly が前置する例は少ないことは確かであり、その数少ない例も脱焦点化が原因で動詞に前置したものと考えられる。

次に〈softly + close〉の例を見てみよう。

(127) The man who called himself Guy DeGroot <u>softly</u> **closed** the cabin door behind him.
(COCA 2013: FIC)

この例は Agent である男の行為を修飾している Agent 指向の vP 様態副詞であると考えることができる。[67]よってこの softly は動詞の前側に基底生成していると考えられる。このように softly は vP 様態副詞としての解釈があるため、softly が close の前側に生起しても不思議ではない。もちろん Theme/Location 指向の副詞が脱焦点化によって動詞に前置した可能性もある。

ここまで〈tightly + close〉と〈softly + close〉を検討してきたが、tightly と softly が同じ様態副詞でさらなる下位区分がないとすると、この〈tightly + close〉と〈softly + close〉の生起数や割合の違いを説明することは難しいであろう。このような点からも、今まで様態副詞とひとくくりにされていた副詞の中に Agent 指向と Theme/Location 指向の区別を認めることは重要である。[68]これにより、意味役割を組み込んだ動詞句構造を仮定する意義が示された。また中核的純様態副詞は様態副詞の中でも Theme/Location 指向であることが示された。以下の各節ではそれぞれ中核的純様態副詞とされている loudly、tightly、brightly、

---

[67] ただし 15 例の中には Agent がなく、ドアの位置変化・状態変化を修飾する用法が脱焦点化したと考えるべき例も含まれている。

(i) Julie passes Ray who is still absorbed with the new toy. Behind him, the door <u>softly</u> **closes**. The lock twists. (COCA 1998: FIC)

[68] この区別は vP 様態副詞と VP 様態副詞の統語による区別を、統語と意味役割の両面から見直したものと言える。

woodenly を検討していく。

4.3 loudly の検証[69]

中核的純様態副詞の loudly は Theme/Location 指向の様態副詞なので動詞の後ろ側に限定されると考えられる。4.3.1 節では能動態述語動詞を修飾する loudly の 9 割が動詞の後ろ側に生起すること、そして loudly の典型的な共起動詞は音を発生させる動詞であることを示す。4.3.2 節から 4.3.4 節までは、loudly と共起する典型的な動詞から周辺的と思われる動詞まで、loudly と共起した場合の実例を詳細に検討し、焦点の変化、一般的知識、上書き、比喩などの要素が様々な表現を可能にする基盤であることを見る。4.3.5 節では loudly が動詞の前側に生起する数と共起動詞を示し、一部の動詞と共起する場合には loudly が動詞の前側を基本の位置にしている可能性を指摘する。4.3.6 節と 4.3.7 節ではそのような動詞と loudly の共起例を検証し、比喩的拡張や脱焦点化が意味だけでなく生起位置や用法の変化まで促すことがあることを主張する。

4.3.1 動詞後方の loudly の生起数と共起動詞

この節では loudly を COCA で調査して、生起数の 9 割が動詞の後ろ側であることを示す。また loudly は音の発生を含意する動詞と典型的に共起することを示し、loudly の典型的な意味機能は「音の発生を含意する動詞を修飾し、その発生した音が大きいことを表す」ことであると述べる。

COCA で副詞 loudly は 6196 件検索することができる。ここから COCA のランダムサン

---

[69] 4.3.1 節、4.3.5 節、4.3.6 節は西村（2020）を大幅に発展させたものであり、（128）の検索結果は 2019 年 10 月時点のものである。加筆修正した部分の実例は 2021 年 8 月の検索による。4.3.2 節から 4.3.4 節は西村（2021）の内容を再編したものであり、実例の検索は 2020 年 8 月のものである。また 4.3.7 節の実例の検索は 2021 年 8 月のものである。

プリング機能で 1000 例を抽出して分析する。[70]1000 例の中から loudly が能動態の述語動詞を修飾している 664 例を分析の対象とする。[71]以下の（128）は loudly との共起数が 2 以上の共起動詞であり、括弧内の数字は loudly が動詞の前側に生起している場合の数である。

（128） loudly の共起動詞と生起数

生起数　76: say (1)

57: speak (1)

28: laugh

22: call (2)

18: talk (1)

16: sigh (1), complain (2)

15: knock, ring

14: sing (1), cheer (1)

12: play

9: proclaim (8), shout

8: exhale,

7: whisper (2), whistle, yell

6: ask (1), clear (1), cough, cry, scream, snore

5: clap, protest (2), rap,

4: applaud, bark, blare, click, moan, reverberate, sniff, squawk

3: bang, beat, boom, buzz, crunch, curse, denounce (2), echo, groan,

---

[70] ランダムサンプリングでどの程度を集めればよいかについては Drott (1969) などを参照。

[71] 能動態の述語動詞を修飾している例のみを扱うのは 3 章と同じ理由である。

object (1), purr, rattle, read (1), repeat, swear, whine

2: answer, argue, berate (2), blow, boast (1), boo, breath, creak, declare (1), decry (1), demand (1), gasp, honk, howl, hum, insist, interrupt, mutter (1), pound, praise (1), reply (1), shriek, slap, thud, tick, warn (1), weep

（西村 2020: 183 表 1 に加筆して形式変更をしたもの）

分析対象となった 664 例のうち、動詞の前側に loudly が生じるのは約 1 割に当たる 67 例であり、後ろ側に生起するのが約 9 割になる。この事実から考えると、動詞の後ろ側が中核的純様態副詞の基本的位置であるという記述は正しいといえる。中核的純様態副詞が取りうる用法は以下のようなものであった。

（129）主語　副詞　動詞　副詞

様態副詞

脱焦点化様態副詞、周辺的用法

上記のように loudly が動詞に前置することはあるが、それは多くても実例の 1 割ほどである。

また（128）からわかるのは、loudly の共起動詞の上位はほぼすべて動詞自体に音の発生が含意されている動詞であり、loudly はその発生した音が大きいことを表すということである。つまり様態副詞 loudly の典型的な意味機能は「音の発生を含意する動詞を修飾し、その発生した音が大きいことを表す」ということである。

4.3.2 音の発生が指定されている動詞との共起

本節では loudly が「音の発生を含意する動詞を修飾し、その発生した音が大きいことを表す」という典型的な働きをしている例を検討する。この場合の loudly と動詞は単純な合成性を表すことが多いが、音量が小さいことが示唆される whisper と loudly が共起する場合には、動詞 whisper が表す事態の特定の部分に焦点を当ててその部分と合成することを示す。

まずは次のような典型的な例を見て loudly の意味が「音の発生を含意する動詞を修飾し、その発生した音が大きいことを表す」であることを確認しよう。

(130) Ben **laughed** loudly. (LDOCE[6] s.v. *loud*)

(131) His footsteps **echoed** loudly in the tiled hall. (COB[8] s.v. *loud*)

(130) では「Ben は笑った」ことで、(131) では「彼の足音が響いた」という時点で音は生じており、loudly はその音が大きいことを示している。共起動詞リスト (128) の中には一見音の発生と関係ない add や clear があるが、loudly が共起する場合の add は「付け加えて述べる」の意味であり、clear が loudly と結びつく場合は咳払いするという意味の clear one's throat の一部をなす。

(132) The ring owed him more than a C-note, he reflected soundly, and **added** loudly, for Lili's benefit, "I'll stop the bum dead in his tracks." (COCA 2012: WEB)

(133) Sitting across from her, he'd grunt over the headlines, then loudly **clear** his throat -- a growling, turbulent noise ... (COCA 2007: FIC)

上記用例を観察すると、(132) の add は確かに「付け加えて述べる」という意味であり、(133) も咳払いするという意味である。音の発生が動詞句自体にあるため、loudly はその音が大きいことを表す典型的な使用法だということになる。このように検討していくと、共起動詞リストに出てくる loudly と共起する頻度が多い動詞の大半は典型的な例を形成していることがわかる。

次に whisper が loudly と共起する場合を考察する。 whisper は音の発生があるものの、loudly とは意味的に矛盾するように思われる。しかし whisper によって表される事態の一部分に着目して、その点のみが loud だと解釈することによって矛盾のないものになる。まずは whisper の定義を見てみよう。

(134) whisper の定義

1. to speak or say something very quietly, using your breath rather than your voice
2. to say or suggest something privately or secretly

(LDOCE[6] s.v. *whisper*、用例省略)

whisper の定義には quietly が含まれており、whisper と loudly を合成すると意味的に矛盾するように思われる。矛盾があるかどうか実例である (135) を見てみよう。

(135) a. If you want to have a long conversation while whispering you should probably take your conversation to a far corner where there are less people trying to study or read. Even people on the computer get annoyed when people talk loud or **whisper** loudly next to them. (COCA 2012: WEB)

b. The brothers huddle, **whisper** just loudly enough for Hasari to hear.

(COCA 1992: FIC)

これらはささやき声が大きいという意味である。[72] whisper loudly を声は使わないという点で quiet だが、息を強く出すことによって loud になるという解釈だと考えれば、この組み合わせは矛盾のないものとなる。あるいは図書館や映画館で誰かが小さな音量で whisper しているとする。しかし静かな場所ではそのような whisper でさえ loud に感じることがある。つまり客観的・物理的にはそのささやき声は quiet だったが、主観的・心情的には loud に聞こえたという場合も、whisper と loudly の組み合わせは矛盾しない。日本語でも「ささやき声がうるさい」という表現に違和感はない。このように whisper の表す事態を声と息、あるいは客観的事態と主観的な捉え方などに分割し、その一方に焦点を合わせて loudly は修飾の働きをしていると考えられる。焦点を置く場所を変えるという認知操作によってこのような例が可能となる。

4.3.3 音の発生が指定されていない動詞との共起

loudly は音の発生が指定されていないと思われるような動詞と共起することがまれにある。その場合、一般的知識を参照することによって動詞の表す事態から音が発生する部分を導き出し、その部分を loudly は修飾すると考えられる。

音の発生が指定されていない動詞として walk を検討しよう。 walk は移動を表す動詞であり、say のような動詞と同じ意味では音の発生が含意されているとは考えられない。人が歩けばたいていの場合に音が出るが、「音を出さずに歩く」という表現に矛盾を感じないのは、「歩く」に音の発生が指定されていないからであろう。say loudly などの場合、音の発生は動詞が保証しており、loudly はその音が大きいことを表す。それに対して walk loudly の場合は、loudly があることで音の発生が指定されると考えられる。walk と共起する loudly は、音の発生の指定と音の大きさの修飾という 2 つの役割を果たしていると言える。

---

[72] ここでは whisper が定義 1 の意味であることを前提として分析する。

walk が loudly と共起すると、何の音に対して loudly が修飾をしているのかが一般的知識から導き出される。walk loudly の場合には足音がうるさいという解釈が一般的に導かれることが予想され、実際（136）の walk loudly は波線部からそのような意味と考えるのが自然である。

（136）a. OK. Dating has changed significantly over the centuries. If you were, for example, a Welshman looking for a date in the 17th century, what could you do to ensure you might catch her eye? A, **walk** loudly past her, as passion was considered to be proportional to the volume of footsteps; B, ...

（COCA 2018: SPK）

b. In the morning, heading down to the river for water, I take my rifle and remember to **walk** loudly, recalling the outfitter's advice about bears. “Keep your meat and latrine downwind of camp. Make noise when you go to crap or get wood. Anybody with half an ounce of common sense should be fine.” （COCA 2006: MAG）

このような loudly と walk の意組み合わせは周辺的な用法であると思われる。実際、歩くときに足音がうるさいことを示す場合、英語であれば stamp のような様態が組み込まれた動詞を使うほうが普通であろう。日本語でも「うるさく歩く」は不自然で、「ドタドタ歩く」「ドスンドスン歩く」「大きな足音を立てながら歩く」のような表現のほうがより自然であろう。[73]

[73] このような言語間での様態を表現する方法の違いは Talmy（1985）などからも明らかになっている。

4.3.4 音の発生がないことを含意している動詞との共起

本節では音が発生しないはずの動詞として think を取り上げ、loudly と共起する場合を検討し、2 通りの意味合成のパターンがあると主張する。1 つ目のパターンは、loudly の存在によって強制的に物理的な音の発生が生じる場合ある。もう 1 つのパターンは、物理的な音は発生していないが、think を say something in one's head と同じようなものとして捉えることによって比喩的に音の発生が生じている場合である。前者のパターンは強制という操作が行われる周辺的な例であり、後者は say loudly のような典型例の比喩的な派生であると主張する。

まず LDOCE[6] から think の定義の上位 3 つを（137）に挙げ、loudly との相性がよくないことを見る。

（137）think の定義

1. to have a particular opinion or to believe that something is true
2. to use your mind to decide about something, form an opinion, imagine something etc.
3. to have words or ideas in your mind without telling them to anyone

（LDOCE[6] s.v. *think* 用例省略）

波線部からも明らかなように、think は基本的に頭の中の活動であり、音を発しない動詞である。音の無発生を定義として内包しているため loudly との相性は良くないと考えられる。実際に think と loudly が共起する例は少ないが、しかし全く存在しないわけではない。

次に think と loudly が共起している実例を検討し、loudly が think の意味を上書きする場合があることを示す。以下の例を見てみよう。

(138) a. If I called to tell him where I was or more precisely, where I wasn't he wouldn't say "I told you so," but he'd **think** it loudly enough for me to hear.

(COCA 2001: FIC)

b. It was very nearly her dark eyebrow knitting, but I was afraid to even **think** that too loudly, for fear she'd hear me and beat the tar out of me. (COCA 2006: FIC)

これらの例は波線部の文脈を考えると、考えていることが声に出るという状況を表している。think には音の発生の指定はないが、walk loudly の場合と同じく loudly が音の発生を保証し、かつその音が大きいことを示していると考えられる。しかし think loudly が walk loudly と異なるのは、think の定義の中にある音の無発生の部分を loudly が上書きしているという点である。 このように発話の文脈によって語の解釈がある方向へ強いられることは強制（coercion）と呼ばれる。特に語がもともと持っていた意味が失われたり他の意味に取って代わられたりする場合を上書き（override）ということがある（Audring and Booji 2016）。この例の think loudly はそのような上書きの例であると考えられる。[74]

次に強制とは異なる解釈が必要な例を検討し、周辺的に見える think loudly が典型例からの比喩的派生で説明できる場合があることを示す。次の例を見てみよう。

(139) "Call! Just call!" I **think** loudly in my head.

(https://news.yahoo.com/waiting-undersea-robot-antarctica-call-033000255.html)

この文は波線部 in my head があることから、頭の中で起こっている事象を描写していることがわかる。(138) の例では物理的な音が発生していたが、(139) の例では物理的な音は発生していない。物理世界の音ではなく、思考の世界・精神世界で聞こえているように感じる

[74] 強制については Michaelis (2003, 2004) などを参照。

自身の声が大きいことを意味している。物理的な音が発生していない以上、この例は周辺的な用法に思われるが、このような使い方は say loudly のような典型例と大差ない。思考は頭の中での発話とみなすことができるからである。次の例を見てみよう。

(140) a. *Fuck!* I **say** loudly in my head on my way to my desk. (Google Books)

b. *I love you, Mom*, I **say** loudly in my head. (Google Books)

このように英語でも「頭の中で大声で言う」という例はありふれている。(139) の think loudly の think は say in one's mind に相当するとみなせるので、結局 think loudly は say loudly という典型例と大差ないものである。think loudly と say loudly をつなぐのは、思考を発話とみなすという比喩の力であろう。

4.3.5 動詞前位の loudly の生起数と共起動詞

ここまで loudly が動詞の後ろ側の基本位置に生起している例を検討してきた。この節では動詞の前側に生起している loudly の数とその場合の共起動詞を示す。中核的純様態副詞が動詞の前側に生起している場合は、脱焦点化した Theme/Location 指向の用法か周辺的用法の 2 つの解釈が可能である。この見極めは困難であるが、生起頻度数から動詞の前側が基本の位置とみなせる場合は周辺的用法である可能性が高い。中核的純様態副詞が持つ Theme/Location 指向の用法はあくまでも動詞の後ろ側が基本位置だからである。そこで生起頻度が動詞の前側に偏る場合を集中的に分析し、loudly がある特定の動詞と共起した場合には周辺的用法を獲得していることを示す。

まず COCA の中から loudly が動詞に前置している例を抽出し、その生起数と共起動詞を示す。共起動詞リスト (128) で示した共起動詞から〈loudly + 動詞〉の語順があるものを抜き出したのが次の (141) のリストである。(　) 内にはその動詞と共起する loudly が動

詞の前側に生じている数が示されている。

（141）loudly の共起動詞と生起数

生起数　76: say (1)

57: speak (1)

22: call (2)

18: talk (1)

16: sigh (1), complain (2)

14: sing (1), cheer (1)

9: proclaim (8)

7: whisper (2)

6: ask (1), clear (1)

5: protest (2)

3: denounce (2), object (1), read (1),

2: berate (2), boast (1), declare (1), decry (1), demand (1), mutter (1), praise (1), reply (1), warn (1),

中核的純様態副詞の loudly は次のような用法を持つのであった。

（142）主語　副詞　動詞　副詞

様態副詞

脱焦点化様態副詞、周辺的用法

動詞前位の loudly は脱焦点化様態副詞か周辺的用法のどちらかである。しかし何も方針を持たずこれらの用法の見極めをすることは困難である。だが loudly proclaim、loudly

denounce、loudly berate の場合の loudly は生起頻度を考えると動詞の前側が基本的位置であると言えるので、これらの動詞と共起した場合の loudly は周辺的な用法である可能性が高いことが予測される。以下の各節で loudly proclaim、loudly denounce、loudly berate を分析していき、これらの場合の副詞が周辺的な用法を持っていることを示す。

4.3.6 loudly proclaim の検証

中核的純様態副詞 loudly は Theme/Location 指向の様態副詞であり、動詞の後ろ側が基本位置である。loudly が動詞の前側にある場合、たいていは脱焦点化した Theme/Location 指向の様態用法であるが、脱焦点化する確率は loudly 全体の 1 割程度に過ぎない。そこから考えると、loudly と proclaim が共起する場合にほとんどの loudly が動詞の前側に生起する事実は逸脱的な状況である。

この節では proclaim と共起する loudly がそのような逸脱的な状況を示す理由として、proclaim と共起する場合には loudly が周辺的な用法で使用されているからであるという理由と、proclaim と共起する場合には loudly は脱焦点化しているからだという理由の 2 つが存在し、その 2 つの理由が重なり合うことによって高い確率で loudly が動詞の前側に生起すると主張する。

まず 1 つ目の loudly が proclaim と共起する場合には周辺的な用法を示すという理由を検討しよう。4.1.2 節で以下の例を示して述べたように、loudly は周辺的な用法を持っていることが先行研究で指摘されている。

(143) The prisoner <u>loudly</u> **proclaimed** his innocence. (Shaer (2000: 289))

この例の loudly は声が大きいという様態用法ではなく「自信をもって」という主語の修飾をすると考えられる。実際に動詞に前置する loudly にそのような用法があることが示唆さ

れる実例として次の例を見てみよう。

（144）“He’s a rising star,” I, a lowly graduate student, proudly and loudly **proclaimed** to a room full of seasoned professionals. （COCA 2017: ACAD）

この例で loudly は波線部の proudly と and によって並列されている。proudly には様態用法もあるが、小西（1989:1460）によると、文頭や動詞の前側での proudly は様態用法ではなく主語を修飾する働きだという。よって（144）の proudly は動詞の前側にあるため主語を修飾するものであり、and によって主語修飾の proudly と並列されている loudly も同じく主語の修飾をする機能を果たしている可能性が高い。

次に loudly proclaim の語順が高確率で出現する 2 つ目の理由として、proclaim と共起する場合には脱焦点化しているからという理由を検討しよう。副詞の脱焦点化は、その副詞の情報的な価値が低いときに起こるとして、2.2.4 節では以下の例を挙げていた。

（145）He gently caressed her. （Bolinger (1972: 196)）

gently の意味は動詞 caress から自然と推測されるものなので、gently 自体の情報価値は低く、そのため前置される傾向があるということであった。次の定義によると proclaim は「公に」述べるという意味があり、公に述べる際には自然と声が大きくなる可能性が高い。

（146）1 to say publicly or officially that something important is true or exists
2 to show something clearly or be a sign of something
（LDOCE[6] s.v. *proclaim*）

proclaim が人々の前で公に述べるという意味を強く出した場合、loudly の意味的重要性が

弱まり、脱焦点化して動詞の前に置かれる可能性が高まるというのは妥当な説である。[75]

ここまで、脱焦点化と主語修飾という 2 つの理由から proclaim と共起する loudly は動詞の前側に高い確率で置かれると主張し、それぞれの理由の妥当性を示してきた。最後に 3 つ目の可能性を検討する。3 つ目の理由として考えられるのは、動詞が proclaim のときには高い確率で目的語など loudly 以外の情報価値が高いという可能性である[76]。そうだとすると相対的に loudly の価値は下がり、動詞に前置する可能性が高まる。しかし以下で見るようにその可能性は低い。proclaim の目的語がたまたますべて重たいという可能性であるが、今回分析した loudly proclaim の 9 例中、目的語の長さが 2 語であるものが 2 例、4 語が 2 例、直接引用となっているものが 2 例、間接引用が 3 例であった。目的語の長さが 4 語というのは特に長いわけではない。また直接間接を問わず引用句が目的語に来る場合は、普通の名詞句が目的語に来る場合と異なり、動詞と引用の間に副詞を置くことが容易に可能である。[77] 実際に以下の例では said と波線部の直接引用との間に loudly が置かれている。このような例は一般的である。

(147) One of the whites, an old man by the cracked sound of his voice, **said** loudly,

---

[75] 逆に声の大きさが重要な場面であれば、loudly は次の例のように proclaim と共起していようとも動詞の後ろ側の基本の位置にとどまる。

(i) Before my husband or I could answer, my daughter **proclaimed** loudly enough for everyone to hear, ... (COCA 2009: MAG)

ただしこの例の場合は loudly に情報的に価値があるだけでなく、enough for everyone to hear と一体となって句を形成していることも動詞の前には置けない理由になると言える。

[76] この可能性については西村（2020: 184）の注 9 で述べた。ここではより詳細に検討をする。

[77] ここでは引用句を目的語として扱っているが、直接引用に関しては副詞類（adverbial）としての性質も持つ（Quirk et at. 1985: 1022-1024）。本稿では動詞と直接引用の間には副詞を容易に置くことができるという事実のみが重要であるので、直接引用が名詞句なのか副詞類なのかという議論には踏み込まず、目的語であるとして扱っておく。

"Whoo-ee, Preacher, that's a good'un! Let's sing another. How about the one about the one-legged gal and the deacon? You know that one? It goes like this."

(COCA 2011: FIC)

よって次の例のように引用句を目的語としてとる動詞に前置した loudly があったとしても、引用句があるからという理由だけでは前置の説明にはならない。

(148) Then he thrust out his hand and loudly **said**, "You're a good cousin and I'm glad Nana's last moments were with you, Paulie. Let's shake on it!" (COCA 1999: FIC)

このように見ていくと、引用が目的語として長いことと、副詞が動詞の前側に置かれることとの間の関係は明確ではない。結局、今回の検索結果からは目的語の情報価値・重さが loudly の前置に影響を与えている可能性は明らかではないということになる。[78]

4.3.7 loudly denounce と loudly berate の検証

前節での loudly proclaim の検討に続き、本節でも loudly が動詞の前に高い確率で生起するという逸脱性を示す事例を検討する。本節では loudly の共起動詞が denounce と berate である場合を検討し、loudly がこれらの動詞の前側に生起している場合は脱焦点化した Theme/Location 指向の様態副詞であると主張する。また脱焦点化が進み、様態副詞としての機能がほとんど失われ、強意副詞として解釈するべき事例が存在することも指摘する。loudly が denounce や berate と共起する例は、COCA のランダムサンプリング例だけでは

[78] もちろん語句が長ければ情報価値も比例して高く、短ければ情報価値も低いという単純なものでない。この問題に関しては今後の課題である。

数が少ないため、本節では COCA 全体から用例を抽出することにする。[79]

まずは denounce と berate の生起状況を整理する。これら 2 つの動詞と loudly が共起する場合、以下のように loudly が動詞の前側に置かれる割合が高く、動詞の後ろ側に限定されるという loudly の一般的な傾向からは逸脱している。

表 2 denounce と berate に共起する loudly

	分析対象となる loudly との共起数	loudly + 動詞	動詞 + loudly
denounce	15	14	1
berate	6	5	1

denounce の前側 1 語の範囲と後ろ側 3 語の範囲の loudly を検索すると 22 例となり、そのうち分析対象となる denounce が能動態の主動詞である例は 15 例である。その 15 例のうち loudly denounce の語順が 14 例である。また同じ検索方法で berate と loudly が共起している例を抽出すると 7 例が見つかり、そのうち分析対象とする berate は 6 例である。その 6 例のうち 5 例が loudly berate の語順である。

動詞の後ろ側に生起が強く限定されるという loudly の性質から逸脱している生起状況の原因として、loudly がこれらの動詞と共起する場合には高い確率で脱焦点化するためであると主張する。副詞の脱焦点化は、動詞の意味から副詞の意味が想起されやすい場合に起こりやすいという傾向があり、前の 4.3.6 節では loudly proclaim の語順になる理由の 1 つとして挙げた。副詞 loudly の意味が動詞の意味自体から想起されやすいかどうか、denounce と berate の定義を検討しよう。

[79] この検索結果は 2021 年 8 月のものである。

（149）to express strong disapproval of someone or something, especially in public

（LDOCE[6] s.v. *denounce*）

（150）to speak angrily to someone because they have done something wrong

（LDOCE[6] s.v. *berate*）

denounce は（149）のような定義であり、公の場で強く非難する場合には自然と声が大きくなる可能性が高い。また berate は（150）のような定義であり、怒って話す場合はやはり自然と声が大きくなる可能性が高い。つまり denounce や berate という動詞を使用する場合、その行為は自然と loudly に行われると想起されやすく、そのため loudly は意味的にあまり重要ではなくなり、脱焦点化して動詞の前側に置かれる可能性が高いということになる。このように考えればこれらの動詞と共起する loudly が様態用法だとしても、高い割合で denouce や berate の前側に置かれることは説明が可能である。

本節では loudly denounce と loudly berate の逸脱性のもう 1 つの要因として、loudly が強意副詞としての役割を特定の動詞と共起する場合に獲得しつつあることを示す。脱焦点化がさらに進み、音の大きさを表すという loudly が本来持っている Theme/Location 指向の様態副詞としての機能を失い、行為の激しさに焦点を当てる強意副詞としての用法を獲得しているとすると、そのような副詞は動詞の前側に生起する傾向が強まり、loudly denounce と loudly berate の逸脱性の要因がより明確なものとなる。以下、loudly denouce、loudly berate の順に実例を検討し、これらの動詞と共起する loudly は脱焦点化した Theme/Location 指向の様態副詞、または強意副詞として扱うことができることを示す。[80]

---

[80] 1 例ずつ生起している denouce loudly と berate loudly の語順の例は、どちらも脱焦点化していない Theme/Location 指向の副詞と考えられる。最初は denounce loudly の例である。

(i) Ah dear friends - because it has nothing to do with race, and everything to do with Party

まず loudly denounce の例をいくつか検討する。

（151）An ABC-TV tournament he promoted in the mid-1970's was found to be scandal-ridden. Fighters have loudly **denounced** him for cheating them of money.

（COCA 1990: NEWS）

この（151）の例はお金をだまし取った人物に対しての非難であり、確かにそのような場合には声が自然と大きくなることが予想されるため、この loudly を脱焦点化した副詞だと捉えるのは妥当である。また大声であるかどうかよりも非難の激しさに焦点が当たっていると考えることもでき、その場合は強意副詞と捉えられる。次の例は強意副詞としてより解釈されやすいと思われる例である。

（152）During this campaign, Newt Gingrich has loudly **denounced** Obamacare, but in 2008 he wrote a book entitled "Real Change" in which he endorsed an individual mandate

---

- if it was about race, our friends on the left would abhor the mocking of black conservatives, they would **denounce** loudly the racism of Bill Clinton, Margaret Sanger, Woodrow Wilson, and FDR. （COCA 2012: BLOG）

この例の loudly は大声であるという情報が重要な文脈だと考えられる。次は berate loudly の例である。

(ii) When it became evident to her that he was not going to hand her any money, the girl suddenly knelt down and grabbed on to his leg. The man tried to shake her off, but she squeezed even harder, her face pressed into his trousers. She screamed. Other people stopped to watch. A crowd began to gather. No one attempted to intervene or help either of the parties, and as the man **berated** the child loudly and tried to wrench her fingers apart, tears began to streak down her face. （COCA 2009: ACAD）

例文中の少女は男性にお金を恵んでもらおうとしている。この引用の直前にすでに男性は "Out of the way!" と叫んでいるが、berated the child loudly も大声で子供を追い散らす様子を表す louldy の基本的な用法と考える方がより自然である。

for health insurance. （COCA 2012: WEB）

この例はアメリカ大統領選挙の話であり、候補者の一人である Newt Gingrich が Obama 大統領主導の医療改革を批判していることを伝えるものである。選挙キャンペーンでの批判では声量も自然と大きくことが予測されるので、loudly は脱焦点化していると捉えることができる。またこの loudly が表したいのは批判の激しさであると考えることも自然と可能である。キャンペーンでは激しく Obama を批判しているにもかかわらず、かつては自身も保険加入の義務付け（individual mandate）を著書において支持していたという対比が活きるのも、loudly を激しさと捉えた場合であり、loudly を単に声の大きさだと捉えてしまうとこの対比は弱いものとなるだろう。よってこの loudly は強意副詞の用法である可能性が高い。[81]

次に loudly berate の例をいくつか検討する。

（153）Kramer detested Koch's AIDS policies and would loudly **berate** him in the lobby of their apartment building until the building management threatened Kramer with eviction. （COCA 2002: ACAD）

---

[81] 迫（2001）は、単体では強意副詞として認識されにくい様態副詞が特定の文脈で強意副詞として機能する事例を検討し、その基盤を認知的比喩や事態認知フレームに求めている。ただし、迫が議論しているのは本論文で議論している例よりもさらに創造的な事例と考えられる以下のような例である。

(i) ... the U.S. noisily **vetoed** their choice for NATO secretary-general earlier this month. （迫 2001: 31）

veto は音の発生が特に指定されていないため、COCA では抽出できない程度には noisily との組み合わせが創造的であるが、同時に noisily が本来の音のうるささとは異なる用法（強意副詞）であることがわかりやすい。

波線部にあるように Kramer は Koch（=him）の考えを極度に嫌っている。極度に嫌っているからには berate すれば自然と大声になるはずであり、loudly はなくても支障はないため脱焦点化していると考えることができる。また loudly は大声というだけでなく、言い方や言葉が激しいことを表していると考えることもできるだろう。次の例は loudly を強意副詞として捉えるのがより自然であると考えられる例である。

（154）The most powerful moment occurs when Edwin loudly **berates** his younger brother for having been gone so long, with his complex mixture of anger, relief and love revealed all at once. （COCA 2018: MAG）

この例は映画の書評であり、ある映画の名場面について述べている部分である。この loudly も大声を表す脱焦点化した用法と考えることができるであろう。しかしこの文脈の場合、Edwin がただ単に大声だったから映画の中でこの場面が力強いシーンになったと考えるよりも、Edwin の激しさがこのシーンを力強いものにしたと考える方がより適当であろう。この場面では、loudly が意味的に価値のない脱焦点化した副詞と捉えられるよりも、強意副詞として捉えられる可能性がより高いと思われる。

ここまで loudly が denounce、berate と共起する例を検討してきた。loudly がこれらの動詞と共起する場合、ほとんどが動詞の前側に位置するという事実が明らかとなった。そしてその場合には動詞の意味から loudly が自然と導かれるため脱焦点化して動詞の前側に置かれている解釈と、強意副詞として行為の激しさを表している解釈があることを検討してきた。声の大きさではなく行為の激しさの解釈に関しては、ネイティブスピーカーによって容認度に差が出る。この解釈を認める者は loudly を強意副詞的なものとみなすことを許容し、認めない者は Theme/Location 指向の様態副詞が脱焦点化したものだとみなしていると考えられる。

おそらくこれら動詞の前側に高い割合で前置する loudly は、これを様態副詞としての意味が失われた強意副詞として捉える見方と、様態副詞としての用法は維持しているが脱焦点化をしていると捉える見方とが混然としていると思われる。現在のところ強意副詞の用法は一般的ではないため、限られた共起動詞との間で起こる限定的で周辺的な用法であると考えられる。これらの言語事実は loudly の意味機能の拡張の萌芽的な現状を表すものとして興味深いものである。

4.4 tightly の検証[82]

4.2 節で述べたように、中核的純様態副詞の tightly は Theme/Location 指向の様態副詞なので動詞の後ろ側に生起するのが普通であると考えられる。4.4 節では tightly の詳細な検討を行い、上記の予測が正しいことを明らかにしていく。4.4.1 節では能動態の述語動詞を修飾する tightly のおよそ 9 割が動詞の後ろ側に生起することを示す。そして tightly は「目的語となる対象にエネルギー・力を加えることによって、その対象とまた別の物体との間の隙間を埋めること」を表す動詞と結びつき、その隙間が小さいことを表す副詞であると主張する。4.4.2 節では tightly と典型的に結びつく動詞との共起例を分析し、4.4.1 節の主張を裏付ける。4.4.3 節では隙間を埋めることをその意味として特に所有していない動詞と tightly の共起を分析する。一般的知識からの推測などの働きにより、それらの動詞に隙間を埋めるという一面を読み込むことによって tightly との共起がなされることを示す。 4.4.4 節では動詞の前側に高い割合で生起する場合の tightly がどのようなものであるか検証する。4.4.5 節ではその具体例として tightly control と tightly restrict を分析し、これらが高確率で動詞の前側に生起するのは、これらが脱焦点化した用法である場合に加えて、主語の行為の

[82] 4.4.1 節、4.4.4 節および 4.4.5 節は西村（2020）を大幅に発展させたものであり、(155) の検索結果は 2019 年 10 月のものである。コーパス実例は 2019 年 10 月と 2021 年 8 月に検索したものが混在しているが、すべて 2021 年 8 月に確認した。

様態を修飾する vP 副詞の場合もあるからだと示す。すなわち中核的純様態副詞の本来の用法である Theme/Location 指向から Agent 指向へと変化をしているということである。

4.4.1 動詞後方の tightly の生起数と共起動詞

ランダムサンプリングによって収集した 1000 例のうち tightly が能動態の述語動詞を修飾している例は 369 例である。以下の（155）は生起数が 2 以上の共起動詞であり、括弧内の数字は tightly が動詞の前側に生起している場合の数である。

（155）tightly の共起動詞と生起数

生起数　65: hold

28: grip (3)

27: cover, wrap (2)

20: hug

14: roll

12: squeeze

11: say

10: close, pull

9: clutch

7: fit, grasp, smile, tie

5: grab, pack

4: bind (1), control (4), screw, shut,

3: bound (1), clench, cling (1), pinch, wind

2: clasp, clung, fold, lace (1), link (1), place, press, restrict (2), seal (1), tuck

（西村（2020:187）の表 2 に加筆して形式変更をしたもの）

tightly と共起する上位動詞を意味的に分類してみると、掴む（hold, grip, hug, clutch, grasp, grab)、覆う（cover, wrap)、押す（roll, pull）などに分類できる。これらの動詞は掴んだり、覆ったり、あるいは押したりといった行為は様々であるが、tightly が共起するような文脈では基本的に「目的語となる対象にエネルギー・力を加えることによって、その対象とまた別の物体との間の隙間を埋めること」を表している。隙間を埋めるという定義がなぜ必要なのかは次の 4.4.2 節で述べる。ほとんどの他動詞がエネルギー・力をある対象に加える行為を含んでいるので、この隙間を埋めるという意味が（155）の動詞を他の動詞と区別する要素であると考える。そして隙間を埋めるという意味が tightly との共起を可能にしていると考える。次節では隙間を埋めることをその意味として含んでいる動詞との共起関係、すなわち tightly と共起動詞の典型的な事例を検証する。

4.4.2 隙間を埋めることが指定されている動詞との共起

中核的純様態副詞が動詞の後ろ側に限定されているのは Theme/Location 指向の副詞として状態変化に関わる修飾を行うからだと本章では主張している。本節では tightly が典型的に共起する隙間を埋めることが指定されている動詞と共起する場合を検討し、tightly はその隙間が小さいことを表す副詞であることを示す。これは Agent の行為の様態を表すのではなく状状態変化を修飾するものであり、Theme/Location 指向の副詞であるというという仮定が妥当であることを示すものである。また tightly は必ずしも力・エネルギーが大きいことを表すわけではないことを示し、本章の主張がより妥当なものであることを明らかにする。

まず tightly と共起する典型的な動詞との共起事例について考察することにより、このような動詞と tightly が共起するとき、tightly は Theme/Location 指向の副詞として状態変化

を修飾することを示す。tightly と共起する上位動詞を意味的に分類してみると、掴む、覆う、押すなどに分類でき、これらの動詞は基本的には「力を目的語となる対象に加えることによって、その対象とまた別の物体との間の隙間を埋める」という意味を表している。

(156) Could you **hold** my bag for me? (LDOCE[6] s.v. *hold*)

(157) Dan **covered** his face with his hands. (LDOCE[6] s.v. *cover*)

(158) She **pulled** open the door and harried inside. (LDOCE[6] s.v. *pull*)

(159) She **closed** the curtains. (LDOCE[6] s.v. *close*)

(156) は、主語の手と目的語のバッグの間の隙間をつかむことによって埋めるということを表している。(157) は顔と手の間の隙間を覆うことによって埋めるということを表している。(158) はドアを押し開けたということだが、主語の手とドアの間の隙間を押すことで埋めている。(159) は一方のカーテンに力を加えることによってもう一方のカーテンとの隙間を埋めている。あるいは両方のカーテンに同時に力を加えてカーテンの間の隙間を埋める場合もある。

これら「目的語となる対象に力を加えることによって、その対象とまた別の物体との間の隙間を埋める」ことを表す動詞と典型的に tightly は結びつく。そして tightly はその隙間の度合いが小さくなるということを表すのである。[83]物体と物体との位置変化によって隙間が

---

[83] tightly の定義に関して、鈴木 (2014) は hold と tightly の組み合わせの例である(i)の意味を「「トムによる私の腕を握る行為」によって発生した「エネルギー (握力)」が強力であったことを叙述している (鈴木 2014: 21)」と述べている。
(i) Tom **held** my left arm tightly. (鈴木 (2014: 22))
また Dixon (2005: 108) は hold や grab などの概念構造には道具を表す様態成分である [WITH PERSON'S HAND] あるいは [WITH PERSON'S BODY] が含まれており、それと意味的に合う様態副詞との共起が可能となると述べている。
(ii) John **held** the banana (tightly) with his teeth. (Dixon (2005: 108))

小さくなるという状態変化を表すこの tightly はまさに Theme/Location 指向の副詞である。このように tightly の意味を定義することは、辞書の tightly の定義とも矛盾するものではない。

(160) 1. very firmly or closely

2. in a strict way

3. in a way that shows you are annoyed or worried

4. with not much space between people or things

(LDOCE[6] s.v. *tightly* 例文省略)

これらの定義のうち 1 と 4 は、隙間の度合いが小さくなることを表すという本論文が主張する定義にも沿っている。この定義も tightly が Theme/Location 指向の副詞であることを示していると言えるだろう。[84]

tightly の定義として注意したいのは、必ずしも tightly は力・エネルギーが強いことを表すわけではないということである。もちろん行為の対象が tightly に状態変化をすれば、その変化を起こした行為のエネルギー自体が大きいことが予想される。しかし (159) の例ではカーテンを引くのに大した力は必要ではないであろう。また次の (161) では、力が強ければバナナは噛み千切られてしまうだろう。

(161) John **held** the banana <u>tightly</u> with his teeth. (Dixon (2005: 108)、一部変更)

tightly は行為のエネルギーの大きさには焦点を当てておらず、エネルギーの送り先の対象

これらの定義はエネルギーの強さや様態成分に注目した定義である。

[84] ただし 2 や 3 の定義はここでは扱わずに 4.4.5 節で分析する。

の状態変化を、つまり対象とほかの対象との間の隙間が小さくなるということに焦点を当てていると考えられる。

ここからは実際に共起リストの（155）で示された実例を検討していく。まずは〈動詞 + tightly〉の例でエネルギー・力の大きさよりも対象の状態の方にはっきりと焦点が当たっていると考えられる例を検討する。

（162）The 1100L's paper tray **folds** tightly against the rest of the case, ...

(COCA 2001: MAG)

この例の動詞 fold は自動詞で状態を表しているため、行為の過程を修飾する一般的な様態副詞の用法からは外れるものである。しかし tightly を位置変化・状態変化に焦点を当てた副詞だと考えると、隙間が tight な状態になるように畳まれていたことを問題なく表すことができる。次の例も同様である。

（163）The Institute's food appliances department stored a half-gallon container (the oldfashioned rectangular cardboard cart on that doesn't **close** tightly) of ice cream in the Tupperware container next to an identical half gallon left in its original package.

(COCA 2001: MAG)

この例では容器がしっかり閉まらないと述べられているが、それは力の大小の問題ではなく、隙間が小さくならないという状態変化に関する問題である。例えば古くなってガタがきたことで容器とふたがずれてきているため、容器とふたとの間の隙間がぴったりと埋まらないという状況が考えられる。次の例も同様である。

(164) Whitey rolled the bills **tightly**, wrapped them with a rubber band, and stuck them in his jacket pocket. (COCA 1997: FIC)

この例は札束を握る動作主の握力の強さや握る行為の様態に焦点が当たっていると言えない。札束の厚さにもよるが、お札を巻くのにそれほど力がいるとは限らず、力が大きいことよりもお札とお札が隙間なくぴっちりと巻かれるという状態変化に焦点がある。このように意味的にも tightly は状態変化に関する Theme/Location 指向の副詞だと言える。また状態変化に関する副詞なので動詞の後ろ側に生起が限定されることも自然と導かれる。

もちろん、主体の行為そのものやエネルギーの大きさにより焦点が当たっている事例も多い。たがそのような場合であっても、tightly の使用には隙間が小さくなるという状態変化に関する部分が根幹にあり、行為に対する焦点は推論によって導かれる部分であると考える。以下、行為に対する焦点が弱い例から強い例へと順番に検討しよう。

(165) Your foot should **fit** tightly enough against the sides of the rock to hold your weight. (COCA 2002: MAG)

この例は動詞 fit が動作を強く感じさせないため、tightly が主体の行為に焦点を当てて修飾している度合いは強くないが、波線部が表す目的を達成するために力が大きいことが示唆されている。次の例ではさらに tightly と行為の結びつきが強まる。

(166) Mama **held** tightly to my arm and used my shoulder to support her weight ... (COCA 2004: FIC)

この例は相手（発話者）の手を掴み、さらに肩を借りて波線部が表すように体重を支えよ

うとしている。そのため掴む力がある程度大きいことが予想され、また主語と相手との手の隙間が小さくなるという変化のみならず、手を掴む行為そのものにも焦点が当たっているといえよう。次の例も同様である。

(167) Joan **gripped** the iron bar so tightly the blue veins in her right hand faded to sage-green streaks. (COCA 2007: FIC)

波線部から握力が相当強いことが予測される。主語の手と鉄の棒はぴったりと隙間がない状態だろうが、握るという行為自体にも大きく焦点が当たっていると考えられる。

ここまでコーパスの実例を検討し、tightly が状態変化を示す Theme/Location 指向の副詞であると考えることの妥当性を示した。確かに tightly が動詞の表す行為自体を修飾しているのか、あるいは行為によって起こる位置変化・状態変化を修飾しているのかは境界の曖昧な場合がある。だが全ての tightly の例に共通するのは隙間を小さくするという点であり、これこそが tightly の中心となる要素である。

最後に物理的な隙間の小ささを表す用法から比喩的に拡張した例を検討する。

(168) In particular, ElectronMotive is **linking** analysis and modeling tightly throughout the project. (COCA 1996: ACAD)

動詞 link は物理的なもの同士をつなげる用法があるが、analysis や modeling は物理的な物体ではない。ここでは analysis や modeling を物理的なものとみなす比喩が働いていると考えられる。2 つの目的語が物理的な物体とみなされるのであれば、この tightly 自体の意味用法は位置変化・状態変化を表す典型的なものであり、今まで見てきた典型的事例と変わらないのである。tightly が restrict や control と共起する場合も比喩的な拡張事例である

と考えられるが、これらの動詞と共起する場合 tightly は動詞の前側に生起しやすくなる。この点の詳しい考察は 4.4.5 節で行うことにする。

4.4.3 隙間を埋めることが指定されていない動詞との共起

前節では tightly と典型的な共起動詞との意味の関係性を検証した。そのような典型的な共起動詞の共通した意味は「目的語となる物体に力を加えることによって、その物体とまた別の物体との間の隙間を埋める」というものであったが、そのような意味とは無関係に思える動詞と共起することもある。この節では隙間を埋めることが指定されていない動詞である say と smile が tightly と共起する事例を検討していく。

Levin (1993) では say は意思疎通動詞（verbs of communication)、smile は非言語表現動詞（verbs of nonverbal expression）に分類されており、hold や grip などとは明らかに異なる種類の動詞である。そうであるにもかかわらず tightly と共起できるのはどのような理由からであろうか。1 つの可能性として、この場合の tightly は隙間の小ささを表す用法とは別の意味として使われているという可能性がある。実際に隙間を埋めることとは無関係に思える意味を tightly は定義として持っている。

(169) 1. very firmly or closely
2. in a strict way
3. in a way that shows you are annoyed or worried
4. with not much space between people or things

(LDOCE[6] s.v. *tightly* 例文省略)

tightly と say や smile が共起した場合は定義 3 の意味の場合であり、実際に以下のような例

が見つかる。[85]

（170）“God damn it the hell,” his father **said** tightly, under his voice. Emma wailed. There was intense silence. （COCA 2007: FIC）

（171）“And this? He will truly tell me everything that I must be knowing?” The man **smiled** tightly, impatient to be moving down the lines. “Yes. It tells you everything you need to know about the English.” （COCA 2010: FIC）

say tightly や smile tightly がイライラした様子を表すことができるのは、怒っている人間は口をしっかりと閉じることがよくあるからである。日本語でも唇を結ぶ、口をへの字に曲げるなどの表現があるが、いずれも口をしっかり閉じた状態が怒りを表現している。英語では tight-lipped という一般的な表現がある。以下は辞書の tight-lipped の定義である。

（172）1. not willng to talk about something

2. keeping your lips pressed firmly together, especially because you are angry about something （OALD[9] s.v. *tight-lipped*）

smile や say 自体には何か隙間を埋めることが指定されているわけではないが、tightly と組み合わされることによって唇がしっかりと閉じられていることが連想され、またそこから怒りなどの感情が文脈に応じてさらに連想されることになると考えられる。say や smile と

[85]2021 年 8 月の段階で、COCA で[say] tightly は 76 件が検索されるがそのうち 72 件が FIC（フィクション）レジスターに生起している。また[smile] tightly で検索すると 69 例が見つかるが、64 例が同じく FIC である。このためこれらは日常的に使われるものではないことが示唆される。

tightly が問題なく共起し相応の意味を表すことができるのは、話者や聞き手の一般的知識が両方を適切に結び付けてくれるからである。

4.4.4 動詞前位の tightly の生起数と共起動詞

本節では様態副詞の基本位置から逸脱しているように見える tightly について、どのような動詞と共起する場合に動詞の前側に置かれる確率が高いのか確認する。以下の（173）は 4.4.1 節で示した tightly の生起数と共起動詞のリストから生起数が 2 例以上かつ〈tightly + 動詞〉の語順が存在しているものを抜き出したものである。（　）内が〈tightly + 動詞〉の語順の数である。

（173）tightly の共起動詞と生起数

生起数　28: grip (3)

27: wrap (2)

4: bind (1), control (4),

3: bound (1), cling (1)

2: lace (1), link (1), restrict (2), seal (1)

分析対象となった 369 例のうち、動詞の前側に tightly が生じる例は 25 件あり、割合としては tightly が動詞の前側に生起する数は動詞の後ろ側に生起する数の 1 割に満たない。これは loudly と比べるとより少ない割合である。中核的純様態副詞の tightly は、動詞の後ろ側に生起するのが基本であるということが明確に示された。[86]しかしながら、loudly の場合

[86] 上記の共起リストでは tightly が grip や wrap のような典型的共起動詞の前側にも生じている例が存在することが示されているが、いずれの例も意味的に考えると様態用法であり、脱焦点化によって動詞の前側に生じていると考えられる。以下に具体例を挙げる。
(i) In his hand he tightly **gripped** a dirty piece of cloth, hanging halfway to the ground.

と同じく、特定の動詞と共起する場合に tightly が動詞の前側に高い割合で生起する場合がある。次節ではそのような例として tightly control と tightly restrict を検証する。

4.4.5 tightly control と tightly restrict の検証

共起動詞リスト（173）に挙げられているものの中から動詞の前側に tightly が置かれる割合が高い control と restrict を検証する。これらが高確率で動詞の前側に生起するのは、これらが脱焦点化した Theme/Location 指向の用法である場合に加えて、主語の行為の様態を修飾する Agent 指向の様態副詞の場合もあるからだと示す。ランダムサンプリング全体における検索では、tightly と control の組み合わせは 4 例、tightly と restrict の組み合わせは 2 例あり、それらすべての例において tightly は動詞の前に現れる。以下、それらの例をすべて検証する。[87]

まずは tightly control の例を確認する。

（174）a. Early in the study, Teacher 2 tightly **controlled** her students' communication opportunities. （COCA 2015: ACAD）

b. ... doctors and dentists are expected to be vigilant in following federal drug laws, which tightly **control** the kind of drugs used to sedate patients for dental procedures. （COCA 2010: NEWS）

c. ... between Washington and Pyongyang, which tightly **controls** its media and both

---

（COCA 2016: FIC）

(ii) Tightly **wrap** a doily around a vase. （COCA 2008: MAG）

このように tightly が grip や wrap の前側に置かれている場合、この tightly は脱焦点化した様態副詞であると考えるのが最も自然であろう。

[87] これらの例の一部は西村（2020）ですでに検討したものであるが、そこでは tightly を Theme/Location 指向の副詞と考えてはいなかったため、本論文で改めて検討する。

local and foreign access to information. (COCA 2019: NEWS)

d. Warner said he spent $80,000 on a medical laser and training courses given by Matlock, a regular on "Dr. 90210" who tightly **controls** the dissemination of the procedures through licenses and through trademarks for their names such as " Designer Laser Vaginoplasty. (COCA 2007: NEWS)

(174a) では教師が学生のコミュニケーションの機会をコントロールすること、(174b) では法律が薬物をコントロールすること、(174c) では政府がメディアや情報へのアクセスをコントロールすること、そして (174d) では Matlock がある手順を自由に使えないように商標などでコントロールすることが述べられており、tightly はそれらのコントロールがきついことを示している。次に tightly restrict の組み合わせを確認する。

(175) a. Run by well-educated white-collar professionals in China's biggest cities, the churches own property and have nationwide alliances -- something anathema to the party, which tightly **restricts** nongovernmental organizations.

(COCA 2019: NEWS)

b. Which raises the question: Is an iPhone a good investment for cheaters worried about being monitoredor would it too tightly **restrict** their access to cheating apps?

(COCA 2014: MAG)

(175a) では非政府組織を制限していることが、(175b) ではアプリへのアクセスを制限していることが述べられており、tightly はそれらの制限がきついことを示している。4.4.2 から 4.4.3 節で検証した〈動詞 ＋tightly〉の例のほとんどは単純に物理的な隙間の小ささを表していたが、(174) と (175) のように control や restrict との組み合わせはどれも物理的な

窮屈さを表しておらず、隙間の小ささを表すという tightly 本来の機能を果たしているとは言えない。これらの例の tightly は Theme/Location 指向ではないということである。これらは中核的純様態副詞として考えられている物理的窮屈さを表す用法ではなく、主語の行為の様態を表す用法だと考えたほうがよいであろう。tightly は動作主の行為の力が大きいことを表さないというのが tightly 分析の前提であったが、control や restrict と共起する場合には制御や制限という行為の強さに焦点が当たっていると言えるだろう。このような tightly にとっては周辺的な用法が可能なのは、tight control(s)や tight restriction(s)というコロケーションの存在も影響していると思われる。このような tightly の用法の拡張や変化に関しての検証はさらに必要だが、特定の動詞と共起した場合に限ってその動詞の前側に生起しやすくなる点、それ以外の場合には動詞の後ろ側に生起が強く限定される点は loudly と同じであることが明らかになった。

ここで注意が必要なのは、比喩的な表現が関わっていれば tightly が Theme/Location 指向副詞とは異なる用法を持つことになるわけでないということである。すでに 4.4.2 節で挙げた次の例にも比喩は関わっているが、tightly は Theme/Location 指向の副詞である。

(176) In particular, ElectronMotive is **linking** analysis and modeling tightly throughout the project. (COCA 1996: ACAD)

この場合は analysis と modeling を物体とみなすことができ、その比喩的に捉えられた物体同士の隙間が小さいことを表しているので、tightly 自体はその基本的な意味を拡張させていない。比喩が tightly の意味拡張そのものに関わるものであるかどうかは実例を個別に判断していく必要があるだろう。

4.5 brightly の検証[88]

4.5.1 動詞後方の brightly の生起数と共起動詞

次に brightly の詳細な検討を行う。loudly、tightly の時と同じ方法で COCA のランダムサンプリング機能を用いて brightly が生じている例を集め、brightly が生じる位置と共起動詞を検証する。ランダムサンプリングによって収集した 1000 例のうち brightly が能動態の述語動詞を修飾している例は 319 例であった。括弧内の数字は brightly が動詞の前側に生起している場合の数である。[89]

（177）brightly の生起数と共起動詞

生起数　83: shine

77: say

34: smile

17: burn

7: ask (1)

4: add, blaze, come, gleam

3: flare, flash, twinkle

2: call, chirp, glisten, light, look, pulse, speak, suggest, tell

（西村（2020:189）の表 3 に加筆して形式変更をしたもの）

---

[88] 4.5.1 節、4.5.3 節および 4.5.4 節は西村（2020）を大幅に発展させたものであり、（177）の検索結果は 2019 年 10 月のものである。コーパスの実例は 2019 年 10 月と 2021 年 8 月に検索したものが混在しているが、すべて 2021 年 8 月検索時に確認した。

[89] COCA で brightly と共起する動詞を単純に検索すると、（177）のリストにはない color や light と共起する数が非常に多いことがわかるが、そのほぼ全てが「brightly＋過去分詞＋名詞」のパターンであり、滝沢（2017: 77）の BNC での検索でも同様の結果が示されている。

ほとんどの動詞は shine、burn、blaze、gleam など、動詞自体が光を発することを表している。一方で動詞自体が光の発生を表しているとは思えないものとして say、smile、ask などがあるが、発話に関係がある say、ask などと発話に関係ない smile の 2 種類に大きく分類できる。次節ではまず動詞自体が光の発生を指定している場合を検討する。

4.5.2 光の発生が指定されている動詞との共起

光の発生が指定されている動詞と共起する brightly はその発生した光が明るいことを表し、比較的単純な合成性を示すようである。主語名詞句の種類によって典型的な例から比喩的な例まで段階性があるが、動詞自体が光の発生を含意しているため brightly と動詞の合成のプロセスは単純である。

brightly が生じる典型的な以下の例から検討する。

(178) The crooked lamp once again **burns** brightly. (COCA 1996: FIC)

この例は主語名詞句自身が光を発生させているため、brightly とは典型的に共起する例であると考えられる。次の例では主語名詞句自体は光源ではないが、光を反射させることで輝いているように見える例である。

(179) Mercury **shines** brightly in morning twilight during July's first two weeks.

(COCA 2015: MAG)

(180) Her rose-red lips **shone** brightly against her pale skin. (COCA 2015: FIC)

これらの例では主語名詞句はまるでそれ自体が光を発しているかのように見えるため、

brightly との合成は理解しやすい。

（181）The pear and almond cake at Prairie Fire **shines** brightly. The whole pear is deftly sliced, yet holds its shape, rising out of the cake that surrounds it.

（COCA 2010: NEWS）

この例ではケーキが光の反射で実際にきらきらと輝いて見えるというわけではなく、まるできらきら輝いているかのように素晴らしいものであることを述べていると考えられ、比喩的な輝きを表している。次のような例も比喩的な輝きを表している。

（182）A human lifetime begins, fizzles, **burns** brightly.　（COCA 2007: TV）

以上検討してきた例では主語自体が光を発生させない例も多いが、動詞自体が光の発生を含意しているため、brightly と共起することは問題なく理解できる例である。

4.5.3 光の発生が指定されていない動詞との共起

本節では光の発生が指定されていない動詞と共起する場合の実例を観察し、そのような場合、brightly の存在によって光の発生が導き出されること、また brightly は比喩的な輝きを修飾していることを主張する。

brightly と共起する動詞で光の発生を含意していないものとして（177）のリストには say、ask、smile などがある。以下に実例を挙げる。

（183）“Good game,” she **said** brightly, pulling a paper towel from the dispenser.

（COCA 2015: FIC）

（184）“Is this a social call?” he **asked** brightly. He was eager to talk, perhaps about anything, if I had the time. （COCA 2014: FIC）

（185）She **smiled** brightly and gave Meredydd a last, swift hug. （COCA 1992: FIC）

これらの例で共通しているのは、brightly は明るい様子を表しているということである。特に（185）のように brightly と smile が共起している例ではそのことが明確に示されている。このような組み合わせが可能なのは、smile という動詞は shine という動詞の比喩的な拡張であると捉えることができるからであろう（西村 2020: 190）。微笑みと輝きを比喩的に結び付けることが容易であるため、smile と brightly の共起は典型的な用例に近いといえる。また say や ask と brightly が共起する場合には、say や ask 自体には shine と smile の間にあるような比喩的拡張という要素はないが、brightly 自体が比喩的な光の発生を指定し、さらにその光が強く輝いていることを表す働きをしていると考えられる。比喩的な光とは生命エネルギーや活気などを表し、それが bright であるということは、結局元気な様子、明るい様子を表すということになる。

ここで注意したいのは、これらの動詞との共起には比喩が関係しているものの、brightly 自体は光が強く輝いている様子を表すという意味を変化させていないという点である。光を発生させることがその意味にない say や ask と共起するからといって、brightly 自体が意味拡張をしたわけではないので、この brightly はあくまでも Theme/Location 指向の中核的純様態副詞のままであり、動詞の後ろ側に生起が基本的には限定されるのである。

このように brightly 自体が光の発生とその輝きが強いことを表す用法は、say や ask のような音を出す動詞と慣用的に結びつき一般的な用法となっているが、他の動詞と結びつく頻度は低いようである。例えば光の発生を含意していない動詞として move と brightly が結

びつく場合があるが、COCA 全体でも次の 1 例しか検索されない。

（186）I felt limp from the heat but the local residents -- Mayan Mexicans in light clothes, wide sleeves, pinks and pale yellows -- **moved** brightly along. Everybody looked healthy. （COCA 1991: FIC）

波線部に示されている内容から考えると、move brightly は元気な様子で移動していたことを表していると考えられるが、このような共起関係は一般的ではなく、創造的な使用例であると考えられる。

4.5.4 動詞前位の brightly

ここでは中核的純様態副詞の基本位置から逸脱しているように見える brightly について考察をする。(187）は 4.5.1 節で示した brightly の生起数と共起動詞のリストである（177）から〈brightly ＋ 動詞〉の語順が存在していたものをすべて抜き出したものである。（　）内は〈brightly ＋ 動詞〉の語順の生起数である。

（187）brightly と共起する動詞

生起数　7: ask (1)

1: dawn (1)

brightly が動詞の前方に生起しているのは以下の 2 例のみである。

（188）Brightly **dawns** our wedding day. （COCA 1990: FIC）

（189）To divert her attention from the quantity, and acquire ammunition for my sales pitch,

I brightly **asked**, “What's the stuff for? （COCA 1995: MAG）

（188）に関しては主語が動詞の後ろ側に置かれる倒置が生じており、今まで考察してきた副詞が脱焦点化して動詞の前側に単純に置かれた例とは異なるものであり、本論文では考察の対象外とする。（189）は波線部の内容を考えると、brighty asked は明るい様子で尋ねたという意味であり、明るさを表す brightly の基本的な用法が脱焦点化していると考えるのが一番自然であろう。[90]

（188）と（189）の 2 例を除き、brightly は述語動詞を修飾する際にはその動詞の後ろ側に生起する。loudly や tightly の場合には、いくつかの共起動詞で副詞が先行するのが基本語順と考えられる例が存在したが、brightly の場合には見つからなかった。また loudly や tightly の場合は、脱焦点化などの理由から動詞の前側に生起したと考えられる例が全体の 1 割程度存在していたが、brightly の場合はほぼ存在しないと言ってよいだろう。loudly や tightly に比べると brightly は動詞の後ろ側にさらに強く限定されているようである。

では brightly はなぜ動詞の後ろ側に限定される度合いが loudly や tightly よりもさらに強いのかを考察する。[91]loudly や tightly と比較して brightly が動詞の後ろ側に限定されるという事実を考えると、brightly はそれらの副詞よりも中核的純様態副詞としての性質を強く保持していると主張できるかもしれない。しかしここでは brightly 自体の様態性の強さが原因で動詞の後ろ側に限定されているのではなく、brightly の共起動詞が自動詞であることと関係している可能性を指摘したい。brightly と多くの場合に共起する shine 系の動詞はほと

---

[90] ほかに心的態度副詞の用法などが考えられるが、仮にこの brightly が主語の心的態度を表すと考えると、波線部で示されている客の注意を品質からそらすなどの目的を果たせない。心の中を明るくしても、表面的な様態が伴わなければ客に影響も与えられないからである。

[91] この考察は西村（2020: 190）でも簡単に触れたが、tightly などとの比較や brightly の共起動詞が引用や that 節を従えるパターンの分析を見逃していたため、ここで改めてより詳細に分析することにする。

んどが自動詞として使用されている。すなわち、目的語を強調するために様態副詞を脱焦点化するという選択肢が shine 系動詞と共起しているときには存在しない。そのために brightly は動詞の前置する頻度が loudly や tightly に比べて低く、動詞の後ろ側により限定されているように見えるということである。COCA のランダムサンプリングで集めた brightly1000 例のうち、分析対象とした 319 例の共起動詞の自動詞と他動詞の割合はほぼ 2：1 である。tightly の共起動詞の自他の割合は逆に 1：2 であり、brightly の共起動詞は自動詞の割合が高い。また brightly と共起する他動詞のほとんどは say が引用句や that 節を従えているパターンである。動詞を修飾する副詞を長い名詞句の後ろに置くと解釈に支障をきたす場合には、その副詞を動詞の前に置くことがある。しかし目的語として働く引用句や that 節の間には副詞を問題なく置くことができるため、引用句や that 節が目的語として長いからといって様態副詞を動詞の前側まで移動させる必要はない。[92]brightly と共起する動詞は自動詞か、あるいは他動詞であっても say のような動詞であり、これらの動詞と共起する場合、brightly には脱焦点化して動詞の前側に置かれる理由がそもそもないのである。結局のところ brightly が loudly や tightly と比較して動詞の後ろ側に生起位置が強く制限されているように見えるのは、brightly 自身の様態性の強さという性質よりも、brightly と共起する動詞の性質によるものだという結論が妥当であろう。[93]

---

[92] また直接引用の場合、以下のように引用句が倒置する場合も多いが、その場合も副詞を基本の位置から脱焦点化のために動かす必要はない。
(i) “Oh, I know!” she **said** brightly. (COCA 1991: FIC)
引用句倒置については Quirk et al. (1985: 1025）、Bruening (2016）などを参照。

[93] loudly と共起する動詞の自他の割合はおよそ 9:4 であり、実は loudly は brightly よりも自動詞と共起する割合が多い。つまり自他の割合からだけでは脱焦点化して動詞の前側に置かれる割合の大小は必ずしも予測できないということになる。本節では brightly と共起する他動詞の具体的な中身も検討することによって、brightly が動詞の前側にほとんど生起しない理由を論じている。

4.6 woodenly の検証[94]

4.6.1 動詞後方の woodenly

次に woodenly を検討していく。woodenly は頻度が低いため COCA 全体から検索し、欠課として 46 例を抽出することができ、これらの例のうち能動態の述語動詞を修飾している 33 例が分析の対象となる。これら分析対象のうち、動詞の前側には 4 例のみしか生起していないので、その他の中核的純様態副詞と同じく動詞の後ろ側が woodenly の基本位置であるといえる。生起数が 1 のものを除く共起動詞のリストは（190）のようになる。括弧内の数字は woodenly が動詞の前側に生起している場合の数である。

（190）woodenly の共起動詞と生起数

生起数　7: stand

6: say

4: stare

2: describe (2), sit

（西村（2020:190）の表 4 を形式変更したもの）

wooden の定義の中で woodenly に関わるのは次のようなものである。

（191）not showing enough expression, emotion, or movement, especially when performing in public

[94] 4.6 節は西村（2020）を大幅に発展させたものであり、（190）の検索結果は 2019 年 10 月のものである。コーパスの実例は 2019 年 10 月と 2021 年 8 月に検索したものが混在しているが、すべて 2021 年 8 月検索時に確認した。

ここから woodenly は「感情や動きを示さないように」という意味になると考えられ、特に演技などのパフォーマンスがぎこちない様子などを表すようである。[95]COCA では以下のような実例がある。

(192) His mother **stood** woodenly, face impassive. (COCA 2002: FIC)

(193) Kempton **sits** down woodenly and silently. (COCA 1995: FIC)

このような例の場合、stand や sit は立っている状態や座っている状態を示す状態動詞と考えられる。よってこの文の主語は行為を行う Agent というよりも、それぞれの動詞が表すような状態でそこに存在する存在物、すなわち Theme とみなされるだろう。そのような場合、woodenly は Theme の位置変化・状態変化（無変化を含む）を表す Theme/Location 指向の副詞なので動詞句の後ろ側に生起するのが自然となる。

だがすべての例を Theme/Location 指向の副詞として捉えることは難しいだろう。次の例は動詞の前側に置かれている例ではあるが、Agent が存在していると思われるので検討しておこう。

(194) Helsse woodenly **played** a set of trills and runs. (COCA 1993: FIC)

この例は Theme/Location 指向の副詞ではなく、Agent の行為の様態を表す副詞が動詞の前側に置かれていると考えられる。そうだとすると woodenly は他の中核的純様態副詞とは異なり、Agent 指向の様態用法を持っているということになる。woodenly に関しては COCA 全体でも事例が少ないため明確な主張はしにくいが、ほとんどの場合において動詞句の後

[95] woodenly を演技の文脈以外では使わないというインフォーマントもいる。そのような人にとっては、4.6 節で議論される例文のほとんどは不適切であるとみなされる。

ろ側に生起することは他の中核的純様態副詞と同様である。

4.6.2 動詞前位の woodenly

ここでは様態副詞の基本位置から逸脱しているように見える woodenly について考察をする。(195) は 4.6.1 節で示した woodenly の生起数と共起動詞のリストから、〈woodenly + 動詞〉の語順が 2 例以上存在していたものを抜き出したものである。

(195) woodenly と共起する動詞

生起数　2: describe (2)

他の中核的純様態副詞とは異なり、woodenly は行為の様子を修飾する用法があることをすでに 4.6.1 節で述べ、その用法が脱焦点化していると考えられる例を示した。つまり woodenly に関しては次のような可能性を考慮して分析する必要がある。

(196) 主語　副詞　動詞　副詞

位置・状態（無）変化の副詞、行為の様態副詞

脱焦点化した位置・状態（無）変化の副詞、

行為を修飾する様態副詞、

周辺的用法

woodenly が describe と共起する 2 例はすべて woodenly が動詞の前に置かれている。以下がその具体例である。

(197) a. A past notice for a technical consultant slot at the Department of Energy, for instance, woodenly **described** the job as “using all your communication and

scientific skills to ensure that the proper environmental, safety, and health programs are developed and implemented." (COCA 2004: MAG)

b. Times man Michael Specter doesn't woodenly **describe** the strategy memos of sundry campaign consultants; ... (COCA 1992: MAG)

まずはこれらがAgent指向の様態副詞である可能性を検討する。これらの例ではそれぞれ、目的語名詞句がどのようなものであるかの説明の方法が wooden であることを表す、主語の行為を修飾する様態用法として捉えることが可能である。また長い目的語の後ろ側に副詞を置くと、文の意味解釈に支障をきたすことも考えられ、それを回避するために動詞の前側に置かれている可能性もある。

次に、woodenly が Agent 指向の様態用法以外の周辺的な用法を持つ可能性を探り、woodenly が主語の性質を表すことがあると主張する（西村 2020: 191）。先ほど示したように、(197）の例は Agent 指向の様態副詞と考えても問題ないと思われる。しかし意味的なことを考えれば、例えば（197a）を wooden な様子・方法で説明するという意味でとるのではなく、主語である a notice が wooden だと表す用法と考えるほうがより状況を適切に表しているように思われる。4.3.6 節で挙げた proudly のように、副詞が行為の様態ではなく主語を修飾する場合には、その副詞は動詞の前側に置かれるのが基本とされる。(197）の例の woodenly もそれに似た主語の性質を示す機能を果たしていると解釈することが可能である。実際そのような解釈を woodenly に認めるネイティブスピーカーもいるが、woodenly に様態用法しか認めないネイティブスピーカーもいるのが現状である。この現状を考えると、woodenly に様態解釈以外の用法が生じている可能性はあるものの、それが一般的に認められる用法としては確立していないと結論できる。

結局、woodenly が持つ用法の可能性は次のようになる。原理的にはあり得るはずの「脱焦点化した位置・状態（無）変化の副詞」は（　）に入れておく。

(198) 主語　副詞　動詞　副詞

位置・状態（無）変化の副詞、行為の様態副詞

行為を修飾する様態副詞、

主語の状態・性質を修飾する副詞、

（脱焦点化した位置・状態（無）変化の副詞）

woodenly は生起数が少なため確定的なことは言えないが、他の中核的純様態副詞ほど Theme/Location 指向の意味に強く限定されている副詞ではないと考えられる。それでも loudly や tightly のときと同じように、特定の動詞と共起するときにのみ動詞の前側に置かれる頻度が高くなることがある。このように loudly、tightly、woodenly が共通して、逸脱的にある特定の動詞の前側に生じることがある以上は、なぜそのような状況が生じるのか個々に詳細に分析をすることが重要である。それにより新たに生じつつある用法の存在を探ることは重要なことである。

4.7 まとめ

本章では動詞の前後に生起する中核的純様態副詞としての loudly、tightly、brightly、woodenly を検証してきた。これら中核的純様態副詞と呼ばれる副詞は状態変化に関わる Theme/Location を指向するため、動詞の後ろ側に生起が限定されているという主張を行い、それぞれの副詞がどのように状態変化に関わっているのかを検討してきた。また実際にコーパスの生起数と事例を検証することにより、これらの副詞の大半が動詞の後ろ側に生起しているという事実を明らかにした。これらの副詞と結びつきにくいと思われる動詞との共起の際には、比喩や上書きなどの様々な認知操作が働くことによって共起が可能となることを示した。またこれらの副詞がある特定の動詞と共起する場合には逸脱的な頻度で動

詞の前側に生起することがコーパスの調査結果によって明らかとなった。これらを個別具体的に分析した結果、それぞれの副詞は動詞の前側に生起する場合、次のような解釈が可能であることが判明した。

(199) 動詞前位の loudly
・脱焦点化した中核的純様態副詞（Theme/Location 指向）
・主語の状態・性質を修飾する副詞（Agent 指向）
・強意副詞

(200) 動詞前位の tightly
・脱焦点化した中核的純様態副詞（Theme/Location 指向）
・行為の様態副詞（Agent 指向）

(201) 動詞前位の brightly
・脱焦点化した中核的純様態副詞（Theme/Location 指向）

(202) 動詞前位の woodenly
・行為を修飾する様態副詞（Agent 指向の様態副詞）
・主語の状態・性質を修飾する副詞（Agent 指向）
（・脱焦点化した位置・状態（無）変化の副詞）

また、これらの副詞が本来持つ様態用法以外の周辺的な用法を示す場合には、これらの副詞に対して意味的拡張を促すような比喩が関わっていることが示された。副詞に対して意味拡張を促す比喩とそうでない比喩があり、より詳細な検討が今後必要になるであろう。

第５章　まとめ

本論文では現代英語の様態副詞を中心とする動詞句修飾副詞をコーパスの実例を通して詳細に検討し、実証的な記述語法研究を行うことによって今まであまり本格的に検討されることがなかった事象に対して分析を行うことができた。

第 2 章では副詞研究の概観を行い、様態副詞の基本的な性質と、様態副詞と同形の他の用法を持つ副詞が動詞の前後に生じることを示した。また副詞を統語構造にどのように位置付けるのか、先行研究を概観しながらその問題点を指摘し、動詞句修飾をする副詞の分析のためにはマクロな意味役割を組み込んだ構造を仮定した。この構造の仮定によって Agent 指向や Theme/Location 指向という分類が可能になった。統語構造上、Theme/Location 指向の副詞は動詞の後ろ側に生起し、また意味役割の観点から位置変化・状態変化に関わる意味を持つことが予想されることが示された。そしてこの予想の妥当性を分析するための対象として下位範疇化副詞と中核的純様態副詞が適切であることを示した。

第 3 章では下位範疇化副詞を再考し、これらの副詞が持つとされた省略不可能性と前置不可能性に対して、従来の統語的・意味的説明では説明できないことを示した。その上で、これらの副詞が状態変化の結果や程度を修飾する Theme/Location 指向の働きがあると仮定すれば、従来の下位範疇化副詞という分類が必要ないことを示した。下位範疇化副詞を状態変化修飾の副詞に再編するという仮定の妥当性を、先行研究で挙げられてきた例を個別具体的に検討することによって示した。さらにコーパスの実例を詳細に検討することによって、その妥当性をより確からしいものとした。

第 4 章では中核的純様態副詞を検証した。中核的純様態副詞は様態用法しか持たず、脱焦点化して前置する以外は基本的には動詞の後ろ側に位置すると言われてきた。この動詞の後ろ側に限定されるという性質は、これらの副詞が Theme/Location 指向の位置変化・状態変化に関わる修飾をする副詞であると仮定すれば、その仮定から自然と導かれる性質であると主張した。様態副詞は動作の行為の過程を修飾するものであると一般的に考えられ

ているため、loudly や tightly などはあくまで主語の行為を修飾するものとして捉えられてきた。しかしこれらを詳細に分析してみると、動作の行為そのものではなく、動作の行為によって生じる位置変化や状態変化に関する修飾をしていると考えるべきであることが明らかとなり、その考えの妥当性を示した。さらに中核的純様態副詞が高い確率で特定の動詞の前側に生じている事例を指摘した。このような事例が生じている例を個別に検証することによって、Theme/Location 指向の状態変化を修飾する用法が脱焦点化して動詞の前側に生じる場合だけでなく、主語の性質を表す用法や強意用法というこれらの副詞が本来持っていないと考えられていた周辺的な用法が生じていることを示した。このような場合には比喩が関連することによって副詞の意味機能の拡張も促されていることを指摘した。

本論文を通して、意味役割を組み込んだ統語構造から導き出される位置変化・状態変化を修飾する Theme/Location 指向の副詞を仮定することの有用性と妥当性を示すことができ、副詞の実態解明に寄与ができていれば幸いである。最後にこれからの副詞の研究の展望について述べる。様態副詞であるとされてきたものの中には、動作の行為そのものではなく、動作の行為によって生じる変化を指向していると考えられるものがあるというのが本論文の主張であった。本論文ではその主張を下位範疇化副詞や中核的純様態副詞と呼ばれてきた副詞に適用してその妥当性を示してきた。Theme/Location 指向副詞がより広範囲な場面で有効なものかどうかは今後の課題となるが、適用の可能性がある例の 1 つとして以下の文を見てみよう。

(203) a. He **read** the book carefully.

b. He carefully **read** the book.

この文の carefully は主語の行為の様子が careful であったことを示すことができる。外側からこの事態を見て主語の行為の様子が careful だとわかる場面として、真剣な表情で読んで

いるとか、指で文章をなぞりながら読んでいるなどの状況が考えられる。上記の 2 例文はどちらともそのような状況を表すことができる。また注意深く読むという場合、本そのものを傷つけないように読むという状況も考えられるだろう。しかしそのような解釈は（203a）でしかできないようである。[96]この目的語名詞句を傷つけないように読むという解釈は、目的語名詞句の状態変化（あるいは状態無変化）に焦点を当てた Theme/Location 指向副詞であると考えれば、動詞の後ろ側にある（203a）では容易にその解釈が可能であるが、動詞の前側にある（203b）ではその解釈が困難になると説明することができる。このような微妙な生起位置による解釈可能性の相違を新たな副詞の分類で捉えられるとすると、今まで明らかになっていなかった言語事実の発掘と整理がなされる可能性は十分にあるであろう。仮にそうなれば、本研究が新たなる理論の進展と記述研究のきっかけとしての役割を果たせることになるだろう。

[96] 例えば本が貴重な文化財である場合などが想定される。ただしインフォーマントによって判断に違いがある。

参照文献

Audring, Jenny and Geert Booij (2016) "Cooperation and Coercion," *Lingustics* 54, 617-637.

Alexiadow, Altemis (1997) *Adverb Placement: A Case Study in Antisymmetric Syntax*, John Benjamins, Amsterdam.

Baker, Mark (1988) *Incorporation: A Theory of Grammatical Function Changing*, The University of Chicago Press, Chicago.

Baker, Mark (1997) "Thematic Roles and Syntactic Structure," *Elements of Grammar: Handbook of Generative Syntax*, ed. by Lilian Haegeman, 73-137, Kluwer, Dordrecht.

Barsalou, Lawrence (1992) "Frames, Concepts, and Conceptual Fields," eds. by Adrienne Lehrer and Eva Feder Kittay, *Frames, Fields, and Contrasts*, 21-74, Erlbaum, Hillsdale, New Jersedy.

Bolinger, D (1972) *Degree Words*, Mouton, The Hague.

Borer, Hajit (2005) *The Normal Course of Event: Structuring Sense Volume II*, Oxford University Press, Oxford.

Borer, Hajit (2013) *Taking Form: Structuring Sense Volume III*, Oxford University Press, Oxford.

Broccias, Cristiano (2008) "Toward a History of English Resultative Constructions: The Case of Adjectival Resultative Constructions," *English Language and Linguistics* 12 (1), 27-54.

Bruening, Benjamin (2016) "Alignment in Syntax: Quotative Inversion in English," *Syntax* 19, 111-155.

Chomsky, Noam (1965) *Aspects of the Theory of Syntax*, The MIT Press, Cambridge, Mass.

Chomsky, Noam (1986) *Barriers*, The MIT Press, Cambridge, Mass.

Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, The MIT Press, Cambridge, Mass.

Cinque, Guglielmo (1999) *Adverbs and Functional Heads*, Oxford University Press, New York.

Declerck, Renaat (1991) *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*, Kaitakusha, Tokyo.

Dixon, Robert M. W. (2005) *A Semantic Approach to English Grammar* (Second Edition), Oxford University Press, New York.

Drott, Milton Carl (1969) "Random Sampling: A Tool for Library Research," *College and Research Libraries* 30 (2), 119-125.

Edelstein, Elspeth (2012) *The Syntax of Adverb Distribution*, Doctoral dissertation, University of Edinburgh.

Engels, Eva (2004) *Adverb Placement: An Optimality Theoretic Approach*, Doctoral dissertation, University of Potsdam.

Ernst, Thomas (1984) *Towards an Integrated Theory of Adverb Position in English*, Indiana University Linguistics Club, Bloomington, Indiana.

Ernst, Thomas (1998) "The Scopal Basis of Adverb Licensing," *NELS* 28, 127-142.

Ernst, Thomas (2002) *Syntax of Adjuncts*, Cambridge University Press, Cambridge.

Ernst, Thomas (2007) "On the Role of Semantics in a Theory of Adverb Syntax," *Lingua* 117, 1008-1033.

Eszes, Boldizsár (2009) "Aspect and adverb interpretation – the case of *quickly*," ed. by Katalin Kiss, *Adverbs and Adverbial Adjuncts at the Interface*, 269–294, De Gruyter.

Fillmore, Charles (1986) "Pragmatically Controlled Zero Anaphora," *Proceedings of the Berkeley Linguistic Society*, 95-107.

Geuder, Wilhelm (2000) *Oriented Adverbs*, Doctoral dissertation, Universität Tübingen.

Geuder, Wilhelm (2004) "Depictives and Transparent Adverbs," *Adverbials: The Interplay*

between Meaning, Context, and Syntactic Structure, ed. by Jennifer R. Austin, Stefan Engelberg, and Gisa Rauh, 131-166, John Benjamins, Amsterdam.

Geuder, Wilhelm (2006) "Manner modification of states," *Proceedings of Sinn und Bedeutung* 10, 111–24.

Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions*, University of Chicago Press, Chicago.

Greenbaum, Sidney (1969) *Studies in English Adverbial Usage*, Longman, London.

Grimshaw, Jane (1990) *Argument Structure*, MIT Press, Cambridge, Mass.

Groefsema, Marjolein (1995) "Understood Aguments: A Semantic/pragmatic Approach," *Lingua* 96, 139-161.

Hale, Kenneth and Samuel Keyser (1993) "On Argument Structure and the Lexical Expression of Syntactic Relations," *The View from Buinding 20: Essays in Linguistics in Honor of Sylvain Bromberger*, ed. by Kenneth Hale and Samuel Keyser, 53-109, MIT Press, Cambridge, Mass.

Haumann, Dagmar (2007) *Adverb Licensing and Clause Structure in English*, John Benjamins, Amsterdam.

Himmelman, Nikolaus and Eva Schultze-Berndt (2005) "Issues in the Syntax and Semantics of Participant-oriented adjuncts: An Introduction," *Secondary Predication and Adverbial Modification: The Typology of Depictives*, ed. by Nikolaus Himmelman and Eva Schultze-Berndt, 1-67, Oxford University Press, Oxford.

Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge University Press, Cambridge.

Jackendoff, Ray (1972) *Semantic Interpretation in Generative Grammar*, MIT Press, Cambridge, Mass.

Jackendoff, Ray (1990) *Semantic Structure*, MIT Press, Cambridge, Mass.

Larson, Richard (1988) "On the Double Object Construction," *Linguistic Inquiry* 19, 335-391.

Kaga, Nobuhiro (2007) *Thematic Structure: A Theory of Argument Linking and Comparative Syntax*, Kaitakusha, Tokyo

Koev, Todor (2017) "Adverbs of Change, Aspect and Underspecification," *Proceedings of SALT* 27, 22-42.

Laenzlinger, Christopher (1998) *Comparative Studies in Word Order Variation: Adverbs, Pronouns, and Clause Structure in Romance and Germanic*, John Benjamins, Amsterdam, Philadelphia.

Laenzlinger, Christopher (2004) "A Feature-based Theory of Adverb Syntax," *Adverbials: The Interplay between Meaning, Context, and Syntactic Structure*, eds. by Jennifer Austin, Stefan Engelberg and Gisa Rauh, 205-252, John Benjamins, Amsterdam, Philadelphia.

Langacker, Ronald (1987) *Foundations of Cognitive Grammar, vol. 1: Theoretical Prerequisites*, Stanford University Press, Stanford, California.

Levin, Beth (1993) *English Verb Classes and Alternations*, The University of Chicago Press, Chicago.

Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (2005) *Argument Realization*, Cambridge University Press, Cambridge.

Levinson, Lisa (2007) Doctoral dissertation, New York University.

Matsuoka, Mikinari (2013) "On the Notion of Subject for Subject-oriented Adverbs" *Language* 89, 586-618.

McConnel-Ginet, Sally (1982) "Adverbs and Logical Form," *Language* 58, 144-184.

Michaelis, Laura A. (2003) "Word meaning, sentence meaning and constructional meaning,"

eds. by Hubert Cuyckens, René Dirven and John Taylor, *Cognitive approaches to lexical semantics*, 163–210, Mouton de Gruyter, Berlin & New York.

Michaelis, Laura A. (2004) "Type shifting in construction grammar: An integrated approach toaspectual coercion," *Cognitive Linguistics* 15(1). 1–67.

Nakajima, Heizo (1982) "The V4 System and Bounding Category," *Linguistic Analysis* 9, 341-378.

Payne, Amanda (2018) *Adverb typology: a computational characterization*, Doctoral dissertation, University of Delaware.

Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1972) *A Grammar of Contemporary English*, Longman, London.

Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London

Radford, Andrew (1997) *Syntactic Theory and the Structure of English: A Minimalist Approach*, Cambridge University Press, Cambridge.

Rothstein, Susan (2004) *Structuring Events*, Blackwell Publishing, Oxford.

Schäfer, Martin (2002) "Pure Manner Adverbs Revisited," *Sinn and Bedeutung VI, Proceedings of the Sixth Annual Meeting of the Gesellschaft für Semantik*, 311-323.

Schäfer (2008) "Resoliving Scope in Manner Modification," eds. by Oliver Bonami and Patricia Cabredo Hofherr, *Empirical Issues in Syntax and Semantics* 7, 351–372.

Shaer, Benjamin (2000) "Syntactic Position and the Readings of 'Manner' Adverbs," *ZAS Papers in Linguistics* 17, 265-286.

Suzuki, Daisuke (2018) "The Semantics and Pragmatics of Modal Adverbs: Grammaticalization and (Inter)subjectification of Perhaps," *Lingua* 205, 40-52.

Swan, Michael (2016) *Practical English Usage*, 4th ed., Oxford University Press, Oxford.

Talmy, Leonard (1985) "Lexicalization Patterns: Semantic Structure in Lexical Forms," *Language Typology and Syntactic Description (Volume III): Grammatical Categories and the Lexicon*, ed. by Timothy Shopen, 57-149, Cambridge University Press, Cambridge.

Tenny, Carol (1994) *Aspectual Roles and the Syntax-Semantics Interface*, Kluwer, Dordrecht.

Tenny, Carol (2000) "Core events and adverbial modification," eds. by Tenny, Carol, Pustejovsky, James, *Events as Grammatical Objects*, 285–334 CSLI, Stanford, California.

Thomason, Richmond and Robert Stalnaker (1973) "A Semantic Theory of Adverbs," *Linguistic Inquiry* 4, 195-220.

Thompson, Ellen (2006) "The structure of bounded events," *Linguistic Inquiry 37*, 211–228.

Travis, Lisa (1988) "The Syntax of Adverbs," *McGill Working Papers in Linguistics (Special Issue onComparative Germanic Syntax)*, 280–310.

Vendler, Zeno (1957) "Verbs and times," *Philosophical Review* 56, 143-160.

石川慎一郎・長谷部陽一郎・住吉誠（2020）『コーパス研究の展望』開拓社，東京.

岡田伸夫（1985）『副詞と挿入文』大修館書店，東京

加賀信広（2001）「意味役割と英語の構文」米山三明・加賀信広『語の意味と意 味役割』第II部，研究社，東京

小西友七（編）(1989)『英語基本形容詞・副詞辞典』研究社，東京.

鈴木英一（1990）『統語論』開拓社，東京.

鈴木博雄（2014）『英語副詞配列論』ひつじ書房，東京.

鈴木博雄（2017）「英語における価値判断や心的態度を表す形容詞及び主語指向副詞が従える補部の情報特性について」『学苑』922 号, 27-41.

滝沢直宏（2017）『ことばの実際 2　コーパスと英文法』研究社，東京.

立石浩一・小泉政利（2001）『文の構造』研究社，東京.

谷光生（2019）「名詞修飾機能を持つ-ly 副詞について」『英語語法文法研究』第 26 号, 141-158.

出水孝典（2006）「様態副詞 slowly と動詞の語義」『日本語用論学会大会発表論文集』第 2 号, 195-198.

中右実（1980）「文副詞の比較」國廣哲彌編『日英語比較講座第二巻文法』,157-219，大修館書店，東京.

西村知修（2016）「主題関係と動詞句副詞」『西南学院大学大学院研究論集』第 2 号，1-13.

西村知修（2017）「動詞句修飾の副詞の生起位置と解釈について」『西南学院大学大学院研究論集』第 4 号，43-55.

西村知修（2019）「wisely の生起位置と意味機能について」英語コーパス学会第 45 回大会口頭発表原稿.

西村知修（2020）「様態副詞の基本位置とそこからの逸脱」八木克正・神崎高明・梅咲敦子・友繁義典（編）『英語実証研究の最前線』179-193，開拓社，東京.

西村知修（2021）「様態副詞 loudly に関する考察―典型例から周辺的事例への拡張メカニズム―」『Quest: studies in English linguistics and literature』第 26 号, 20-32.

迫由紀子（2001）「VP 前位修飾の様態副詞の認知的意味機能について」『福岡女子短大紀要』第 59 号, 27-38.

廣瀬幸生（1986）「発話動詞補文と話し手の主観的真偽判断」『英語青年』132 巻 7 号、314-318，研究社，東京.

藤本滋之（2019）「文型再考」『英語英文学論集』第 59 巻, 3 号, 121-153.

松井夏津紀・影山太郎（2009）「副詞と二次述語」影山太郎（編）『形容詞・副詞の意味と構文』260-292，大修館書店，東京.

辞書

COB[8]: Collins COBUILD Advanced Learner's Dictionary, 8th edition (2014); HarperCollins, Glasgow.

LDOCE[6]: Longman Dictionary of Contemporary English, 6th edition (2014); Pearson, Harlow.

OALD[9]: Oxford Advanced Learner's Dictionary, 9th edition (2015); Oxford University Press, Oxford.

コーパス

COCA: The Corpus of Contemporary American English.